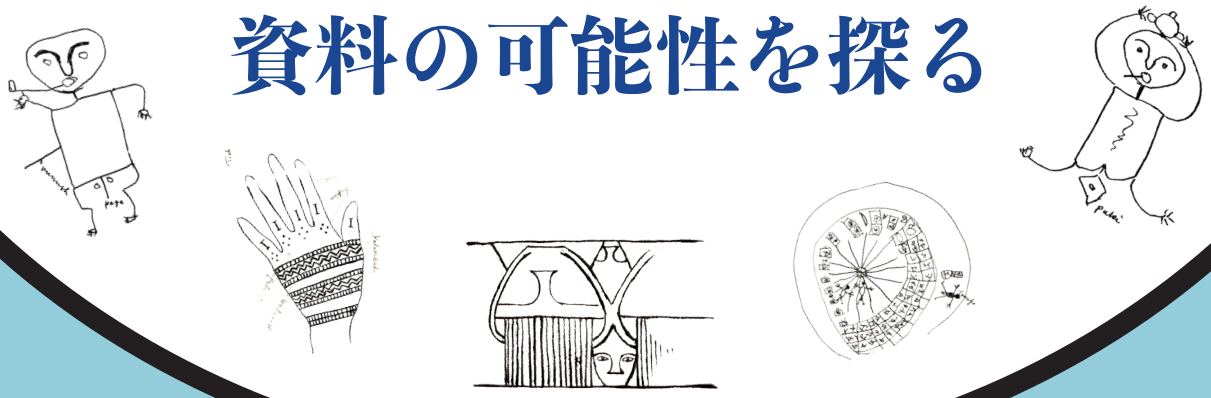
国際シンポジウム

鳥居龍蔵と台湾

資料の可能性を探る



2023年
3月12日［日］12:20～17:00
会場：文化の森　多目的活動室

図：鳥居龍蔵フィールドノート（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 蔵）より、 写真：東京大学総合研究博物館 蔵

鳥居龍蔵がつなぐ台湾と徳島の文化交流事業実行委員会

目　次

鳥居龍蔵と台湾、そして資料の意義
―シンポジウムの開催にあたって思うこと― …… 1
長谷川賢二（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）

鳥居龍蔵による台湾調査関連資料の概要について …… 4
石井伸夫（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）

鳥居龍蔵と台湾 ～同志たちとの協働を中心に～ …… 15
宮岡真央子氏（福岡大学）

與鳥居龍藏共行―臺灣原住民族的發展及國立臺灣史前文化博物館的角色 …… 26
鳥居龍蔵と共に歩む―台湾先住民族の発展と国立台湾史前文化博物館の役割― …… 43
陳　俊男氏、林　慧仙氏、曾　于宣氏（国立台湾史前文化博物館）
翻訳：山西弘朗氏（香川大学）

容顔之外：鳥居龍藏排灣族照片中的環境、物種與當代風貌變遷初探 …… 54
容貌以外の着眼点　―鳥居龍蔵が撮影したパイワン族の写真の中の環境、
種族と当時の様子とその変遷についての初歩探求― …… 67
張　至善氏（国立台湾史前文化博物館）
翻訳：永本智富氏（徳島文理大学）

日本の初期人類学と鳥居龍蔵 ～起源探究の方法論への関心～ …… 73
野林厚志氏（国立民族学博物館）

日　程

12：20 ～ 12：30　開会あいさつ
長谷川賢二（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）

12：30 ～ 12：50
報告「鳥居龍蔵による台湾調査関連資料の概要について」
石井伸夫（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）

12：50 ～ 13：30
講演「鳥居龍蔵と台湾 ～同志たちとの協働を中心に～」
宮岡真央子氏（福岡大学）

13：30 ～ 14：30
講演「與鳥居龍藏共行―臺灣原住民族的發展及國立臺灣史前文化博物館的角色」
陳　俊男氏、林　慧仙氏、曾　于宣氏（国立台湾史前文化博物館）
通訳：山西弘朗氏（香川大学）

14：40 ～ 15：40
講演「容顏之外：鳥居龍藏排灣族照片中的環境、物種與當代風貌變遷初探」
張　至善氏（国立台湾史前文化博物館）
通訳：永本智富氏（徳島文理大学）

15：40 ～ 16：20
講演「日本の初期人類学と鳥居龍蔵 ～起源探究の方法論への関心～」
野林厚志氏（国立民族学博物館）

16：20 ～ 16：55
パネルディスカッション「資料の可能性を探る」
・パネリスト：宮岡真央子氏
陳　　俊男氏
張　　至善氏
野林　厚志氏
長谷川賢二
・コーディネーター：石井　伸夫

鳥居龍蔵と台湾、そして資料の意義

― シンポジウムの開催にあたって思うこと ―

長谷川　賢　二

ついに実現した対面交流

このたびの国際シンポジウム「鳥居龍蔵と台湾―資料の可能性を探る―」は、昨年９月に徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（以下「当館」）が国立台湾史前文化博物館（以下「史前館」）との間で連携協定を締結した後、台湾の皆様を初めて徳島に招聘して行う学術的な取組である。

すでに先月、私どもは台湾にお招きいただき、かつて鳥居が調査したパイワン族の居住地域に足を踏み入れることができた。日頃、鳥居のフィールドノートの輪読及び内容検討を重ねつつあるが、そこに記録された調査の現場に立ったという実感を得るとともに、台湾先住民族の文化継承という現代的課題についても認識を深めた機会であった。

宮岡真央子氏（福岡大学）のご仲介により、両館の交流の機運が芽生えたのは、鳥居龍蔵生誕150周年の2020年度だった。しかし、コロナ禍に妨げられて、対面交流ができないまま、協定もオンラインでの締結となったことを思い返すと、相互訪問がようやく実現したことは、実に感慨深いものである。

ここに至るまで、王長華館長をはじめとする史前館職員の懇切丁寧なご対応、宮岡氏、野林厚志氏（国立民族学博物館）や、天羽利夫氏が主宰する民間研究団体「鳥居龍蔵を語る会」のメンバーをはじめとする各位からのご指導、ご支援をいただいてきた。さらに、2022年度の交流事業については、その意義をご理解いただいた文化庁から援助を受けた。心から感謝申し上げる。

鮮烈な記憶

ところで、「鳥居龍蔵と台湾」というと、思い出すことがある。全くの私的な経験であるが、まずはこのことを記しておこう。1997年、私は生まれて初めて台湾を訪れた。台北に到着してすぐに元教師だったというガイドの男性と合流したが、彼はこう話したのである。「徳島からお越しですか。鳥居龍蔵先生の故郷ですね」と。私の知る限り、徳島県民の多くは鳥居の名さえ知らない。同行した家族も、「誰？」という有様だった。それだけに、初対面の人から鳥居の名が出てきたこと、徳島と結びついていたことに、たいそう驚いた。彼の話によれば、台湾では鳥居は優れた日本人学者として記憶されているのだということだった。この印象は衝撃的でさえあった。

ちょうどその頃、後述する日本での鳥居に対する再評価の動きが台湾に波及し、一種のブームとなっていたらしいが、それを知ったのは後年のことである。

また、インターネット情報により、台湾の博物館で鳥居龍蔵らが展示で取り上げられている様子を知り、さらにはGehrtz三隅友子氏（徳島大学）から、台北市役所に鳥居ら日本人学者の紹介展示があることを教わったことがあり、あのときのガイドさんの話は折に触れて脳裏に浮かんでくるのであった。

鳥居龍蔵の再評価と鳥居龍蔵記念博物館の開設

上記のような記憶が刻印された1990年代は、鳥居の存在と業績に対する再評価の機運が急速に高

まった時期だった。鳥居は、大正期には著書『有史以前の日本』がベストセラーとなるほど高名であったが、晩年は不遇であったし、1953年に他界した後には忘却されてしまったといっても過言ではない。

状況が大きく変わったのは、東京大学総合研究資料館（現東京大学総合研究博物館）が所蔵する鳥居の撮影に係る写真乾板の再生と整理、成果の刊行や展覧会の開催が機縁となっている。さらに、国立民族学博物館と徳島県立博物館でも、写真や民族資料、考古資料を集成した展覧会が開催された。徳島展における記念講演会には、台湾考古学の第一人者であった宋文薫台湾大学教授を招聘し、台湾における鳥居の業績と意義について語っていただいたものである。

徳島県では、1965年に県立鳥居記念博物館（以下「旧館」）が鳴門市に開設され、郷土の先人として鳥居の顕彰が行われていた。しかし、県民の関心を惹くことはあまりなかったようである。鳥居の再評価が始まったところで、研究者や博物館などといった学術レベルの限られた世界でのことであり、鳥居に対する一般的な認識が大きく変わることはなかった。先に紹介した私の記憶は、そうした時期のことであった。

だが、再度の転機が訪れる。2000年、旧館で膨大な資料（鳥居の蔵書や原稿、ノートなど）が再発見され、マスコミや学界の話題となったのである。地元だけでなく、在阪のメディアの関心も高く、広く注目された。

そのため、資料の保存・活用の促進に関心が集まり、急ピッチで概要把握が推進されたが、その流れは旧館の移転、資料収蔵環境の整備の必要性などといった議論につながっていくことになった。その結果、図書館や博物館、近代美術館など５つの県立文化施設が集中配置されている徳島県文化の森総合公園に、６番目の施設として「徳島県立鳥居龍蔵記念博物館」と改称した当館が開設されたのである。2010年秋のことであった。

資料の可能性

爾来10余年を経た今、当館は、文化の森の中では人員も設備も最小規模の施設でありながらも、独特の専門性を持って存在感を放っている。ほぼ毎年、海外からの来館調査の受け入れが続いていることなどは、とくに際だった特色である。こうした来館が継続する理由は、およそ７万点といわれる資料（書籍、雑誌、原稿、ノート・メモ、写真、考古資料、民族資料など）の存在である。これらの大半は鳥居の遺品であり、それゆえに彼に関するイメージの更新と深化を可能にする資料群を収蔵しているといえる。だからこそ、鳥居自身を研究する場合は当然だが、ほかにも、例えば中国史やアイヌ民族に関する研究に伴って鳥居関係資料を参照する必要が生じることがあり、各所から照会や閲覧・調査の要望がしばしば寄せられているのである。

実は、当館では今もまだ、館蔵資料の確認や調査、整理を続けており、全容の把握は終わっていない。しかし、完璧を期すばかりでは、いつまでも資料へのアクセスを開放することができず、鳥居自身を対象とする研究は無論、関連する分野の研究の発展も阻害することになってしまう。そこで、一部だけでも資料の存在を発信し、活用できる環境を整備するため、企画展の開催や常設展の展示替え、研究報告等の刊行物において、従来未公開であった資料をできるだけ紹介するようにし、そうやって存在を明らかにした資料は、館外研究者の閲覧・調査に供することができるものとしている。

さらに、文化の森の文化施設全体の共同事業として、2019年度から構築している「とくしまデジタルアーカイブ」のなかで、鳥居自身や妻きみ子のフィールドノート、日記など、研究活動の実態を知る上で有用と思われるものについて、高精細画像を撮影・公開している。現在132件について画像を公開中である。その他、館蔵資料データベース（目録）も2020年度から公開を始めているが、こちらはまだデータ量が少ないため、課題が多い。

このような経緯から、私どもの資料との向き合い方は、何よりも外形や内容の把握とその記録データを蓄積することを最優先するものであった。「鳥居龍蔵を語る会」メンバーらボランティアと共同で行っている整理作業の中で、ときに議論に及ぶことがあったり、職員が個別に関心を深めたものについて分析することがあるものの、例えていうなら、それは「氷山の一角」に過ぎないのが実情で、

資料の中身に踏み込む余裕のあまりないまま時間が経過してきた。

そうはいっても、鳥居関係資料を大量に所蔵する博物館としては、資料の詳細に立ち入った知見の蓄積が求められるのは必然で、それは当館の使命でもある。一方で、鳥居のフィールドと研究内容の広さは周知のとおりで、時間をかけた資料との対峙は実にハードルが高い。

そこで史前館との交流を機に、まずは鳥居の台湾調査を館蔵資料から検証することを当館の組織としての目標として設定することになり、現在、フィールドノートの輪読による精査を継続しているところである。鳥居の台湾調査関係資料としては、写真や地図、人体計測カード、メモ、ノートなどがある。

なかでも、フィールドノートは調査の現場で書かれたものであり、その時点での鳥居の見聞や調査の内容を伝えてくれるばかりか、日記的な側面もあることから、彼の興味・関心、思考といった内面に関する情報も豊富である。台湾に関するものはデジタルアーカイブにおいても公開しており、誰もが見ることができる状態になっている。

ただし、これらに分け入るのは容易ではない。鳥居のクセの強いくずし字や土地勘のない地域に関する記載を読み解くのであるから、作業は難航する。それでも、解読を重ねることで、生々しい鳥居の肉声が浮かび上がってくるのである。最近は台湾研究の専門家である野林氏の参加もあり、氏のご教示によって私どもの理解も深まるようになってきた。様々な分野からの相互乗り入れによる資料研究は、今後ますます重要になるに相違ない。

鳥居はフィールドノートをもとに調査旅行の日誌を公刊することがあるが、後日の整理を経ているため、現場の思考や意識がそのまま表現されていない場合がある。また、論文や報文、講演の一部にノートに記載された知見が反映されている場合もあるが、やはり懸隔はある。私自身、最近、鳥居の中国西南部調査に関して著書とノートの差異に興味深い問題があることを知り、そこに彼の意識のあり方が見いだせるのではないかと考えたので、なおさらノートの意義を感じている。そのようなことからも、「資料の可能性」はきわめて大きく、大海のような広がりを持つと確信している。鳥居の台湾調査の実像はもちろん、実在した等身大の鳥居をとらえる上でも資料研究の前進が期待されると考えている。

ここでは館蔵資料に限定して述べたが、鳥居に関連する資料は国内外の各所に存在する。それらをも視野に入れながら、「鳥居龍蔵と台湾」をめぐる活発な議論と今後の交流の進展を念願している。

鳥居龍蔵が調査した場所（力里旧社）で解説をうける（2023年２月10日）

鳥居龍蔵による台湾調査関連資料の概要について

石　井　伸　夫

はじめに

鳥居龍蔵の台湾調査は、1896（明治29）年から1900年までの間にほぼ毎年連続するかたちで４回行われ、さらに1910年にも第５回目の調査が実施されている。20歳代後半から30歳代にかけての青年期の調査である。その内容は、専門である形質人類学的調査に加え、発掘調査や遺物採集を中心とする考古学的調査、現地住民からの「聞き取り」にもとづく民族学的調査など、多様な手法にもとづくものであった。特に、人類学としては最も早い時期に写真撮影を導入し、台湾原住民族の生活状況を活写したことは、現在でも高く評価されている。また、これらの調査を通して、後年に続く鳥居の調査スタイルが確立していったことも注目される。

これらの調査で鳥居が残した資料は、現在、国内の数カ所に分散保管されている。主な所蔵機関は、東京大学総合研究博物館（以下「東大博」）、国立民族学博物館（以下「民博」）、及び徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（以下「鳥居博」）の３館である。

本稿は、鳥居の台湾調査関連資料の概要について整理し、報告することを目的とする。先ず、東大博及び民博に所在する資料の概要について紹介し、その後に、鳥居博に所在する資料の詳細について報告することとし、もって当該資料のポテンシャルを議論する際の基礎的素材の提供としたい。

１　東京大学総合研究博物館所蔵の資料について

鳥居は、東京帝国大学人類学教室の一員の立場で台湾調査を実施している。したがって、調査成果である資料の大半は、東京帝国大学に提出されており、現在は東京大学総合研究博物館（旧称・東京大学総合研究資料館）に保管されている。資料は写真資料と考古資料が中心となっており、当初併せて保管されていた民族資料については、1975年に国立民族学博物館に移管されている。以下、資料カテゴリごとに概略を記す。まず写真資料からはじめたい。

鳥居撮影の写真資料については、長らくガラス乾板の状態で保管されてきたが、1990年に、「東京大学総合研究資料館標本資料報告」の第18号から21号として、『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影　写真資料カタログ』（以下「カタログ」）の名称で刊行され（図１）、世界的に見ても最初期に撮影された人類学的映像資料として一躍注目を浴びた。「カタログ」は４部からなるが、台湾関連の写真資料は、第２部及び第３部に該当する。対象となる部族は、第２部は、ヤミ族・アミ族・プユマ族・パイワン族・ルカイ族、第３部が、タイヤル族・セデック族・ブヌン族・ツオウ族・カナカナブ族・サアロア族・サオ族・平埔族・漢族・その他となっており、台湾の原住民族のほとんどすべてをカバーしている。「カタログ」の写真掲載数は、第２部が317枚、第３部が336枚となっており、合計で653枚にも及ぶ大部なコレクション

ISSN 0910-1566
東京大学総合研究資料館
標本資料報告　第１８号
The University Museum, The University of Tokyo
Material Report No. 18
東京大学総合研究資料館所蔵
鳥居龍蔵博士撮影　写真資料カタログ
第１部　解説
鳥居龍蔵写真資料研究会編
The Torii Ryuzo Photographic Record of
East Asian Ethnography
Part 1: Text
Edited by
Torii Ryuzo Photographic Record Society
平成２年　東京
1990年　Tokyo
徳島県鳴門市撫養町妙見山公園
徳島県立鳥居記念博物館

図１　鳥居龍蔵博士撮影 写真資料カタログ

である。写真は、人間を中心画題とする「人物写真」と、風景・建築・器物などに焦点をあてた「非人物写真」の二つに大別され、さらに「人物写真」は、身体測定データと対を為す「ポートレート」（正面からの肖像写真）と、原住民族の日常生活を捉えた「スナップ」の２種に分類が可能である。

図２　人面彫刻のあるスレート屋根住居

図３　ポートレート

図４　脱穀中のアミ族の人々

次に、考古資料の概要について言及したい。鳥居龍蔵をはじめとする東京人類学教室の研究者が台湾で収集した考古資料は、現在、東京大学総合研究博物館内で、２カ所に分かれて保管されている。一つが、標本番号PA8－11からPA10－15のスチール製棚に保管されているグループ（以下「PA群」）であり、今一つが標本番号PE8－10－20からPE8－11－21の木製棚に保管されているグループ（以下「PE群」）である。ともに洗浄等の基礎的な処理は完了しているものの、詳細については、未整理かつ未公開の標本群となっている。鳥居博では、2022年11月１日・２日の両日、鳥居龍蔵収集の台湾関係考古資料の総量を把握するため、東大博において資料調査を実施した。以下、調査の概要を記す。

資料点数は、PA群が489点、PE群が554点、総数で1043点である。資料の種別は、PA群がすべて石器であることに対し、PE群は土器片、石器、釧、骨、貝、木製品の混成となっている。PA群、PE群とも、厚さ約10cmの引き出しに収納されており、各引き出しにPAもしくはPEで始まる標本番号が付されている。各引き出しの資料数及び種別の詳細は表２（PA群）、表３（PE群）のとおりである。なお、表３に「箱」とあるのは、各引き出し内に収納された幅約20cm、奥行約15cm、厚さ約５cmのガラスケース（図９）を指す。それぞれに小型の土器片、石器片、玉類等複数の資料が収納されているが、今回の調査では時間的な制約で個体数が把握できなかったため、表３では一括で「箱」として表示した。したがって資料総点数は、上述の1043点から若干増加することとなる。

当該資料は引き出し単位で管理されており、散逸や劣化の懸念はない状態にあるが、個体ごとの確認、記録、検討はできていない。各個体には、墨書による注記があり、採集年月日や採集地点、採集者などに関する情報が得られる。採集者については鳥居龍蔵が多くを占めることが予想されるが、なかには松村僚など、東京大学人類学教室の別の研究者の名前も散見され、この面からも確認と整理が必要である。

このような状況に鑑み、現在、東大博と鳥居博の連携事業として、当該資料の基礎的確認事業が計画されつつある。その内容は、①2023年度単年度事業として実施することとし、②東大博から鳥居博が１年間資料を借り受ける。③鳥居博が資料調査指導委員会（委員会のメンバーは表１のとおり）を立ち上げ、その指導のもとに基本的な資料確認を行う、④確認内容は、収蔵位置（棚別標本番号）、種別（石器、土器、骨器など）資料年代、法量（長径・短径・厚さ）、採集場所、注記事項（採集

表１

陳　有貝	国立台湾大学　教授
葉　長庚	国立台湾史前文化博物館　助理研究員
康　芸甯	国立台湾史前文化博物館　研究助理
野林厚志	国立民族学博物館　教授
海部陽介	東京大学総合研究博物館　教授
角南総一郎	神奈川大学　准教授
中村　豊	徳島大学　教授
高島芳弘	徳島県立博物館　元館長
長谷川賢二	徳島県立鳥居龍蔵記念博物館　館長

年月日、採集者など）を中心とし、これに個体ごとに必要限度の写真を添付し一覧化するものである。調査成果は、「東京大学総合研究博物館標本資料カタログ」の一巻として刊行し、公開する予定である。

表２

	石　器
PA8-11	74
PA8-12	68
PA8-13	58
PA8-14	41
PA8-15	80
PA8-16	39
PA10-12	23
PA10-13	15
PA10-14	58
PA10-15	33
小　計	489

図５

図６

図７

表３

	箱	土器片	石　器	釧	骨	貝	木製品	紙　片
PE-8-10-20	6	13	7					
PE-8-10-21	1	0	14	1				
PE-8-10-22	3	3	0					
PE-8-11-1	11	0	0					
PE-8-11-3	0	7	0					
PE-8-11-4	0	76	1		21	5	1	
PE-8-11-6	1	14	0					
PE-8-11-7	0	0	16					
PE-8-11-10	0	30	0					
PE-8-11-11	0	1	3		2			
PE-8-11-13	0	0	10		71	31		
PE-8-11-14	0	2	10					
PE-8-11-15	2	15	0					1
PE-8-11-16	0	0	4					1
PE-8-11-17	0	0	2					
PE-8-11-18	2	8	11					
PE-8-11	4	10	5					
PE-8-11	0	85	0					
PE-8-11	0	42	1					
小　計	30	306	84	1	94	36	1	2

図８

図９

図10

図11

２　国立民族学博物館所蔵の資料について

第１章で見てきたように、鳥居龍蔵は台湾の現地において、多くの写真を撮影するとともに、発掘調査や遺物採集を行い資料の蓄積を図ったが、これと併行して、原住民族が使用する民具や祭祀用具等の民族資料も積極的に収集した。鳥居をはじめとする東京帝国大学人類学教室のメンバーが収集した民族資料は、写真資料、考古資料と同様に、当初、彼の所属する東京帝国大学に収められたが、戦後、1974年に国立民族学博物館が創設され、その翌年、1975年に東京大学から同館に一括して寄託され保管されており、その総点数は約6200点にものぼる。

これらの民族資料のうち、鳥居龍蔵が蒐集したと確認できるものは、現在のところ372点であり、その地域別の内訳は以下のとおりである。

台湾関係資料・・・・・・・・94点　　西南中国関係資料・・・・・・・・25点
千島列島関係資料・・・・・・68点　　サハリン関係資料・・・・・・・・58点
アムール川流域関係資料・・・69点　　中国東北部・モンゴル関係資料・・57点
朝鮮半島関係資料・・・・・・１点

上記のとおり、点数的には台湾関係資料が最も多く、なかでも1897年の第２回調査（紅頭嶼調査）で収集したヤミ族関係のものが72点と大半を占めていることに特徴がある。

資料には、収集原簿にあたる「土俗品目録」や「カード」が添付されており、それらには、原簿番号、資料名称、収集地などが記載されている。民博では、これらの記載内容をコンピューター入力し、電子媒体として活用できる目録を作成しており、先に紹介した東大博資料や、次に報告する鳥居博資料と突き合わせることによって、大きな活用効果が期待できる資料群となっている。

3　徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵の資料について

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館には総数で７万点にも及ぶ鳥居龍蔵の収集品が所蔵されている。台湾関係資料も相当数存在するが、いまだ整理作業の途上にある資料もあり、現時点で正確な資料数は示すことはできない。東大博及び民博の資料が、正式な調査成果物として提出されたものであることに対して、鳥居博収蔵資料は、鳥居龍蔵個人の「手控え」的なもの、換言すれば、調査報告のバックデータ的なものが多くを占めており、彼の調査活動の具体的内容を検証するにあたって、格好の素材となっている。

資料は大きく、（１）フィールドノート、（２）メモ、ノート類、（３）地図、（４）身体測定表、（５）写真の五つに大別できる、以下、この種別に即して報告したい。

（1）フィールドノート

台湾関係のフィールドノートは23冊確認されている。法量は、大半が縦15cm×横10cm程度のいわゆる掌サイズの小型ノートであり、その内容については、現在、「徳島県立鳥居龍蔵記念博物館デジタルアーカイブ」上で公開されている。ノートの記載様式は、縦書き、横書き双方が用いられており一定していない。文字は概ね日本語で記されているが、「くずし字」的な筆致で、鳥居独特の書き癖もあり難読である。また、地名や村落名、現地住民が用いる器物名や人名などについては、筆記体のアルファベットで音写されており、その正確な理解には台湾の現地情報が必要である。記載内容は、概ね日付単位で記される日記形式であり、現地で見聞きしたものや調査した事例が時系列に綴られている。また、記載文を補う目的で、随所に地図、実測図、スケッチ等が描かれており、調査内容の確認上、有効である。フィールドノートの具体例として、1900（明治33）年に行われた第４回調査の様子を書き留めた「たかさごの旅」（一）の写真（図12～15）を掲げておこう。

図12

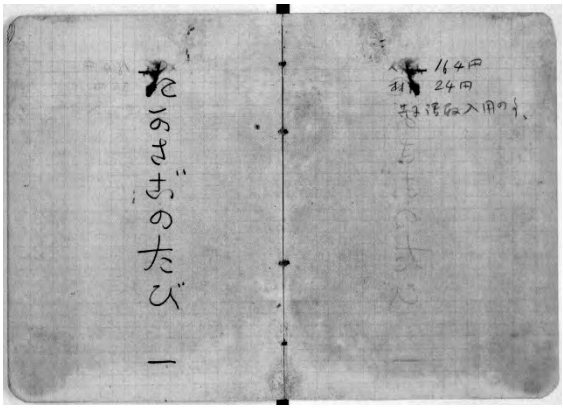


図13

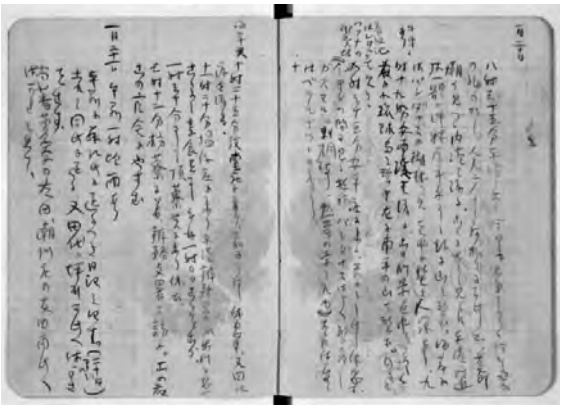


図14

図15

フィールドノートのなかで今一つ注目すべきは、掌サイズの小型ノートが大半を占めるなか、唯一、縦15cm×横20cmを測る大判のノートが存在することである。その内容は絵画や図形が大半を占めており、画帳（スケッチブック）として用いられたものである。収載された絵画は、鳥居自身が描いたものと、原住民族に依頼して描いてもらったものの二つに大別できる。鳥居の描いたものは、現地で確認した器物等のスケッチが多く写実的である（図16､17）。これに対して､原住民族の手になるものは、描き手が複数存在することもあり、極めて多様である。抽象画的なものや図形も多く見られ、彼らの世界観をストレートに示す資料として貴重である（図18、19）。以下に、それぞれの描いた絵画の一例を掲げておきたい。

●鳥居龍蔵が描いたと想われるもの

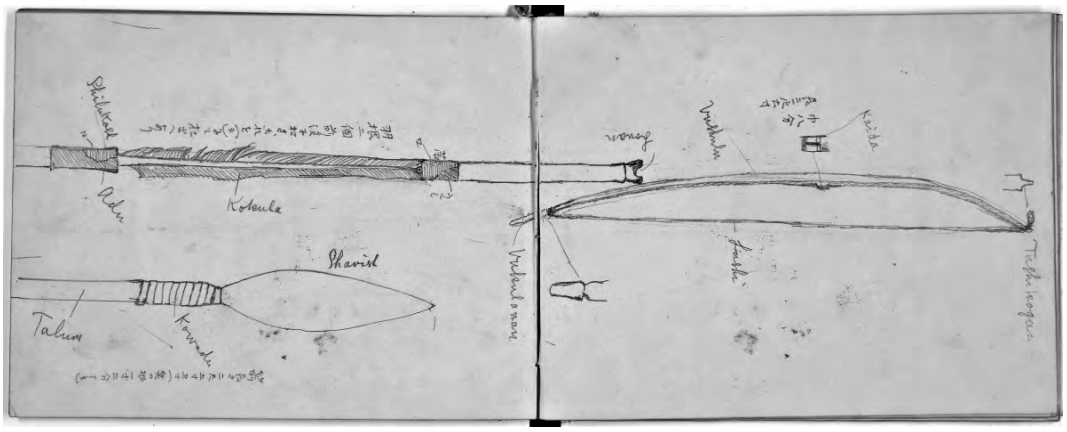


図16

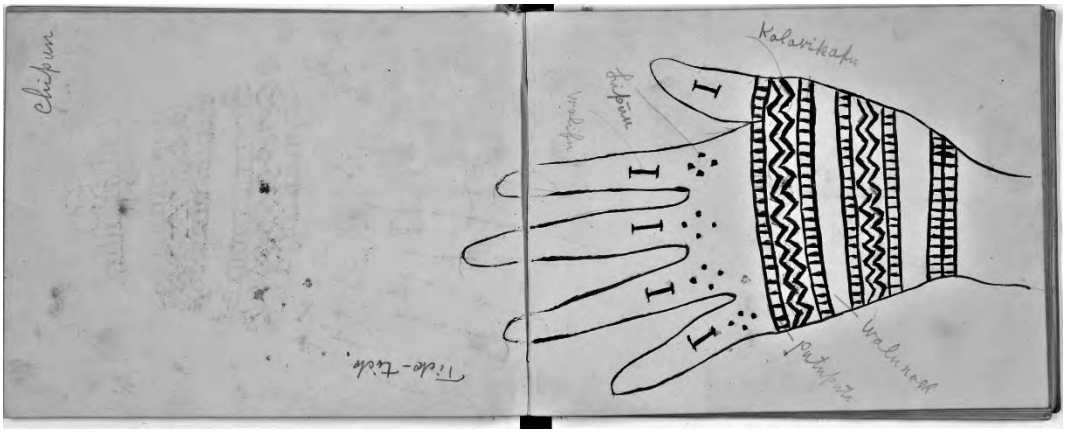


図17

●原住民族が描いたもの

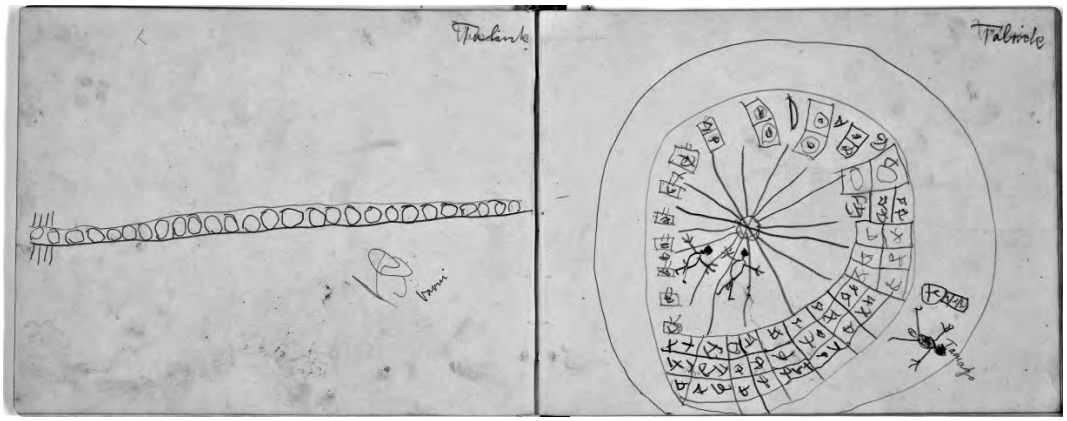


図18

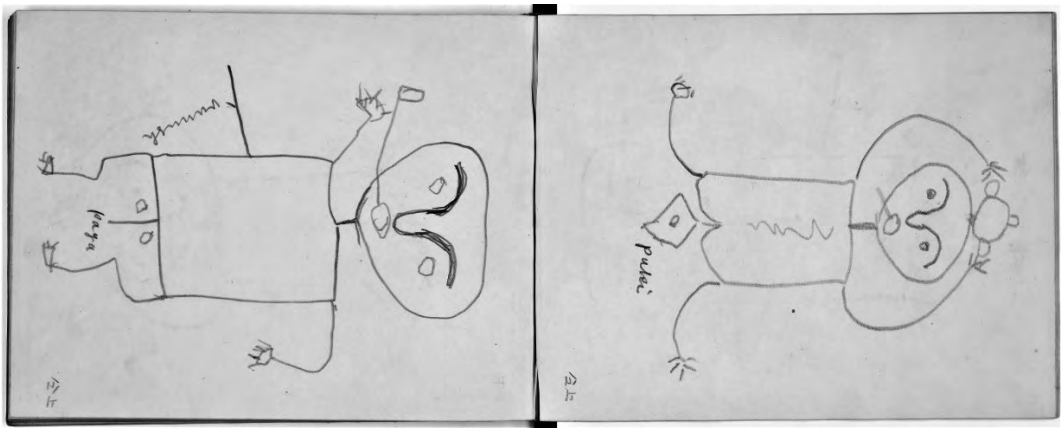


図19

（2）メモ・ノート類

製本したノートに綴られた「フィールドノート」とは別に、「バラ」の状態で残された資料群が存在する。内容は、ノート、メモ、スケッチ、手形、足形、新聞記事など多様である。このうち、ノートとは「複数ページからなり、部立てが明瞭なもの」、メモとは「単票で部立てが不明瞭なもの」として区別しているが、資料としての性格は大差ないものであり、断片的ではあるが、調査の詳細を直接的に伝える資料となっている。これについても以下に具体例を示す（図20～24）。

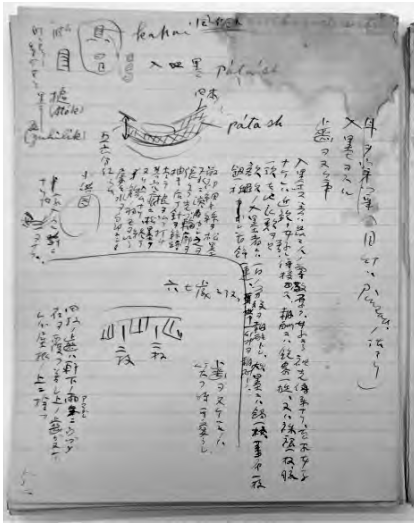


図20

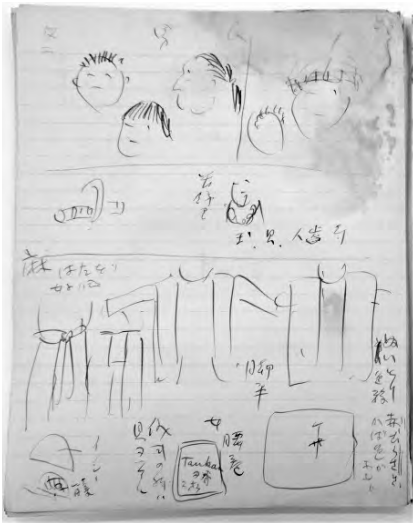


図21

図22

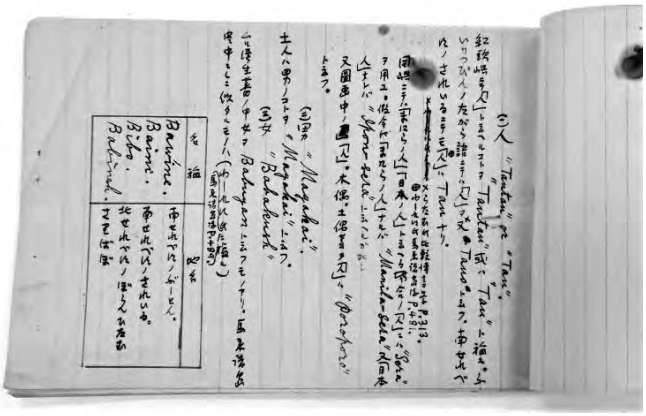


図23

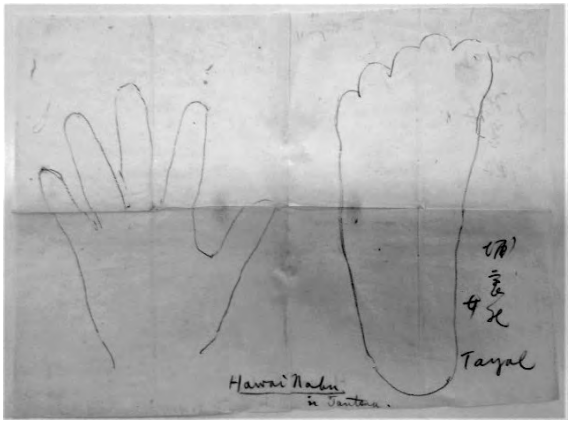


図24

（3）地図

資料群には、フィールドノートに描かれた地図とは別に、大型の用紙に描かれた地図類が存在する。実際のフィールドワークに際してのルートや立ち寄りポイントを示すもの（図25、26）と、台湾全体のなかでの諸々の分布傾向を示すもの（図27）との二つに大別できる。特に前者は、フィールドノートに記された調査内容・行程と対照させることにより、詳細な調査経路や立ち寄った村々、調査対象となった部族などを確認することができる。フィールドノートの内容を補う絶好の資料といえる。

図25

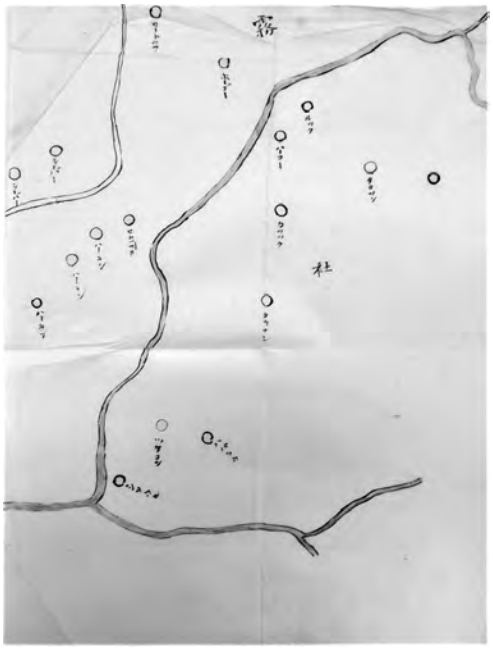


図26

図27

（4）身体測定表

身体測定は、形質人類学を本来の専門とする鳥居龍蔵の、最もベーシックな調査方法である。測定表は表裏印刷のフォーマットから成り立っており、調査対象となる一個人に一枚が用いられている。

表面の冒頭には、標本番号に続いて、調査年月日、調査地名が記されており、いずれの時期の調査であるか詳細に分かる。また、調査対象となった人物の姓名が記されており、これは、先に説明した写真資料のうちの「ポートレート」と対になるものである。調査項目は、頭最大広・頭最大長からはじまり、鼻長・鼻広・口広へとつづき、身長、耳高、肩高、指極、足長、足広など、都合36項目にも及ぶ詳細なものである（図28）。一方、裏面には、顔、目、鼻、唇、歯などの形状をいくつかの類型に分類し、これを図示したうえで、いずれの類型にあたるか図面に丸印でマークする様式となっている（図29）。

この測定表と、写真資料、フィールドノートの内容、地図などを突き合わせることによって、精度の高い調査状況の復元が可能となる。鳥居龍蔵研究の基礎資料ともいえるものである。また、この資料をもとに、調査成果を一覧表化した図表（図30、31）も残されており、部族や、集団ごとの人類学上の傾向を復元することも可能である。

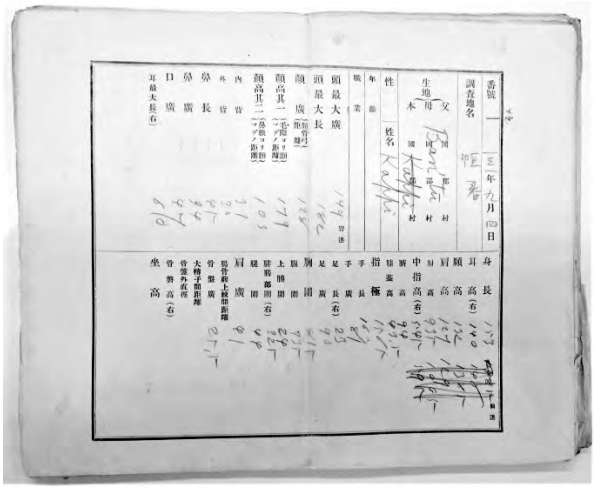


図28

図29

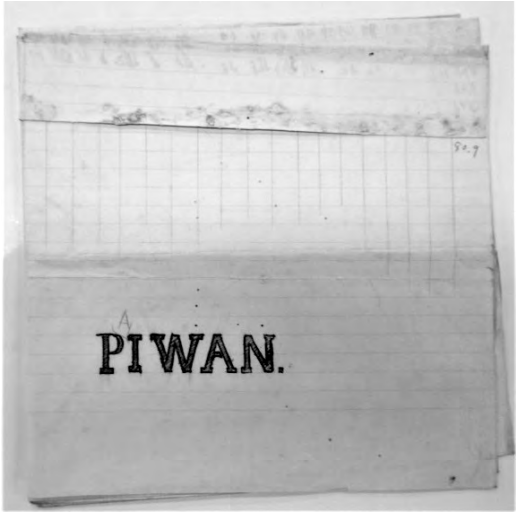


図30

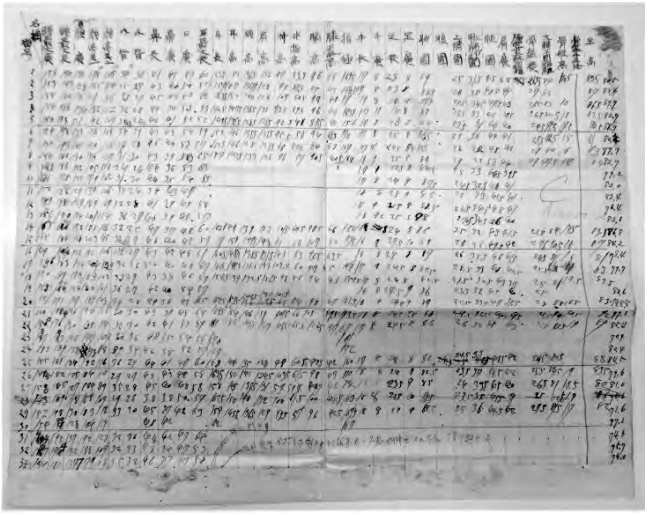


図31

（5）写真

第１章で述べた東京大学総合研究博物館所蔵の写真資料とは別に、鳥居博にも台湾調査関連の写真資料が残されている。東大博の資料がガラス乾板の形で保管されていたことに対して、鳥居博の資料は「紙焼き」の状態で保管されてきた。資料総数は約80枚である。

東大博の資料と同様に、「人物写真」と「非人物写真」に大別できるが、東大博資料に多く見られたポートレートは存在しない。これは東大博資料が、形質人類学的調査の成果報告の意味を持つことに対して、鳥居博資料は、鳥居龍蔵個人の「手控え」的な性格を持つものであることに起因する。同様の理由で「非人物写真」についても、台湾最高峰である玉山を捉えたカットや、多数の原住民族の生活の場となった阿里山を捉えたカット等、純然たる風景写真も多く見られ、この資料群の特徴となっている。

いずれにしても、東大博資料とは全く異なる未公開の写真であり、今後、整理、検討を経て公開され、活用されるべき資料であるといえる。また、写真裏面には、鳥居自身による書き込みが多く見られ、その内容の検討も急務となっている。

図32　タイヤル族の婦人

図33　タイヤル族の娘たち

図34　山中を行くタイヤル族の男性

図35　村落の風景

図36　玉山（新高山）遠望

図37　霧社の集落全景

おわりに

ここまで、日本国内に分散して保管されている鳥居龍蔵の台湾調査関連資料、すなわち、東京大学総合研究博物館が所蔵する写真資料及び考古資料、国立民族学博物館が所蔵する民族資料、そして、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館が所蔵するフィールドノートや身体測定表をはじめとする紙資料、未公開の写真資料などの概要について述べてきた。

これらの資料は、本来同一の調査から生じた一体のものである。未だ整理できていない資料も含まれるが、所蔵する三つの博物館が連携し継続的に整理を進めて行くこと、また、概要を把握できた資料を突き合わせ、その成果をもって現地を訪問し、交流協定を締結した国立台湾史前文化博物館と相互に協力しながら総合的に学術交流を進めて行くことは、無限の学的可能性を持つ取り組みであると考える。今後、交流事業が精力的に進められ、大きな成果をあげることを期待したい。

【主要参考文献】

石井伸夫「鳥居龍蔵の学説形成における「南方諸民族」把握の試み」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』思文閣出版　2020年

石尾和仁「鳥居龍蔵の台湾調査に関する諸資料」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』思文閣出版　2020年

魚島純一「国立民族学博物館保管の鳥居龍蔵収集民族資料」『鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館　1993年

清水　純『画像が語る台湾原住民の歴史と文化　鳥居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探求』風響社　2014年

高島芳弘「東京大学総合研究資料館所蔵の鳥居龍蔵収集考古資料」『鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館　1993年

鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』朝日新聞社　1953年

鳥居龍蔵記念博物館編『鳥居龍蔵の見た台湾』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館　2012年

笵　如苑「鳥居龍蔵の記録した台湾　民族学における初期乾板写真の重要性を中心に」『鳥居龍蔵研究』創刊号　鳥居龍蔵を語る会　2011年

宮岡真央子「学術探検の開拓と展開　鳥居龍蔵と森丑之助の台湾調査をめぐって」『鳥居龍蔵研究』第２号　鳥居龍蔵を語る会　2011年

宮岡真央子「台湾調査　第１回、第２回を中心に」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』思文閣出版　2020年

宮岡真央子「鳥居龍蔵の台湾研究　残された資料の今日的意義」『鳥居龍蔵と現代社会』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館　2021年

鳥居龍蔵と台湾
～同志たちとの協働を中心に～

宮　岡　真央子

はじめに

台湾を舞台にした人類学研究は、19世紀末に始まった。その研究史において20世紀後半まで一貫して大きな関心が払われ、膨大な研究蓄積が重ねられてきたのは、台湾の先住民、今日台湾で「原住民族」と公称される諸民族に関する調査研究である。鳥居龍蔵（1870-1953）は、この先住民の研究において文字通りパイオニアの位置を占める。ただし、鳥居が調査に励んだ台湾には、鳥居のほかにも同様に先住民に強い関心を示し、調査研究に従事した人々がいた。そして鳥居の調査研究は、これらの人々との協働によって成立した。

本稿は、鳥居の台湾研究をその同志、伊能嘉矩、田代安定、森丑之助との関係を軸に概観し、彼らとの対比で鳥居の研究や残された資料の特徴を述べることを目的とする。

以下ではまず、鳥居の台湾調査の対象と時期について概略する。続いて、台湾調査に着手する以前の鳥居の東京人類学会での活動および伊能嘉矩との協働、そして鳥居に先んじて台湾へ渡った伊能嘉矩と田代安定による人類学の活動について、おもに『東京人類学会雑誌』の記録から整理する。そして、鳥居の調査における彼らの関与と協働について、田代との漢文の筆談を用いた調査、田代と伊能からの調査に先立つ情報提供、そして森との学術探検について述べる。これらをふまえ、鳥居の台湾研究と残された資料の特徴を述べ、今後の研究の方向と可能性について考えたい。

1　鳥居龍蔵の台湾研究の対象と時期

台湾は、九州とほぼ同じ大きさの島である。そこには、中国大陸から漢民族が移住するはるか昔から、漢民族とは大きく異なる南方系の言語や文化を伝える先住民が暮らしてきた。狩猟と雑穀・イモ類の焼畑農耕を軸とした生活形態、精霊信仰などを基層文化の特徴とする。ただし「先住民」と一口に言っても、互いに言葉が通じず社会の仕組みや服飾や住居の様式も異なる数多くの民族集団から構成され、多様な諸民族が隣り合わせに暮らしてきた。17世紀以降にオランダ（1642-1662）、鄭成功一族（1662-1683）、清朝（1684-1895）と、次々に外来権力による統治が行われ、西部平原に居住する先住民は次第に漢民族の生活様式を取り入れた。これらの諸民族は、日本統治期には「熟蕃」「平埔族」と総称された。他方、峻険な中央山脈の山間部や東部、そして離島の蘭嶼に暮らす諸民族は、1895年（明治28）に日本が植民地統治を開始するまでいずれの国家にも与せず、外来文化の影響をそれほど受けることもなく、自律的な生活を営んできた。これらの諸民族は、日本統治期には「生蕃」、昭和期には「高砂族」と呼ばれた[1]。清朝統治期まで先住民に関する文字記録はごくわずかで、その実情はよく知られていない状態だった。

鳥居の台湾調査は、台湾の先住民がどのような人々か、という人類学的探究を目的として行われた。鳥居が調査に向かったのは、先住民居住地のなかでもとくに外来文化の影響が比較的少なかった地域を中心とした。まず日本による領台翌年の1896年（明治29）７月に東京を出発し、８-10月に東部の花蓮から台東にかけての平野部と山間部に赴き、今日の民族名称でいうタロコ、セデック、タイヤル、ブヌン、アミ、プユマ、平埔族のタイヴォアン、シラヤ、マカタオ、クヴァランの調査を行った。次いで1897年（明治30）10-12月には、台湾南東に浮かぶ蘭嶼（当時の「紅頭嶼」）に住むヤミ／

タオの調査を行った。これはこの島での史上初の学術調査であった。1898年（明治31）7-12月には、最南端の恒春半島に位置するパイワン、アミ、平埔族の村落を巡った。1900年（明治33）1-9月には、南部の屏東から山に入って北上しながら、パイワン、ルカイ、サアロア、カナカナブの調査を行い、一度台南、嘉義に出て再び山に入り阿里山でツォウの調査を行い、その足で台湾最高峰の玉山（当時の「新高山」）登頂を敢行した。その後にブヌン、タイヤル、セデック、平埔族、サオなどの調査を行い、玉山の麓へ戻ると清朝期に開かれた八通關という古道を抜けて中央山脈を横断し、北東部宜蘭のタイヤルの村に立ち寄って調査を終えた。これら4回の調査は東京帝国大学理科大学からの派遣で行われた。その後10年を隔てた1910年（明治43）末から翌年2月には、台湾総督府から嘱託されて5度目の調査を実施し、北部の桃園、宜蘭、新竹、苗栗の山地に位置するタイヤルの諸村落を訪れた。

以上の5回の台湾調査の期間は、のべ2年に及んだ。鳥居は調査地を意識的に違えることにより、台湾をぐるりと時計回りに一周し、台湾の先住民を俯瞰しようとした。鳥居は自らの台湾調査を「学術探検」と呼び、その行程は文字通り探検の様相を帯びたが、そのなかで膨大な資料を収集し、少なからぬ研究成果を世に問うた。これを可能とした背景に、鳥居の学術的な視野の広さや学問への情熱が存在したことはいうまでもない。しかしそれに加えてさらには、鳥居の調査研究に対して深い理解を示し、さまざまな側面から惜しみなく協力した同志たちの存在が台湾にあったことを看過することはできない。

2　鳥居龍蔵の台湾調査前夜

1）東京での活動、伊能嘉矩との出会い

鳥居龍蔵は、台湾を初めて訪れる10年前の1886年（明治19）、16歳の時に徳島で人類学に出会い、東京人類学会に入会し、坪井正五郎（1863-1913）と交流を始めた。翌年から『東京人類学会雑誌』に報告文を書き送るようになる。4年後の1890年（明治23）には、修学のために徳島から上京した。そして欧州留学から帰国した坪井が1893年（明治26）に東京帝国大学理科大学教授となり人類学講座を担当するようになると、鳥居は人類学教室の標本整理係となり、坪井からじかに学ぶ機会を得た［鳥居　2013：75-78］。

この頃の鳥居は、人類学的な知見を広げるべく精力的に活動していた。『東京人類学会雑誌』には、1893年（明治26）7月24日、鳥居が発起人となり、「土俗会」の第1回会合が開催された旨の記録がある［無署名　1894a］。各地の風俗習慣言語口碑などを談じあうことを目的とした会合で、第1回は鳥居の趣旨説明後に坪井が「土俗調査より生ずる三利益」と題する基調講演をし、参加者が正月の習俗について自身の出身地の事例を語った。

この第1回の土俗会から間もない同年10月、伊能嘉矩（1867-1925）が東京人類学会に入会した。伊能は、現在の岩手県遠野市出身で、鳥居より3歳年上である。下等小学校を卒業して自由民権運動に関わった後、二松学舎に進学したが学費が工面できず退学した。その後に給費推挙生として岩手県立尋常師範学校に進んだが、寄宿舎で騒動を起こした廉で退学処分となる。1887年（明治20）に上京後は、新聞社や出版社で編集業務に従事した。そして1893年（明治26）6月、坪井に人類学の教えを請う手紙を出し、同年10月に東京人類学会入会を果たした[2]。その直後の同年11月に行われた第90回例会では、さっそく「朝鮮の里程標」と題して報告をするが、このとき鳥居も「古墳ヨリ出ル石小刀ニ就テ」と題する報告をした［無署名　1893］。鳥居と伊能は、このころに知己を得たものと推測される。伊能は、翌1894年（明治27）4月の第91回例会で、「奥州地方で尊崇するオシラ神に就きて」と題する報告をし、これはその後に論文にもなった。そして同年8月の第2回土俗会にも伊能は出席した。第2回の主題は「各地贈答の風習」で、初回と同様に鳥居が司会を務め、坪井の講演後に参加者が各地の事例を報告した。興味深いのは、この第2回土俗会で、伊能嘉矩が「科学的土俗研究の必要及び普通教育に於ける関係に就いて」と題し、土俗研究の方法に関する自身の見解を演説したことである［無署名 1894b］。これは、人類学を自身の学問とする決意をした伊能の姿勢をよく示す演説だったといえる。そしてこの第2回土俗会から4ヶ月後の1894年（明治27）12月、鳥居と伊能が連名

で発起人となり、東京人類学会の下に「人類学講習会」を発足させた［無署名　1894c］。

鳥居よりも７年遅れて東京人類学会に入会した伊能は、自分と同世代で同様に学生の身分を持たずに坪井から人類学を学ぶ鳥居に対し、親しみと敬意を抱いていたに違いない。鳥居と伊能は、互いを「学友」と呼んだ。

他方、この頃の鳥居は、自伝『ある老学徒の手記』によれば、極東の人類学研究を志していた［鳥居　2013：82］。鳥居が懇意にしていた東京帝大理科大学の地質学者神保小虎が1895年（明治28）に東京地学協会の委嘱で遼東半島調査に行く計画を知り、同行を希望したが神保に断られ、坪井に頼み、東京人類学会の派遣として行くことを決めた。費用は寄付を募り、1895年（明治28）７-12月、遼東半島調査を実現させた［鳥居　2013：98-101］。鳥居自身は自分の学問のためにこの調査を企てたのだが、日清戦争を背景としてこれが成立したことは言うまでもない。

２）田代安定と伊能嘉矩の台湾渡航、台湾人類学会の設立

鳥居龍蔵が遼東半島調査に出かける少し前、東京人類学会の会員のなかにもう一人、日清戦争を機に海外へ向かった人物がいた。田代安定（1856-1928）である。田代は日清戦争に志願し、1895年（明治28）４月、台湾西方に位置する澎湖諸島の日本陸軍による占領に従軍した。周知のように５月８日には日清講和条約が結ばれ、台湾の日本への割譲が決まる。田代は６月に台湾本島に上陸を果たし、台湾総督府民政局殖産部附となった。

田代安定は薩摩出身で、鳥居より14歳、伊能より11歳、坪井より８歳年上である。郷里でフランス語、博物学、植物学を学び、上京して1875年（明治８）に内務省博物局係となり、1882年（明治15）には農務省農務局勤務となった。同年、沖縄・宮古・八重山で調査を行い、キニーネの原料となる規那樹の試験植樹を行う。1884年（明治17）には公務でロシア、サンクトペテルブルクでの万国園芸博覧会に出席後、現地の大学で植物学研究に従事し、ドイツやフランスにも滞在した。1885年（明治18）に２度目の八重山調査を実施し、翌年に八重山の開拓と改革を説く意見書を政府に提出したが受け入れられず、農務省を辞任した。その後は、東京帝国大学嘱託で沖縄・宮古・八重山に再び調査に赴き、1889年（明治22）には東京人類学会に入会する。同年、練習艦金剛に便乗してオセアニア各地で人類学・植物学調査を実施した。この頃の田代の調査報告は『東京人類学会雑誌』にもたびたび掲載された。1892年（明治25）から翌年４月までは東京地学協会事務及び編纂主任に従事した。笠原によれば、この頃の田代はすでに台湾に関心をもち、台湾の現地情報を収集して『東京地学協会報告』に文章を寄せたという［笠原　2021：121］。そして1894年（明治27）の日清戦争勃発後、上述のように従軍を志願した[3]。

田代は坪井と同様に欧州滞在の経験を有するのみならず、沖縄、オセアニアでの植物学や人類学の実地調査の豊富な経験を有した。台湾調査以前の鳥居が、田代とどの程度親しかったかは定かでないが、接触の機会は少なからずあったであろう。鳥居は田代のことを後に「学兄」と呼び、晩年には「田代先生」と呼んだ。

他方、伊能嘉矩は、日本への台湾割譲が決まった1895年（明治28）５月頃、先住民の人類学的研究を目的として台湾へ渡る決心を認めた趣意書「余の赤志を陳べて先達の君子に訴ふ」を関係者に配った。そのなかで伊能は、台湾の先住民の分類系統を明らかにし、固有の体質・心理・土俗・言語の様態や相互関係、付近の海岸や島嶼の諸種族との関係はいかなるものかを明らかにすることが、統治上も学術上も必要であると説いた 。末尾は、「余が蕃地探険の目的を成し得る所以の便宜を賜らんことを」と結ばれる［伊能　1928：８-10］。

そして、10月29日に台湾へ向けて東京を発ち、11月10日に台湾に上陸した。同月18日には台湾総督府雇員を命じられた［荻野　1998：24-25］。従軍して台湾へ渡った田代の後を追うように、伊能は東京を離れ台湾へと向かった形となった。

台北に着いた伊能は、田代安定とともに発起人となり「台湾人類学会」を組織したことを、『東京人類学会雑誌』に寄せた「台湾通信（第２回）」で報告する［伊能　1896a］。この会は、伊能が東京を発つ際に坪井正五郎から「彼の地に至らば台湾人類学会を起しては如何」との助言を受けて発足し

たものであった。仮規則において目的を「台湾に於ける人類の理学的研究」、活動内容を「一、実地調査」「二、研究資料の蒐集／第一、関係標品の蒐集／第二、言語及び口碑等の彙輯／第三、調査研究の結果に関する記述編纂」とし、会員を「人類学及其の他関係諸学科に於ける篤志者」とすると定めた［伊能　1896a：149］。仮規則の付則で、研究主題を漢民族と非漢民族に二分し、後者については「熟蕃／生蕃」という従前の分類を留保し、科学的見地に基づき民族の分類をなすことが重要課題であると言明した［伊能　1896a：150］。これは、上に見た伊能の趣意書と同様の内容である[4]。この台湾人類学会の発足は、鳥居がまだ遼東半島を調査している頃の出来事であった。そして、田代と伊能はこの出来事と前後して、各々台湾での調査を開始した。

3）田代安定と伊能嘉矩による台湾調査の着手

田代安定はまず、伊能嘉矩が台湾に着く以前の1895年（明治28）9-10月、植物調査を目的とする公務で北東部の宜蘭を訪れ、植物調査のほか、平埔族のクヴァランの村で人類学的調査を行った。この時の植物調査の成果とそれに基づく殖産の建議は総督府に報告書として提出されたが、これとは別に人類学的な調査資料については、口述筆記の形で伊能がまとめた［陳偉智　1997：10］。『東京人類学会雑誌』に伊能が寄稿した「台湾通信（第一回）」の「会員田代安定君の生蕃実査」がそれである［伊能　1895］。また、田代は同年12月に大嵙崁方面（現在の桃園）に赴いて調査を行い、その際に収集した先住民の服飾や煙管等の資料を東京人類学会へ寄贈した［無署名　1896、陳偉智　2020：32］。

一方、伊能嘉矩は1896年（明治29）1月から台湾総督府の学務部編纂課属兼国語学校書記となる。田代とは異なり、公務で長期の調査に出かけられる立場にはなかった。2月からは田代の紹介で、台北にて愛（Ai）という16歳のタイヤル女性から言語と現地事情を学ぶようになった。伊能は愛の身体形質の特徴を観察して報告するなどしたが、残念なことに愛は翌年3月に熱病のため没した［伊能 1896b：228-230、伊能　1897］。また、1896年（明治29）から翌年3月にかけて台北の淡水地方の平埔族の村を複数回調査し、たびたび『東京人類学会雑誌』に報告した。守備隊に伴われて先住民の一行が台北に来た際には、総督府の「接遇委員」として彼らに接見し、彼らの調査も行った［陳偉智 2022：66］。そして、鳥居が第1回調査で東部を踏査していた時期の1896年（明治29）10月、伊能もようやく宜蘭調査の機会を得た。さらに翌1897年（明治30）5-12月には、全島調査を行った。なお、この伊能の全島期間中の同年10-12月、鳥居は第2回調査で蘭嶼に滞在した。調査中の伊能を乗せた船が蘭嶼に立ち寄り、伊能と鳥居は一時の面会を果たした。

以上のように、田代と伊能は鳥居よりも先に台湾に着き、調査に着手した。そして鳥居が台湾へ調査にやって来ると、以下に見るような様々な関与、協働をしたのである。

3　鳥居龍蔵の台湾調査における同志たちの関与と協働

1）漢文の筆談による調査

鳥居龍蔵の第1回台湾調査は、1896年（明治29）8月から12月まで、東部の花蓮から卑南（現在の台東）に至る地域で行われた。これは、台湾総督府民政局殖産部の技師であった田代安定の殖産調査に同行する形で行われたもので、同じく技師の成田安輝らもともに赴いた。このときの鳥居の代表的成果が、論文「東部台湾に於ける各蕃族及び其分布」である。そのなかで鳥居は、東部の諸民族を分類し、各民族がこの地に居住し始めた年代を口碑等から明らかにした［鳥居　1897］。

筆者は以前に、鳥居のフィールドノートの記述と鳥居の上記論文から、鳥居が調査中の10月6日に卑南で田代や成田と合流し、阿眉（アミ）社をともに訪問したことを確認した［宮岡　2020：114］。その後、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館が鳥居龍蔵のフィールドノートをデジタル公開した。また、国立台湾大学図書館所蔵田代安定文庫の整理と田代安定に関する研究が進み、同館が田代安定文庫のデジタル公開を始めた。これらにより、この調査時の状況がさらに具体的に把握可能となった。

田代安定文庫の資料整理と解析を担い、田代安定を主題に博士論文を著した陳偉智は、田代の手稿に、鳥居の写真撮影に関する記述が見られることを指摘した。田代の調査日記「台東殖民地予察巡回

日誌」（1896年）10月７日の条には、「午後二時半ニ阿眉社ニ赴ク頭目宅ニ至リ鳥居氏モ同行シ久永氏安井氏亦同道□ハ呂家社通事ヲ伴ヒ行ク／頭人家族并社民ノ真影ヲ寫サル」とある[5]。その次のページには、写真撮影のために男女数人を集めることを依頼し、卑南アミの起源に関する伝承を老人に尋ねた旨の問答が漢文の筆談として記録されている（図１）［陳偉智　2020：59］。陳偉智は、このとき撮影された写真の一枚（図２）を特定し、そのなかの前列右端の男性が起源伝承を語った老人であると指摘した［陳偉智　2020：60］。

以上の陳偉智の研究をふまえ、筆者が鳥居の同年月日のフィールドノートを確認したところ、以下の記述が読み取れた（図３）。

> 本日しやしんをうつしたり、籐づえをもたしたり、其長さ三尺三寸五分／九十歳になる老人より聞く所によれバ／此阿眉社の創立は千余年以前なりと云ふ／此社の祖名Tiruchiにして祖母はTihogaiと云ふ、祖知本饗山大石中より出づ、其初北より出づ　何處の地ニヤに至るを知らず（略）

「籐づえをもたした」というのは、図２の前列右から５人目の少年が手にしている棒状のものだろう。長さが記されていることから、被写体の体格を知る目安としてスケール代わりに写真に収めたことが理解できる。また、鳥居が日本語で記した阿眉社の起源伝承は、田代の調査日記の漢文筆談の内容と一致する。

調査の場で、阿眉社の老人は現地の言葉で起源伝承を語って聞かせた。通事がその内容を漢語に翻訳し、漢文で田代の調査日記に記した。鳥居はそれをその場であるいは調査後に日本語に翻訳し、自身のフィールドノートに記録した。このような諸段階を経て、鳥居の「東部台湾に於ける各蕃族及び其分布」には、以下の記述がなされた［鳥居　1897：402］。

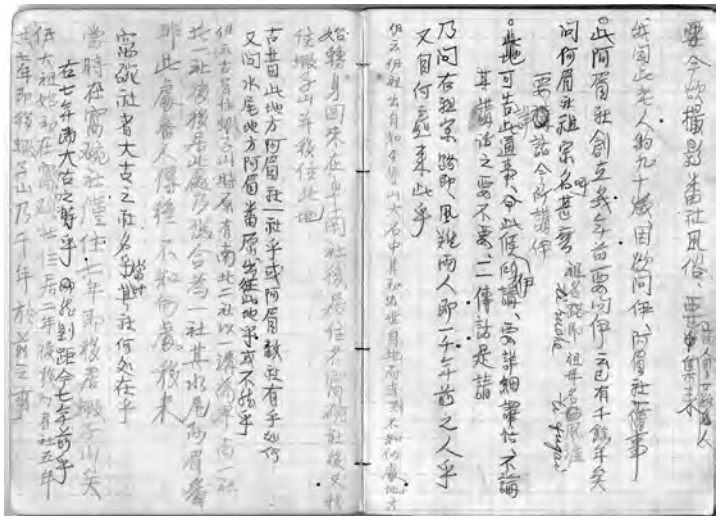


図１　田代安定「台東殖民地予察巡回日誌」（1896年）
卑南阿眉社での漢文筆談記録
（国立台湾大学図書館所蔵、N103、84頁）

図２　1896年10月７日、鳥居龍蔵が阿眉社で撮影した写真
（東京大学総合研究博物館所蔵、写真番号：7295）

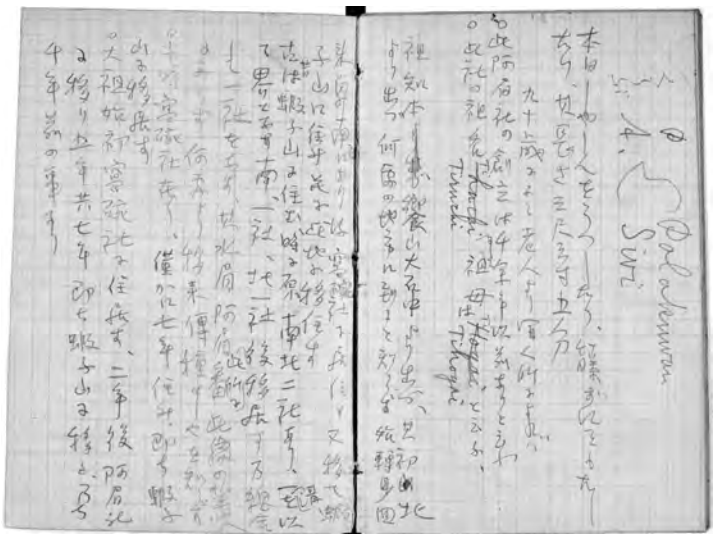


図３　鳥居龍蔵のノート（台湾1896年）徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵、目録ID：mp000190-200060、画像12

阿眉社には九十歳前後の老人ありて、よく其社の小伝を知れり。余は彼に就て左の如く聞きぬ。／我卑南の阿眉社の創立は最も古代のことにして、祖先はTiruchiと称する男とTihogaiと称する女なりき。共に知本饗山の大石中より出で北より来りしが何所の地に去りしやを知らず。

これらは、調査の現場に居合わせた人々のコミュニケーションが文字で記録され、それがいくつかの次元の翻訳を経て論文になるという民族誌生成の過程における諸段階の記録であり、鳥居の学問の生成過程を示す資料群に他ならない。鳥居がまだ言葉も十分に通じない状況で民族の起源伝承の聞き取り調査をなしえた背景に、漢文での筆談という手段があり、そこに田代が関与していたことを示す証左でもある。鳥居は第１回台湾調査で総督府技師の地位にあった田代から様々な調査上の便宜を与えられ助けられたが、それのみならず写真撮影や聞き取りといった実際の調査の場面においても、より直接的に田代の助力を得ていたことが理解できるのだ。

ただし、鳥居の第１回台湾調査の数冊のフィールドノートにも漢文の筆談は散見される。田代が同行していない場面でも鳥居が自ら漢文での筆談を行っていた可能性も考えられる。詳細は両者の行程と資料を詳細に照合・解析した上で明らかになるだろう。筆者自身は田代の手稿をまだほとんど紐解いていない。今後田代の資料と鳥居の資料との照合・解析によって、より多くの事実が明らかになることに期待したい。

2）調査に先立つ情報提供と助言

田代安定は1896年（明治29）の東部調査を終えると、翌年からは次第に殖産のための植物調査に集中するようになり、人類学関係の文章を発表することはなかった［陳偉智　2022：69］。そして、鳥居の以後の調査に田代が同行することもなかった。また伊能嘉矩の方は、そもそも鳥居が調査前後に台北滞在中に近辺を案内する程度に留まり、遠方の調査に鳥居と出かける機会は一度もなかった。しかし、田代や伊能による鳥居への情報提供は、その後も直接的・間接的に行われた。

鳥居は1897年（明治30）10-12月の第２回台湾調査で、離島の蘭嶼に滞在した。蘭嶼は台東から南東約90キロメートルの距離にある絶海の孤島で、従来この島に関する情報はごく僅かだった。ただし、台湾総督府は鳥居の調査に先立つ同年３月に蘭嶼の調査を実施し、そこには殖産局技師の成田安輝も参加した。前年に田代や鳥居とともに東部を調査した人物である。成田は、蘭嶼調査後の同年５月、自身が調査で収集した現地の文物を標本資料として東京帝国大学理科大学人類学教室へ寄贈した。成田の寄贈を仲介したのは、以前から自身の収集資料をたびたび人類学教室に寄贈していた田代安定であったと考えて間違いない。当時鳥居は人類学教室の標本係をしていたから、それらの資料を手に取り間近に観察し、調査の「予習」を行ったと推察できる。また鳥居は、蘭嶼での調査の前に、成田ら一行が総督府へ提出した復命書を読んで参照し、調査報告でも言及した。そして、鳥居が蘭嶼に滞在する際には、総督府殖産課の雇であった上領小太郎が任務を帯びて同行した。要するに鳥居の第２回調査は、田代を中心とする殖産部の人的ネットワークに支えられて成立したのであった［宮岡　2020］。

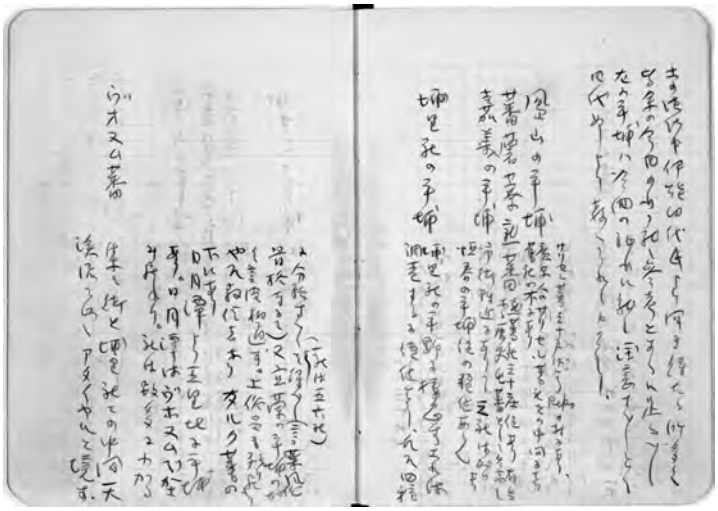


図４　鳥居龍蔵のノート「たかさごのたび　一」（台湾1900年）徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵、目録ID：mp000210-200060、画像13

また、田代安定は、鳥居が第３回調査で南部を訪問するに先立って、南部の先住民に関する自身の見聞きした情報を鳥居に手紙で知らせた。その文章は鳥居を介して『東京人類学雑誌』に掲載された［田代 1898］。田代が鳥居に情報を知らせた南部

の諸村落を、鳥居は第３回と第４回で訪問した。

鳥居は1900年（明治33）１-９月に行った第４回台湾調査の折、南部に出発する前の台北滞在中、まず田代の官舎に身を寄せた。鳥居のフィールドノート「たかさごのたび 一」には、台北で連日伊能が鳥居を訪ねて来て談話した記録とともに、田代と伊能から聞いた各地の先住民の状況が記される（図４）。またさらに田代は、南部の交通事情や行程、各地の日本人官吏の名前など、非常に詳細な情報を鳥居に教えてもいる[6]。鳥居の調査計画に田代が大きく関与していたこと、田代と伊能が自身の知る現地の情報を惜しみなく鳥居に提供し、鳥居の台湾調査を支えていたことが理解できる[7]。

３）森丑之助との学術探険

鳥居龍蔵の台湾研究の同志としてもう一人、森丑之助（1877-1926）を忘れてはならない。森は鳥居の全５回の台湾調査のうち、部分的なものも含め、第３-５回の調査に同行した[8]。鳥居は自身の台湾調査をしばしば「探検」「学術探検」と呼んだが、森が全行程を同行した第４回の調査は、とりわけ探検の要素が大きかった。

森丑之助は、1877年（明治10）１月に京都で生まれた。鳥居龍蔵より７歳年下である。長崎商業学校で中国語を習い、日清戦争時に陸軍附通訳として遼東半島へ派遣される予定だったが休戦で中止となり、1895年（明治28）９月、18歳で陸軍附通訳として台湾へ赴いた。公務での接触を機に次第に先住民に魅了され、その居住地を踏査するようになった。鳥居と始めて出会ったのは鳥居の第１回調査の際に花蓮においてだったというが、詳細は詳らかでない。第３回の恒春半島の調査では、森が途中から加わり、パイワンの諸村落を案内した。そして1900年（明治33）の鳥居の第４回調査の際は、森が自ら助手を願い出て鳥居に同行した。森はこれについて後に、「私が進んで鳥居さんの忠実なる助手となり、地理の嚮導から土語蕃語の通訳、調査助手までやることとなった」のであり、これは「実地学問の指導を受ける為であり、次にはこの犠牲的奉仕に依って此探検に大なる収穫を齎し、聊かなりとも学術進歩のために貢献したいとの希望と、実は出来得る限り鳥居さんの仕事の完成に助力を捧げたいとの念慮から出たものであった」と回想している［丙牛生　1924：107］。それまで自身の関心に応じて山地に出入りしていた森は、鳥居に随行することで人類学調査の方法や技術を学ぼうと考えたのである。

この第４回調査は、鳥居の全５回の台湾調査のなかでも最長期間の９ヶ月を費やし、行程も長大であった。鳥居は、行く先ごとに考古学的遺物を収集し、服飾や家屋などの物質文化や各種技術や習俗を観察・記録し、言語や伝承を聞き取り、写真を撮影し、形質の測定と記録を行った。徳島県立鳥居龍蔵記念博物館にはこの調査に関わる多くの資料が所蔵されるが、このような精力的な資料収集の際に森が調査助手として活躍したことは想像に難くない。またさらに、鳥居と森はこのときの調査で、もとの計画には含まれていなかった２度の探検、すなわち台湾最高峰玉山（当時の新高山）の登頂と、清朝期の古道八通関を西から東へと抜ける中央山脈横断を成し遂げた。この調査の行程中、食料の調達や荷役の手配など、様々な交渉にも森は奔走した。

その後の森は、鳥居との調査で習得した知識と技術を活かし、自身も先住民の人類学的調査を行い、かつ自身で写真機を携行して撮影を行った。また、総督府の雇や嘱託の身分で地理、森林、植物など幅広い分野の調査に従事し、台湾固有種の植物の発見に大きく貢献した。台湾の先住民と山に通じた森は、台湾で「蕃通」と称されるようになっていった。

第４回台湾調査から10年後の1910年（明治43）12月末から翌年２月下旬まで、鳥居は、台湾総督府蕃務本署の嘱託で第５回の台湾調査を行った。鳥居と森はともに桃園、宜蘭、新竹、苗栗のタイヤルの村落を訪ね、高山地帯で石器時代の遺物を発見するなどの成果を得た。これらの訪問地は、第４回調査で元来計画しながら訪問できなかった地域である。当時森は蕃務本署調査課に属し、先住民の調査研究を担当していた。森の進言や紹介があり、鳥居に総督府から調査の要請があったのだと推定できる。なお、鳥居はこの調査で南部の台南や高雄や島嶼部にも訪れる計画だったが、母の急病の報せを受けて急遽帰京し、それは果たせなかった［宮岡　2021］。

森丑之助は、その後に自身の調査資料をもとに写真集『台湾蕃族図譜 １、２巻』（1915）やタイヤ

ルの民族誌『台湾蕃族志 第一巻』（1917）を刊行し、1916年（大正５）からは総督府博物館の主事となった。総督府博物館の資料を継承した今日の国立台湾博物館（台北市）は、森丑之助が各地で収集した諸資料を所蔵・展示している。そのうちの一つ、森が1920年（大正９）に制作した「台湾石器時代遺物分布図」は、既成の地図に1896年（明治29）以降に鳥居と森が発見した石器時代遺物の分布および鳥居と森の調査ルートを描き込んだものである（図５）。この図は、２人が台湾の広範な地域を踏査し、おびただしい数の遺跡と遺物を発見した歴史の一端を示している。

図５　台湾石器時代遺物分布図（1920年、森丑之助作、国立台湾博物館所蔵）

４　鳥居龍蔵の台湾研究と資料の特徴

鳥居龍蔵の台湾研究を支えた同志、田代安定、伊能嘉矩、森丑之助は、いずれもその後の人生を台湾研究に費やした。田代は総督府技師として植物学研究とそれに基づく殖産事業に邁進した。伊能の関心は次第に先住民と漢民族との交渉史を中心とする歴史研究に収斂し、遺作『台湾文化志』（1928）は台湾史研究の古典の位置を占める。鳥居を師と仰いだ森は、先住民の各民族集団の民族誌と写真集を出版する計画を立てたがそれを完成できずに世を去った。しかし、森の名は台湾の高山植物に刻まれ、森の写真や収集資料も今日の台湾で高く評価されている。鳥居、田代、伊能、森の経歴、主要著作などを末尾に表としてまとめたので参照されたい。

彼らとの対比で鳥居の台湾研究をとらえたとき、その特徴が見えてくる。１点目として、鳥居の視線は当初から一貫して台湾のなかに留まらず、東南アジアやオセアニア、中国など周辺地域の人類諸集団との比較に向いていた。２点目として、１点目とも関連するが、鳥居は先住民と台湾の先史時代との関係に強い関心を示し、考古学的な調査研究も数多く手がけた。そして３点目として、やはりこれも比較を念頭として、鳥居は身体形質の調査に力を注ぎ、その論考も複数著した。結果的には、台湾の先住民と周辺諸民族との比較は十分になされぬまま、鳥居の関心は大陸へと移っていったといえる。しかし、比較の視点があったからこそ、鳥居は西南中国へと向かった。そして台湾研究を離れた後も、アジアの諸民族を俯瞰する際に台湾の先住民の存在を忘れることはなく、例えば『有史以前の日本 改訂版』（1925）では「台湾の有史以前」という一節で台湾の先住民について詳述した。

このような学術的関心に基づいて行われた台湾研究において、鳥居が収集し後世に残した資料は多岐にわたる。先住民の言語、伝承、習俗、技術を記録したフィールドノート、形質調査の記録、書簡や辞令等の文書類（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵）、被服や生活用具などの民族誌資料（国立民族学博物館所蔵）、写真、考古学資料（東京大学総合研究博物館所蔵）などである。近年これらの整理と公開が進んでいるという点、散逸することなくみな日本国内の学術機関に収蔵されているという点は、大きな特徴といえる。

おわりに

2020年から徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵のフィールドノートが電子公開されたことにより、鳥居龍蔵研究は新たな段階に入った。フィールドノートは、多岐にわたる鳥居龍蔵の残した資料群のなかでも、鳥居の調査の状況に関する直接的・具体的な情報が得られる極めて貴重な一次資料である。これとその他の資料とを（他機関収蔵の資料を含めて）相互に参照することが可能になったのである。これにより、今後鳥居の調査の実際の状況がより詳細に明らかになるであろうし、また、個々の資料に関する情報もより多く得られるようになることは間違いない。また、本稿で田代安定と鳥居龍蔵のフィールドノートの照合の一端を示したように、鳥居の資料と同時代の鳥居の同志たちが残した資料や研究成果とを付き合わせることによって、鳥居の資料からだけでは知り得ない情報や事実が明らかになる可能性は大いにある。このような研究の蓄積により、鳥居や同志たちの研究を再評価する道も開けるはずである。それらのことを念頭に、筆者自身、今後も資料の読解、照合、解析を進めていきたい。

表　鳥居龍蔵、田代安定、伊能嘉矩、森丑之助の経歴・主要著作など

氏名	田代安定	伊能嘉矩	鳥居龍蔵	森丑之助
生没年	1856-1928	1867-1925	1870-1953	1877-1926
出身地	薩摩	遠野	徳島	京都
主な経歴	内務省勤務、農商務省勤務、台湾総督府殖産局技師、恒春熱帯植物殖育場技師	新聞社・出版社編集、台湾総督府雇/嘱託	東京帝国大学理科大学人類学教室標本整理係、同大学講師・助教授、国学院大学教授、鳥居人類学研究所所長、上智大学文学部長兼教授、燕京大学客座研究教授	陸軍附通訳 台湾総督府嘱託/雇 総督府博物館主事
主要調査地	沖縄、ミクロネシア、台湾	日本、台湾	日本、台湾、千島列島、西南中国、中国東北部、モンゴル、朝鮮半島、シベリア、樺太、南米	台湾、ミクロネシア
台湾関係の主な著作（雑誌掲載の論文類は除く）	台湾街庄植樹要鑑（1900）、台東殖民地予察報文（1900）、恒春熱帯植物殖育場事業報告（1911）	台湾蕃人事情（粟野伝之丞との共著、1900）、台湾志（1902）、台湾蕃政志（1904）、領台十年史（1905）、大日本地名辞書続編 台湾（1909）、台湾総督府理蕃誌稿 第1編（1911）、台湾文化志 1-3巻（1928）	人類学写真集 台湾紅頭嶼之部（1899）、紅頭嶼土俗調査報告（1902）、Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose.1r, 2e Fascicule.（人類学研究・台湾の原住民1、2巻、1910、1912）、有史以前の日本 改訂版（1925）	ぱいわん蕃語集（1909）、阿眉蕃語集（1909）、ぶぬん蕃語集（1909）、台湾蕃族図譜1、2巻（1915）、台湾蕃族志1巻（1917）

出典　陳偉智 2020、陳偉智 2022、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編 2020、楊南郡著・笠原ほか編訳 2005などから筆者作成。

謝辞　本研究はJSPS科研費19H01397、22H00040の助成を受けたものです。資料の使用許可をいただいた国立台湾大学図書館、東京大学総合研究博物館、国立台湾博物館、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館に謝意を表します。

【注】

1 清朝期には「熟番」「生番」と表記された。「蕃／番」とも侮蔑的意味を含む。本稿ではこれらを含む語を当時の歴史的表現として括弧付きで用いる。ご了解願いたい。

2 本稿における伊能嘉矩の経歴は、［荻野　1998、陳偉智　2022］による。

3 本稿における田代安定の経歴は、［陳　2020、中生　2011、松崎　1934、三木　1981］による。

4 陳偉智は、日本の台湾領有が決まった際に坪井正五郎が認めた台湾の人類学的研究の必要性を訴えた意見書において、分類の問題が最重要とされたことを指摘している［陳偉智　2020：58］。

5 田代安定「台東殖民地予察巡回日誌」（1896年、国立台湾大学図書館田代安定文庫N103）、画像83、https://dl.lib.ntu.edu.tw/s/Tashiro/item/714781（2023年1月30日参照）。

6 とくしまデジタルアーカイブ、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵資料「たかさごのたび　一」（1900年、目録ID：mp000210-200060）画像19-25、https://adeac.jp/tokushima-bunkanomori/viewer/mp000210-200060/TMM_021/（2023年1月30日参照）。

7 本稿では立ち入ることができないが、鳥居と伊能は『東京人類学会雑誌』誌上でもしばしば台湾の先住民の人類学研究に関わる学術情報のやりとりを行った。

8 鳥居龍蔵の台湾調査における森丑之助との協働に関しては、拙稿［宮岡　2013、2021］参照。また、本稿における森丑之助の経歴は、［楊南郡著・笠原ほか編訳　2005］による。

【参考文献】

伊能嘉矩「台湾通信」『東京人類学会雑誌』11（117）：94-99（東京人類学会　1895年）

伊能嘉矩「台湾通信（第２回）」『東京人類学会雑誌』11（118）：149-154（東京人類学会　1896年a）

伊能嘉矩「台湾通信（第４回）」『東京人類学会雑誌』11（120）：224-230（東京人類学会　1896年b）

伊能嘉矩「雑報 生蕃婦アイを悼む」『東京人類学会雑誌』12（138）：499-501（東京人類学会　1897年）

伊能嘉矩『台湾文化志　上巻』（刀江書院　1928年）

荻野馨編著『伊能嘉矩・年譜・資料・書誌』（遠野物語研究所、1998年）

笠原政治『台湾原住民族研究の足跡――近代日本人類学史の一側面』（風響社　2021年）

田代安定「南部台湾の諸蕃族」『東京人類学会雑誌』13（146）：307-310（東京人類学会　1898年）

陳偉智「殖民地統治・人類学與泰雅書寫――1895年田代安定的宜蘭調查」『宜蘭文獻雑誌』29：3-28（宜蘭縣史館　1997年）

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』（思文閣出版　2020年）

陳偉智「田代安定：博物學、田野技藝與殖民発展論」（臺灣大學歷史學研究所博士論文　2020年）

陳偉智『伊能嘉矩――臺灣歷史民族誌的展開 増補版』（臺灣大學出版会　2022年）

鳥居龍蔵「東部台湾に於ける各蕃族及び其分布」『東京人類学会雑誌』12（136）：378-410（東京人類学会　1897年）

鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』（岩波書店　2013年）

中生勝美「田代安定伝序説：人類学前史としての応用博物学」『現代史研究』7：129-164（東洋英和女学院大学現代史研究所　2011年）

丙牛生「生蕃行脚（一）」『台湾時報』55：106-114（台湾総督府台湾時報発行所　1924年）

松崎直枝「隠れたる植物学者田代安定翁を語る」『伝記』1（1）：113-123（伝記学会　1934年）

三木健『八重山民衆近代史』（三一書房　1981年）

宮岡真央子「学術探検の開拓と展開：鳥居龍蔵と森丑之助の台湾調査をめぐって」『鳥居龍蔵研究』2：121-148（鳥居龍蔵を語る会編　2013年）

宮岡真央子「台湾調査――第１回、第２回を中心に」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』（思文閣出版　2020年）

宮岡真央子「鳥居龍蔵の第５回台湾調査」『台湾原住民研究』25：3-34（日本順益台湾原住民研究会編　2021年）

無署名「記事　第九十会例会」『東京人類学会雑誌』9（92）：43（東京人類学会　1893年）

無署名「土俗会談話録」『東京人類学会雑誌』9（94）：144-151（東京人類学会　1894年a）

無署名「第二回土俗会」『東京人類学会雑誌』9（102）：144-151（東京人類学会　1894年b）

無署名「雑報　人類学講習会」『東京人類学会雑誌』10（105）：125-126（東京人類学会　1894年c）
無署名「雑報　台湾生蕃所用品説明」『東京人類学会雑誌』11（122）：333-34（東京人類学会　1896年）
楊南郡著・笠原政治／宮岡真央子／宮崎聖子編訳『幻の人類学者 森丑之助――台湾原住民の研究に捧げた生涯』（風響社　2005年）

與鳥居龍藏共行－臺灣原住民族的發展及國立臺灣史前文化博物館的角色

陳　俊男、林　慧仙、曾　于宣

摘要

鳥居龍藏現有與臺灣相關之手稿內容計有23本，史前館先以古道為最初思考起點，選擇浸水營古道重要的聚落-力里社區為開端，共同進行手稿內容解讀。

力里社區族人在文化復振、習俗祭儀執行與自身研究上並未缺席，該社區於2004年出版之《春日鄉力里Ralekerek部落誌》，即積極地進行了有關社區的相關文化紀錄。當力里社區族人聽聞有尚未出版的鳥居龍藏手稿，產生極大的興趣，希望擴大族人的參與，讓更多的族人一同進行解讀，以便豐富力里社區的文化歷史。在解讀的過程中，參考族人族語的發音進行了手稿的比對與確認，對於照片與圖像的內容，引起了很高的共鳴，耆老往往能透過圖畫告知許多手稿以外的資訊。

史前館在近年的原住民族研究發展上朝向與原住民各族合作進行文化詮釋權的實際行動，包含典藏品文物詮釋、文物再製及與原住民文物館或源出社群合作策展、進行書籍資料出版等各項工作。史前館也透過館藏原住民藏品分析以及辦理特展的合作過程，與各原住民族，建立良好的互動關係。

原住民族知識，大致包含有「文化遺產」(cultural heritage)、「傳統知識」(traditional knowledge)、「傳統文化體現方式」(traditional cultural expressions)、「科學、技術和文化表現形式」(the manifestations of their sciences, technologies and cultures）等。其性質包含時間性與空間性。所謂的時間性，指的是原住民族知識必須要連結過去、實踐現今以及延續未來。而在空間性，則是對於生活空間的認識、分類以及相對應上所產生的邏輯思維。

原住民族知識不應再視為主流知識的附屬，而是另一種「主流知識」。史前館朝著館藏文物開放、研究心態開放，成為原住民族知識建立的協作平台，而與原住民族共同解讀鳥居龍藏手稿內容，即是重要的實踐方式。這樣的工作必須持續不斷，在未來也會以這樣的角色與其他原住民族社群部落進行互動連結。

關鍵詞：力里社、史前館、原住民族知識、鳥居龍藏手稿

一、前言

1896年鳥居龍藏來到臺灣，開啟以人類學專業進行臺灣原住民族（以下稱原住民族）的調查，後續亦有多位的日籍學者從事相關調查與研究，並累積豐富的民族誌資料與研究成果，成為了解原住民族在日治時期的生活方式與文化習俗的重要依據。到了國民政府來臺後，中研院與各大學院校的學者，繼續累積相關原住民族的研究資料。

隨著臺灣政治開放，原住民族開始追尋自己的主體性。1980年代發起了正名與還我土地的社會運動，1990年代，朝向憲政體制爭取自我的權益。到了2000年代後，原住民族對於 9 族的分類法進行檢討，邵

族開啟了民族正名的第一槍，迄今官方已完成16族的民族認定。原住民族正名的開展也帶動對自身民族文化的省思，原住民各族陸續投入自我文化的研究，諸如傳統領域與部落地圖的劃定；舊社的踏查；傳統紋飾、服飾與習俗祭儀的恢復等，如何讓原住民族文化繼續發揚並追求傳統知識的延續，是現今原住民各族民族發展的熱潮。不過在民族發展的過程中，面對最大的挑戰，莫過於年輕一代對民族文化記憶的斷裂，隨著耆老的逐漸逝去凋零，要建立起完整的民族文化體系，除了加緊進行訪談工作，並詳實記錄外，閱讀早期研究者所調查的成果以及訪視國內外博物館典藏的民族文物，成為原住民族找尋傳統文化非常重要的途徑。這些傳統文化的復振，對於原住民族來說，僅是一種懷舊的心理，抑或有著更深沉的意義，是本篇文章初步要探討的方向。

國立臺灣史前文化博物館（以下稱史前館）典藏有南島民族文化的考古學與民族學文物，並以南島民族文化為研究重點。史前館與各原住民族部落合作，維繫與原住民族地方文物館的關係，讓典藏文物充分提供給原住民各族在民族發展上的運用，體現博物館的當代性與發揮博物館重要的社會責任。本文另一個要討論的方向是，在原住民族的發展過程中以及追尋傳統文化上，史前館是如何提供協助，並投入其中成為工作的夥伴，而未來該如何規劃與發揮博物館的功能。

鳥居龍藏相關通信與專題研究，業已成為原住民族研究上重要的文獻成果。史前館藉由與德島縣立鳥居龍藏紀念博物館的合作，並結合考古學、民族人類學、自然科學、歷史學、博物館學的研究人員與館外學者，組成研究團隊，對鳥居龍藏手稿內容進行解讀，重新踏查鳥居龍藏的調查路線，一方面再次了解當時臺灣原住民族的狀況，另一方面也以虛心學習的態度，記錄目前臺灣原住民族文化發展的狀況。

鳥居龍藏現有與臺灣相關之手稿內容計有23本，史前館在初步盤點手稿內容涉及區域後，決定先以古道為最初思考起點，特別是鳥居龍藏可能行走的路徑，試著理解手稿的脈絡。因此史前館先鎖定的是可以連結臺灣西南部以及東部之浸水營古道，其重要的聚落-屏東地區春日鄉力里社區為開端。

二、鳥居龍藏手稿的解讀

（一）力里社區的自我研究

Ralekerek力里社區，鳥居龍藏記為「リキリキ」，屬於排灣族Butsul亞族的Paumaumaq群（許木柱等編纂1995：608、葉神保2014：4），行政區為臺灣屏東縣春日鄉力里村。此社區位於浸水營古道西側入口，經常出現於清代與日治時期文獻紀錄，屬排灣族重要的聚落。雖未像來義、山地門等知名的排灣族社區，吸引外界的眼光，然該社區族人在文化復振、習俗祭儀執行與自身研究上並未缺席，特別是2004年出版之《春日鄉力里Ralekerek部落誌》，即整體性地表現出社區的相關文化紀錄與發展。

根據部落誌的紀錄，力里社區傳統領域西區為中央山脈姑子崙山西面，東區則為台東達仁鄉以中央山脈姑子崙山向南沿姑子崙溪右側至茶茶亞頓溪，整個浸水營越嶺道為其活動領域。力里社區於1931年、1967年、1973年進行過三次遷移，特別是1973年遭遇到莉泰颱風引起土石流，放棄原居住地，移至現在社區所在之地。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：6）

部落族人亦從事有關舊社的調查，依據老村長的回憶，約1959年配合政府的政策，陸續開始從舊社遷徙到平地居住，隔了45年，力里社區於2003年 4 月 6 日，由部落老中青三代之成員進行舊社尋根之旅。族人從力里社區開始往舊社前進，並於原日治時期的國小廣場遺址集合，先由青壯族人進行雜木草叢清理，大家在席地而坐，分別由理事長、村長、頭目以及議員，向族人說明活動的目的，並分配工作進行舊社家屋之清理、辦理祭祀祖靈儀式步驟，另外也講述相關故事傳說。由議員帶領大家，一起宣誓：「共同維護遺址的風貌，若有人刻意破壞，搬遷石板，就是大家的敵人，亦是祖先的敵人，絕不寬貸。」之後開始實際執行工作，各家族長老帶領各家族住戶，找尋自己的家屋，以人工方式進行打掃清理。清理完後，在各家屋前之石板上擺放小米酒、小米粽、豬肉魚蝦、小米糕等祭品，手持小米酒，向天地祖先

進行祭拜，保佑子孫平安發展。此次回到舊社，曾經居住在舊社的耆老族人，不免開始回憶小時候的情形，並將此記憶敘述給年輕一代之族人，達到傳承的目的。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：202）

除舊社的追尋外，力里社區的族人也針對浸水營古道進行族人自我的調查與記錄，經過大量地蒐集文獻資料以及實際踏查，將浸水營古道的由來、祖先口傳、發生的歷史事件、沿途的動植物景觀，一一進行文字紀錄，內化成其知識，並一一標明出 8 處舊社遺址、 9 處清朝營盤之歷史遺址，發展深度旅遊的產業，帶領社會大眾認識力里社區。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：34-48）

力里社區共有 8 個部落領袖系統，分別為Djakudjkuc、Kaub'san、Ljiyab'uan、Mab'ingab'in、Luveljn、Katutuljan、Qaqatiyan、Tjawqacuq，其中Kaub'san為力里社區最大家族，而Ljiyab'uan的織布技術vincikan為社區代表性之藝品。力里社區目前仍保有屬於傳統的祭司與祭司相關之祭祀儀式。祭司的養成甚為嚴謹，首先由祖靈賜與問卜用的珠子，類似無患子，預告其準備要接受祖靈指導，傳達人間與神界陰間的訊息。問卜用的珠子來源有兩種，一是家族前一代或隔兩代有祖先擔任過祭司，由祖靈告知須擔任祭司，並傳承一顆珠子。另一個則是雖然無祖先擔任過祭司，但經過祖靈的祝福，陸續得到五顆珠子。當得到這些珠子時，不能拒絕，否則會有身體不適、無法醫治的情形，接受這些指示後，就要開始拜師學習祭祀儀式，經過師傅認證後始可成為祭司獨立執行工作。祭司一般要執行生命祭禮、死亡祭禮、祈福祭禮、治病祭禮、農耕祭禮、狩獵祭禮、獵獲雄鷹祭禮、歲時祭禮、五年祭與五年祭後第二年之六年祭等祭儀。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：10-14）

力里社傳統的住屋全用石板製成，先找尋強健的木材做為家屋內的支撐，再以石板做屋頂，若石板不足，可搭配茅草。石板需採集光滑漂亮者，地板可分為內地板與外地板，內地板是用作祭拜使用，外地板則可供作飲食活動之用。早期內外地板均可以進行室內埋葬使用。住屋依地形建造，一般朝東方，住屋大門上之橫樑，有頭目與平民之分，頭目可採用人頭及百步蛇圖形進行雕刻，平民一般不採用雕刻過的木材。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：96）

在文化祭儀保存方面，力里社區保有五年祭的祭儀，首先要選出祭司與祭司助手，接著選定辦理時間，頭目要殺豬，並到部落創始地與祖靈安置處進行祭祀。祭司要將祈福過後的祭品分送至四方神明，並設置守護神。因五年祭祭拜迎靈有善神與惡靈，守護神即是要護佑部落。村民族人還必須準備竹竿刺球，竿長約45尺（約13公尺），以火烤修直、接綁固定、裁量確認。刺球以相思樹之樹皮製作，共需要16顆。五年祭第一天全村族人必須要盛裝至祖靈祭祀地點迎靈祭，所有頭目、祭司要祭祀祖靈，其他族人則在外跳勇士舞。準備的刺球亦要進行祭祀，而參與刺球的族人，配戴之護身符要進行祈福。當所有之刺球者就定位後，祭司將球帶至廣場中央，將球拋往空中。第一球不刺，因此祭司會刻意將球拋往其他方向，避免族人刺中。第二球以後陸續進行瞄準，15個球中的前 5 個代表不同的福運，刺中者代表 5 年內會得到良好的福份。祭司在五年祭的舉行期間，每天三餐時間均要到祖靈安置地進行祭祀，而族人亦要到自己家中進行祭祀，因為在五年祭，各家祖靈亦會到家中陪伴子孫。到了第三天要進行送惡靈，每家均要準備兩小包物品，經祭司於祖靈安置地進行祭拜後，分東西二路，由男性族人護送至村外，當祭品隊伍經過家門時，各家族人會持著留有幾片葉子的竹枝，由屋內將惡靈趕出，祭品隊伍返回村內時，不可依原路回家，要靜悄悄地走偏僻路徑，避免路上惡靈又跟著隊伍。當二路人員回到村內後，由祭司以清水進行淨身以去除邪氣。到了第五天則是護送善靈，與送惡靈的程序相似，祭品會稍微豐富一些。送完善靈後，要再進行刺球活動，刺完球後祭司要到祖靈安置處拿回第16顆球，最後刺中者，可拿回刺球作紀念。刺球活動結束後，參與者要將竹竿截成一節一節，並將最後一節帶回家中，表示帶來福氣，此時要立即將竹竿架拆除。刺中最後一球者，若此球問卜後屬福氣者，家族成員就會至刺中者家中祝賀，若為災難象徵，則亦要到刺中者家中進行安慰。到了第六天，祭司會再至祖靈安置地進行祭祀，向神靈秉告刺球已圓滿完成，此時可以進行狩獵。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：102-103）

（二）與力里社區族人分享手稿內容

史前館為與力里社區族人一起進行鳥居龍藏手稿解讀，陸續至力里社區拜訪族人，同時也進行一次鳥居龍藏調查力里社的路線踏查。

初次與力里社區族人季亞夫Giljegiliev Malingalin（漢名陳文龍）[1]接洽，並告知史前館與日本德島縣立鳥居龍藏紀念博物館合作，將進行鳥居龍藏手稿解讀，史前館也希望能與力里社區共同參與，將手稿內容有關力里社乃至於排灣族的紀錄，做更細膩的解析。季亞夫對此工作產生極大的興趣，其表示2022年力里社區正執行「『老歸崇－老力里』排灣舊社暨古道重現春日計畫」，此計畫希望「培力在地後代子民，結合在地農產觀光經營」、「低密度高效率之營造方式來恢復舊歸崇與舊力里之間的古道」、「保護舊部落文化生態，結合現代科技建構歷史文化觀光產業，延續部落集體文化生活記憶，強化舊部落與族人文化臍帶關係」[2]。力里社區曾蒐集大量文獻史料與研究成果，聽聞鳥居龍藏有尚未出版之手稿，更有數百件的照片，渴望能了解其中的內容。季亞夫表示，力里社區為一歷史久遠之部落，然在進行深度旅遊推廣時，社會大眾對力里社區感到陌生，因此希望力里社區在保有其主體性的前提下，提高社會的知名度。他認為針對手稿內容，建議可以擴大族人的參與，讓更多的族人一同進行解讀，以豐富力里社區的文化歷史。

就目前力里社相關之手稿，根據史前館初步解讀之內容，大多以族群服飾、衣著習慣、建築外觀、自然地景描述、刺青、部落戶數紀錄、持弓箭圖文描述、身體部位名稱及基礎生活物件之語言發音紀錄等為最主要的紀錄內容。而在手稿的書寫方式上融合了早期的日語書寫習慣、英文、中文（文言文）以及羅馬拼音之族語紀錄，而其中又以日語及族語為主。本館雖有熟悉日語的工作小組成員可以初讀手稿，然而因為手稿內容有大量的族語紀錄，需要仰賴熟悉部落歷史、地理位置及在地語言之族人協助，才有可能進一步解讀。史前館於2022年12月27日先進行力里社區說明會，說明有關參訪力里舊社遺址的初步規劃，並場以簡報形式播放鳥居龍藏有關力里社調查的手稿圖像。在場的族人有許多是頭目家族成員，當獲知手稿內鳥居龍藏記錄力里社共有200戶時，在場族人非常驚訝，原來在日本統治臺灣初期，力里社之規模就已經達到200戶，因目前力里社區共有256戶排灣族人，在中排灣族部落裡，是僅次於來義部落，顯示力里社的人口眾多。

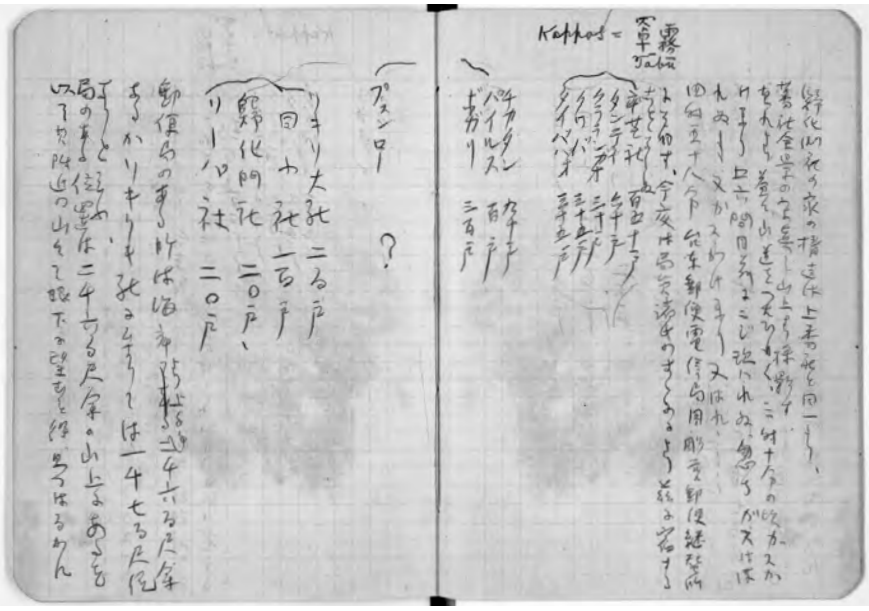


圖 1 手稿中有關力里社環境及戶數的紀錄。
(資料來源：德島縣立鳥居龍藏紀念博物館提供)

[1] 父親為力里社區 Mab'ingab'in 家族頭目。

[2] 參見文化部再造歷史現場專案計劃資訊輔導平台
https://rhs.boch.gov.tw/index.php?inter=project&id=3&did=59。

另外手稿出現男女性身上刺紋時，在場族人立即回應男性的刺紋是屬於頭目專有的，惟紋路的形制要再進行細部的解析研究，才可以知道是哪一個頭目家族所有。至於女性的刺紋，在場族人無法進行判斷是不是屬於頭目家族成員，推測可能是屬於祭司系統，但一致確認，早期在力里社時，平民是無法施以紋身與手紋。

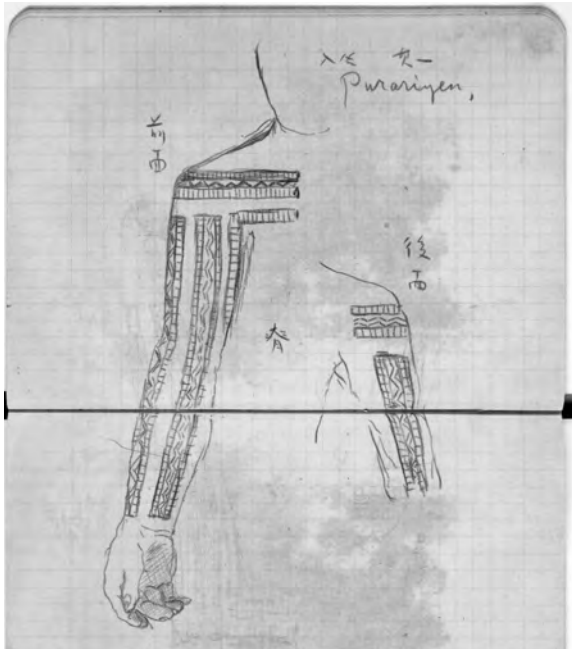


圖 2 手稿中有關男性身上刺紋的圖像。
(資料來源：德島縣立鳥居龍藏紀念博物館提供)

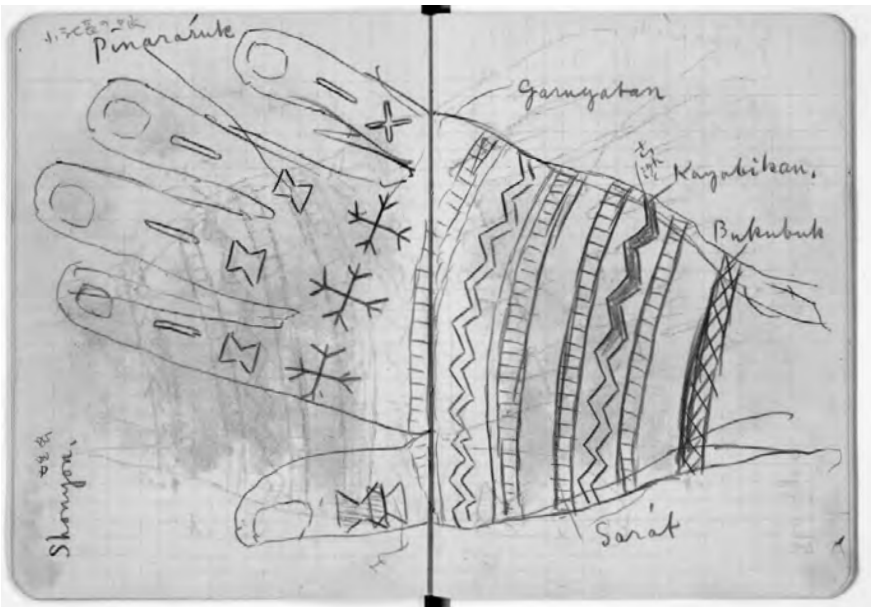


圖 3 手稿中有關女性手紋的圖像。
(資料來源：德島縣立鳥居龍藏紀念博物館提供)

史前館另向族人展示出一張有關力里社頭目的照片，內容中可以看出頭目身著雲豹衣，在場族人則訝異的表示，原來在百年多前，力里社的頭目也身穿雲豹服飾，這個資訊對族人來說非常重要。

經過這一次與族人的短時間分享，發現族人可以提供非常多珍貴的資訊，因此史前館與社區內族人約定2023年１月６日，進行正式地部落手稿解讀工作。除了希望進一步理解手稿內容之外，也試圖在過程中評估並理解部落可能參與的方式。為了擴大族人的參與性，史前館團隊於力里村文化聚會所，邀請文健站[3]的耆老族人一同參與解讀手稿內容。當天參與耆老約15名，年紀約在65歲以上。因史前館團隊成員無法以排灣族語溝通，故安排一位族語翻譯人員，該名族語翻譯者為女性，年約65至70歲。當天於文化健康站之會議室空間進行解讀工作之說明與討論，現場備有會議用大型螢幕，搭配電腦進行手稿掃描檔照片之簡報說明。小組成員一人於講台前透過螢幕播放手稿照片說明手稿內容，並試圖將所記載之羅馬拼音進行發音供族人辨識，另一成員則進行討論記錄並隨機深入討論並確認。這訳解讀之手稿內容，為《たかさごのたび一》共13頁關於族語及日語段落之確認。

圖４鳥居龍藏拍攝之力里社頭目。
(資料來源：順益博物館1994：96)

其中針對女性手紋部分，史前館團隊認為此圖說按照手稿脈絡應為力里社之刺青，圖中之羅馬拼音亦應為手部各圖紋之名稱，然而當地耆老卻說該發音不像是力里部落之發音（如圖中畫X處），圖中註記為手指及五隻手指的標記處，也並非史前館人員判斷之圖紋名稱，以上落差，是否是該單字語言已經遺失，仍需要進一步進行研究。

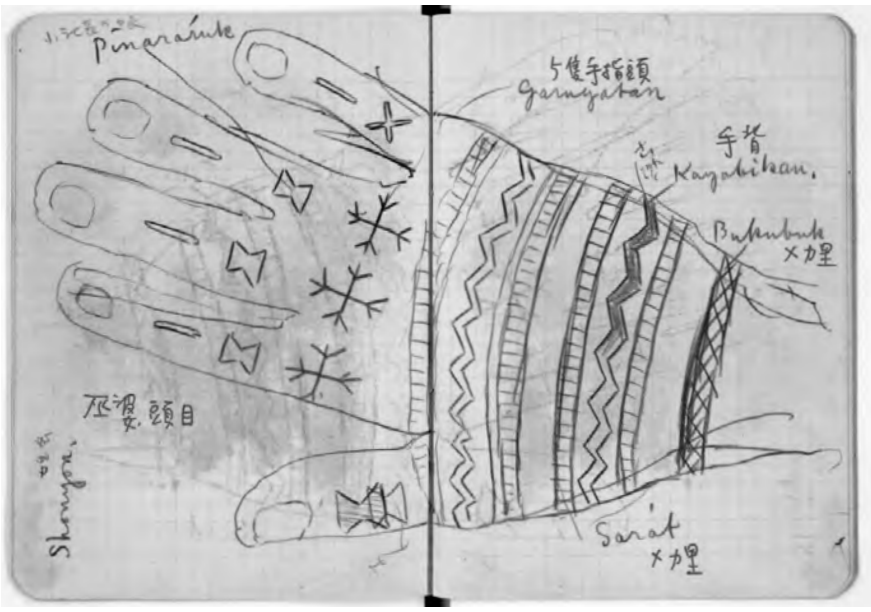


圖５有關手紋解讀，手寫中文字體為族人所確認。
(資料來源：德島縣立鳥居龍藏紀念博物館提供)

有關服飾配件的發音以及身體部位的文字紀錄，大部分得到了確認，但還是有單字無法得到確認，耆老族人們按圖示回答之單字卻與圖示註記發音不同，或是表明該發音並非力里部落之語言。

[3] 臺灣於2016年12月核定《長期照顧十年計畫2.0》（簡稱長照2.0），以回應高齡化社會的長照問題。而長期照顧十年計畫2.0中的原住民族專章，原住民族委員會以「族人照顧族人」、「因族因地制宜」的照顧模式，在原住民族地區及都會原住民族聚落大力推動文化健康站（簡稱文健站）的設置，參見https://www.ey.gov.tw/Page/448DE008087A1971/7a34f5fa-1ad7-4a4b-96a8-7b69aba5bced。

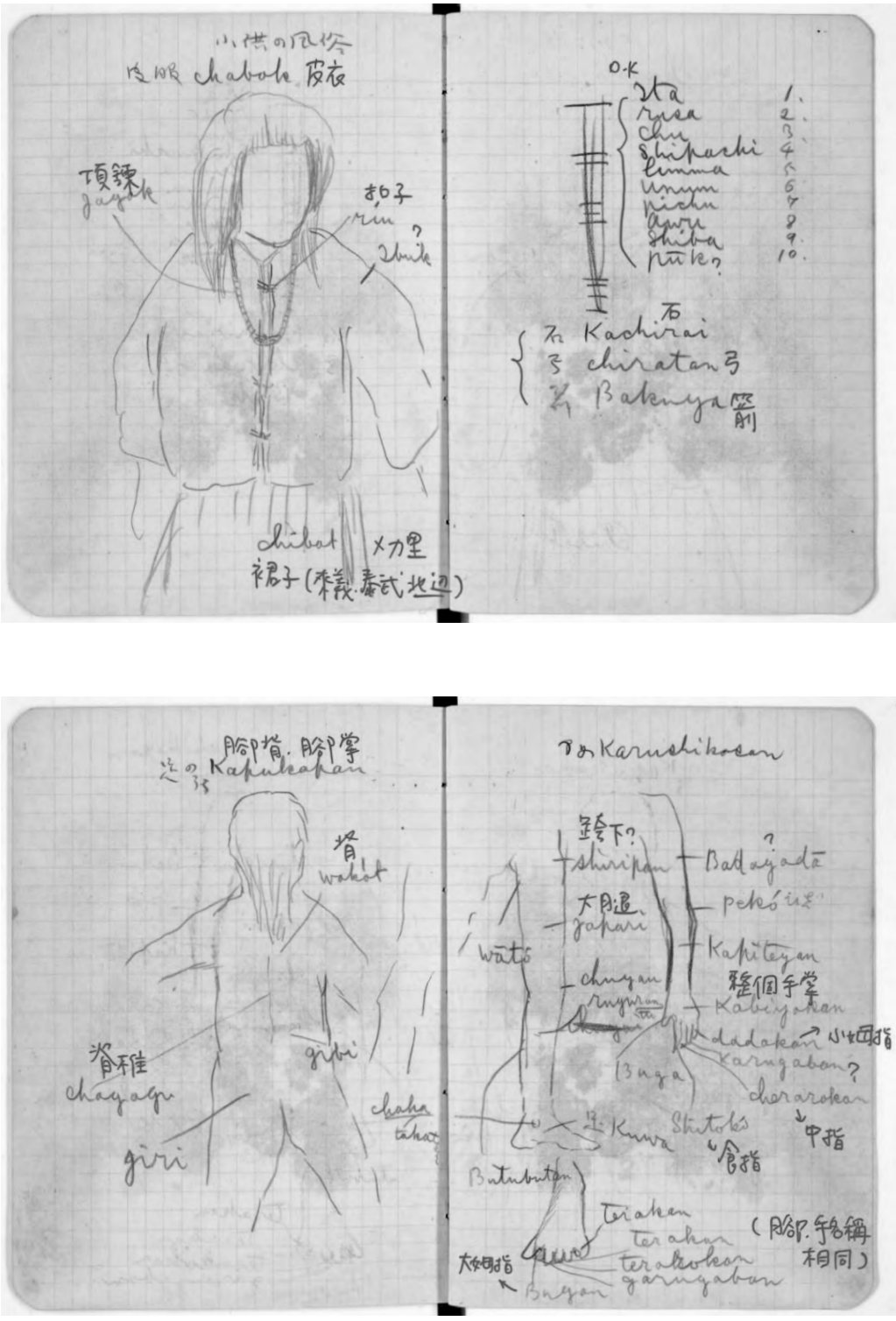


圖６記音上得到確認部分，打問號者為無法確認記音意義。
(資料來源：德島縣立鳥居龍藏紀念博物館提供)

在進行器物圖片確認時，耆老雖未能看懂與全部確認此頁註記之羅馬拼音，但卻可看圖補充資訊，例如菸斗器物的辨識，耆老表明早期會在菸管管口包覆一圈銀片，以保護菸斗不被燒壞，此一答案回饋，也同時呼應了此圖右下角鳥居龍藏所寫的文字「銀」。

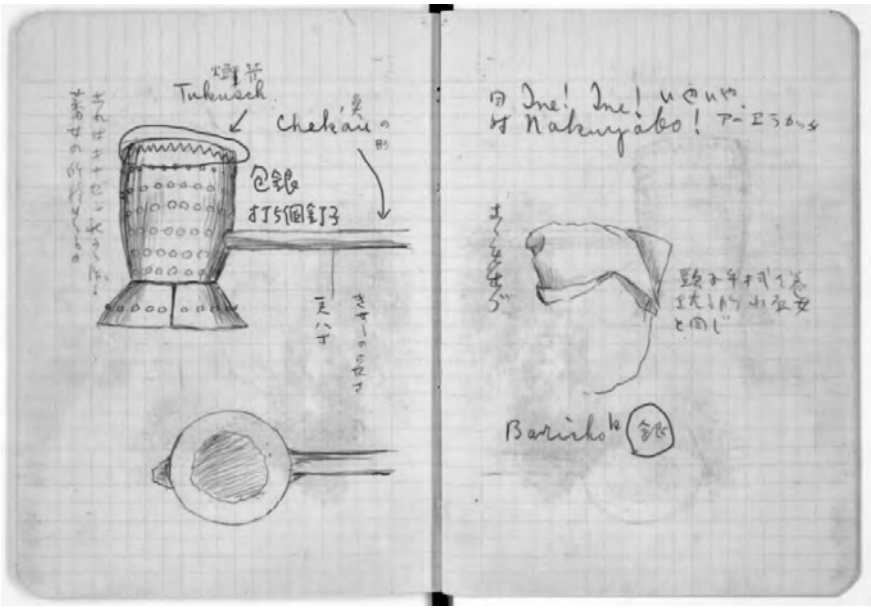


圖７有關煙斗的辨識，部份手寫中文字體為已確認之資訊。
(資料來源：德島縣立鳥居龍藏紀念博物館提供)

最後，辨識弓箭的持拿時，在場的族人一致同意手稿內繪製的姿勢正是力里社弓箭持拿的方式，部分耆老甚至當場直接展演持拿的狀況。

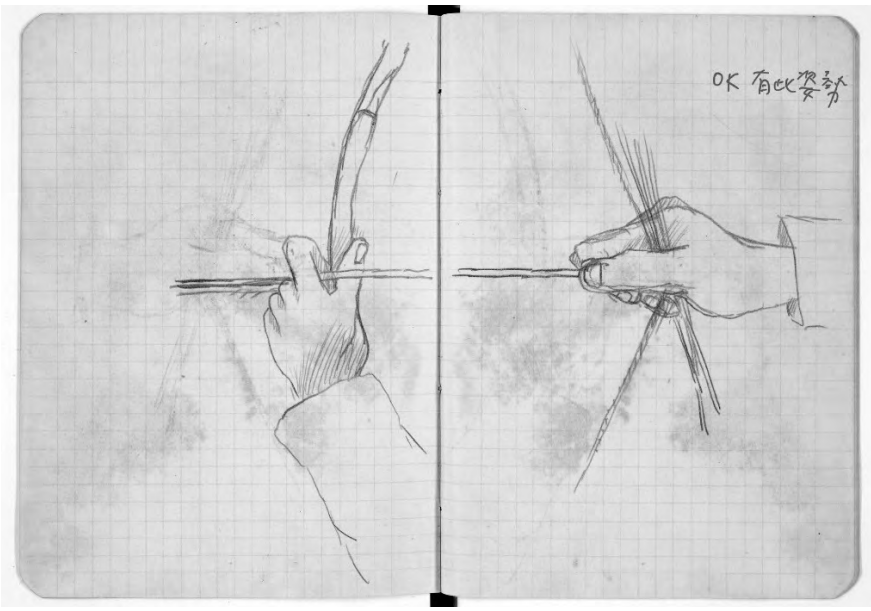


圖８弓箭持拿的解讀確認。
(資料來源：德島縣立鳥居龍藏紀念博物館提供)

本次前往力里部落與耆老共同解讀手稿過程整體而言非常順利，耆老們大多熱情配合並非常感謝館方人員的努力，雖然手稿內容未能完全確認，特別是本館人員在族語拼音之掌握能力有限，故降低了辨識性。然而，互動過程中雖然在文字解讀上有侷限，在圖畫部分卻引起了很高的共鳴，耆老往往能透過圖畫告知許多手稿以外的資訊，可說是非常驚喜的收穫。

後續要再進行解讀時，史前館團隊必須要有一定的族語掌握能力，至少能以族語拼音系統進行記音與發音。另團隊要大量蒐集與閱讀有關力里社的民族誌資料，對力里社區了解愈深，愈能與族人共同解析手稿內容。而這種的解讀工作，必須要持之以恆且多次進行。

三、史前館與原住民族的連結

史前館在近年的原住民族研究發展上有朝向與原住民各族合作進行文化詮釋權的實際行動，包含典藏品文物詮釋、文物再製及與原住民文物館或源出社群合作策展、進行書籍資料出版等各項工作。史前館也透過這樣的合作過程，與各原住民族，建立良好的互動關係。有關史前館近年與原住民各族互動上，分別以館藏原住民藏品分析以及辦理特展來進行說明；

（一）館藏原住民藏品分析

史前館所蒐集之原住民文物相對於國立臺灣博物館、中央研究院、臺灣大學等機構來說，蒐藏文物較晚開始，且多是經由文物商購得，文物來源比較沒有更清晰的脈絡，以至於研究、展示與推廣上面對極大的挑戰。為克服此種限制，史前館藉由2017-2020年間的「文化部科技計畫」、「臺灣行卷」、「國家文化記憶庫」等計畫經費和機會，進行與文物源出社群的合作，重新讓文物找回文化脈絡，並藉由重製的過程讓文物背後的知識復刻，也讓文物重現。然而文物重製的目的，並非僅是單純的文物製作，更重視在歷程中如何與原住民各族一同合作，以原住民族視角進行分析與解讀，並搭配以科學方式分析技法，進行重製，並且與耆老合作，從物件中挖掘原有的生活制度和文化脈絡規範，配合族語的學習與調查，藉此進行當代原住民族文化的詮釋。（張至善、余明旂2021：2）

史前館執行2017年為「臺灣行卷」計畫，將館藏藏品以科學分析以及技法樣本分析，首次嘗試共完成60件，包括布農族織品20件，卑南族、排灣族、阿美族、布農族編器40件。2018年計畫名稱改為「前瞻基礎建設－數位建設－國家文化記憶庫及數位加值應用計畫」，強調故事以及地理位置，成果包括排灣族服飾40件，布農族服飾17件，卑南族文物與卑南王傳說48件，噶哈巫族傳統披肩 1 件，烏來部落傳統織短衣一件、披肩一件。其他器物 8 件（排灣蜂蠟板 4 件、達悟陶壺 2 件、葛哈巫族銅鑼槌 2 件）。另完成館藏艾格里神父手稿及田野調查錄音之內容說明清單及數位化工作、《普悠瑪族口傳史》授權。2019年執行以「探索原住民的山林寶藏-生活物件中呈現出的庶民知識與歷史記憶」為主題之計畫，目前進行布農族纖維工藝分析20件，月桃13件，館藏排灣族傳統織布夾織20件，卑南衣飾28件，賽夏族傳統織造服飾 4 件。2020年執行的計畫包括「館藏布農族傳統鞣皮工藝科學分析」科學分析20件，重製 5 件、史前館臺灣原住民藏品傳統工藝科學分析20件，重製 5 件（太魯閣族）以及「館藏賽夏族傳統織布工藝科學分析」館藏品科學分析20件，重製 5 件。（參見附錄一）[4]

以本館展示教育組與臺東卡塔文化工作室在2018年間合作進行館藏排灣族織品服飾傳統工藝科學分析為例，進行了文物標本20件之基本分析工作，其中有 5 件文物須進行重要技法樣本資料的重製。卡塔文化工作室的負責人-排灣族的林秀慧女士（Kedrekedr Maljaljaves），在其出版的《部落書寫體：針路》一書中，所分析物件即是史前館館藏文物。在2010年間卡塔文化工作室串聯臺東的原住民族群夥伴們一起發起「為孩子做一件文化的衣裳－織繡工藝學堂」計畫，主要是對於傳統服飾相關工藝技術針繡與縫紉的傳授和教學活動。該計畫是從認識自己的傳統服飾上家族的紋飾及文化意涵，到學習重製傳統服飾，經由集中學習與回溯家中留傳的物件，瞭解其獨特性，來強化孩子對於自身的傳統文化美學及其肩負的

[4] 本資料係由本館展示教育組張至善副研究員所提供。

族群責任有所體認。然而隨著社會的變遷、外來文化的影響、文化記憶的斷裂以及族語能力減弱，原先附著於織品物件上的文化脈絡、知識體系、邏輯思維等業已消失或淪為片段，因此希望將這些織品重製，進而慢慢找回原先已消失的民族信仰與文化記憶。該工作室初期以家中所保存的傳統服裝、配飾作為初步的學習參考對象，後期再因考量到各個氏族的家傳圖紋和特有技法也有保存的需求，故朝向博物館典藏文物作為學習與分析的載體，從而強化對於民族文物的製作技術能力與傳統知識應用。在史前館張至善與余明旂的記錄下，成員的工作也表現出對此工作的熱誠與追求文物所蘊藏意義的渴望：

「計畫成員因自身所擁有或接觸到的傳統織品已寥寥可數，因此必須要將目光轉向史前館的館藏品，首先成員申請到史前館調閱各族物件，運用了最簡單的皮尺、方格紙、鉛筆，記錄了每一件繡片的圖案尺寸、繡線粗細、繡線的走針方式及繡法等，成員們把各自族群的服飾資料帶回去，先嘗試在孔隙較大的十字布上練習走針，在繡法熟稔後才正式在布上行針親手縫製衣裳，參與的成員將其所收集的資料經由其專業背景一一消化，整理出詳實的原住民族刺繡的脈絡與工序，並記錄於《針路》一書內。」（張至善、余明旂2021：5-6）

博物館與原住民族的合作，透過博物館完整的典藏技術與豐富的參考文獻資料，協助提供現代科學的分析方法，讓原住民族重新建立自己對這些屬於自身物件技術的回復，藉以產生對這些物件的歸屬感與榮耀，而博物館也可以協助原住民族人對物件詮釋的主體性，對博物館來說，充分盡到當代的社會責任，同時也讓這些技術與知識可以因應社會變遷，而延續了未來發展的可能。

（二）合作策展

從史前館展示教育組副研究員張至善回顧史前館的特展內容，歸納並進行分析，自2001年起至2020年 4 月止[5]，史前館康樂本館[6]共計有125檔次之特展，其中又以民族學數量最多，而在民族學類型之特展中，與原住民相關者（包含世界南島、臺灣原住民以及世界其他原住民）有71檔次，其中又以臺灣原住民族屬性相關之特展最多，共計有58檔次，已佔史前館近年特展總數將近二分之一。（參見附錄二）而在臺灣原住民特展中，其策展型態可約略分為 4 種，分別為（1）以史前館為主之原創性特展、（2）與國內外相關博物館進行合作策展、（3）以單一民族為主題之策展、（4）以單一部落為主題之特展。（張至善2022）

在上述策展型態中最能呼應「尊重源出社群文化詮釋權」概念之策展方式，便是以單一部落為主題之特展。此類特展以部落人物或活動為主題，在展示籌備上博物館會充分的與部落溝通與合作，包含進行田野調查採集當地故事，並邀請部落人士共同凝聚展示主題，融入部落精神並提供物件進行相關展示，包含佈展工作及開幕規劃等。這樣的合作過程，重點在於培養部落表達自身文化議題的觀點與能力，進而促進部落族人對於傳統文化工作的經營，也活絡博物館與地方之間的關係。

相關案例如史前館於2008年的兩檔「共同策展」為案例，分別為「Taupas. 日本軍-布農南洋軍伕回憶錄」[7]特展及「遺忘中重組-悲壯的七腳川cikasuwan之戰」[8]，文中提到『兩個特展的展題「回憶錄」及「遺忘中重組」，開啟與牽動部落居民的殖民記憶-尤其是創傷與離散。這段接觸史喚起心痛、血淚及陰影等經驗，也在策展過程中修補。此類型展示為本館在合作策展模式下促進博物館詮釋權回歸源出社群一種可行的方式。（盧梅芬2015）

---

[5] 史前館籌備處在1990年 2 月 1 日成立，於2001年 7 月10日試營運，2002年 8 月17日正式開館，為因應臺灣原住民族社會變遷，於2020年 6 月休館啟動建築及常設展廳改造工程更新。

[6] 史前館共有三個館舍，分別是在臺東康樂火車站旁的康樂本館，臺東火車站旁的卑南遺址公園以及位在臺南南科園區的南科考古館，本統計係針對在康樂本館辦理之特展。

[7] Taupas為日治時期被徵調至南洋的布農族軍伕。

[8] cikasuwan 是阿美族的部落，位於花蓮縣，於日治時期時曾與日本政府作戰，戰敗後遷移原居住地。

四、原住民族知識的建構的初探

排灣族力里社區或是與史前館合作之原住民族各部落，近年來積極地進行文化復振運動（cultural revitalization），具體的工作包含舊社遺址的調查、口訪傳說的採錄、傳統物件的重製、詮釋自我文化內容等，這些行動其實要追尋的是一種原住民族知識的建立。然而「原住民族知識」一辭，仍未有非常精準的定義。根據聯合國原住民族權利宣言第31條第一項的內容：「原住民族有權保持、掌管、保護和發展其文化遺產、傳統知識和傳統文化體現方式，以及其科學、技術和文化表現形式，包括人類和遺傳資源、種子、醫藥、關於動植物群特性的知識、口述傳統、文學作品、設計、體育和傳統遊戲、視覺和表演藝術。他們還有權保持、掌管、保護和發展自己對這些文化遺產、傳統知識和傳統文化體現方式的知識產權。」[9]有關原住民族知識，大致包含有「文化遺產」（cultural heritage）、「傳統知識」（traditional knowledge）、「傳統文化體現方式」（traditional cultural expressions）、「科學、技術和文化表現形式」（the manifestations of their sciences, technologies and cultures）等。（陳張培倫2009：28-29）筆者認為這樣的內涵，其性質包含有時間性與空間性。所謂的時間性，指的是原住民族知識必須要連結過去、實踐現今以及延續未來。而在空間性，則是對於生活空間的認識、分類以及相對應上所產生的邏輯思維。另外，有關臺灣的原住民族知識的組成來看，是由各個原住民族知識所形成的集合體，其中包含有阿美族知識、泰雅族知識、排灣族知識等。而各原住民知識，則由該民族內部之各個部落或聚落知識共同形成，例如排灣族知識，是力里社、來義社、牡丹社等集體組成（如圖９）。

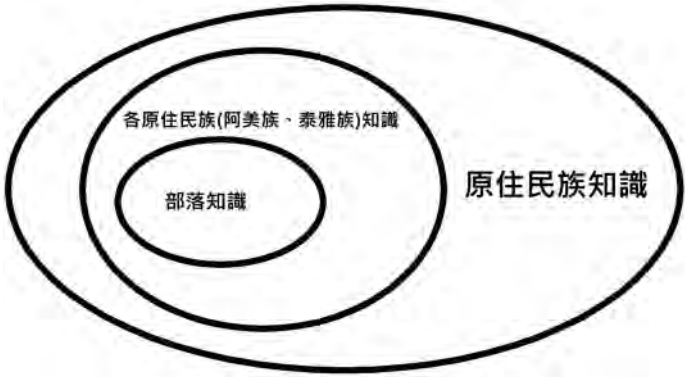


圖９原住民族知識組成

相對於原住民族知識，就會有非原住民族知識。所謂非原住民族知識，一般會稱為主流社會知識，甚至直接稱為西方現代知識。這兩種知識是各自無關嗎？當然是否定的，當兩種人群接觸互動時，雙方的知識體系，也會有所交集。以圖10為例，原住民族知識體系與非原住民族知識體系在交集上形成abcd四個領域，a區域屬於非原住民族知識中的核心，並未牽涉到相關原住民族知識內涵，而d區正好相反，所牽涉到的是純粹原住民族知識核心的領域。b與c兩個領域，則為兩種知識體系的交集，但兩者仍有所差異，b領域內涵中非原住民族知識比例較大，原住民族知識比例較小，c領域則呈現出相反的樣態。

[9] 原文為United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples：「Indigenous peoples have the right to maintain, control, protect and develop their cultural heritage, traditional knowledge and traditional cultural expressions, as well as the manifestations of their sciences, technologies and cultures, including human and genetic resources, seeds, medicines, knowledge of the properties of fauna and flora, oral traditions, literatures, designs, sports and traditional games and visual and performing arts. They also have the right to maintain, control, protect and develop their intellectual property over such cultural heritage, traditional knowledge, and traditional cultural expressions.」中文翻譯參見原住民族委員會網站 https://www.cip.gov.tw/zh-tw/news/data-list/865E99765D714714/0C3331F0EBD318C2600DB1785159A3BE-info.html。

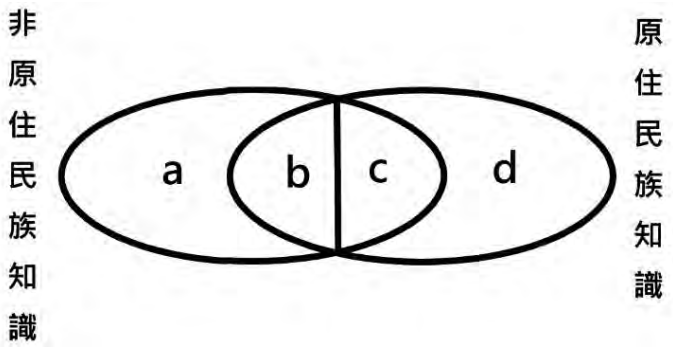


圖10知識關聯圖（資料來源：施正鋒2013：3）

另外再以Cunningham針對學術領域對紐西蘭毛利人研究的樣態，亦可以區分成四種，亦即對象上「不涉及毛利人」、「涉及毛利人」、「毛利人為中心」、「毛利人途徑」。這樣的分析，洽可以對圖10來做更細膩的說明，a區域為對象不涉及毛利人，b區域為涉及毛利人，c區域為研究對象以毛利人為中心，d＊區域則是全然以毛利人為研究對象，如表１所示。所而在縱向研究的表列，可分成「掌控（主體性）」、「毛利參與」、「方法」、「分析（結果）」。從類別來看，在掌控程度上，abc之主體仍為主流社會，僅d為毛利人。毛利的參與上，d幾乎都是毛利人。而在方法上，c與d均是是混合樣態，代表在研究上，就算極力追求毛利的研究方法與思維，但仍脫離不了所謂現代的研究趨勢，故即使是屬於以毛利人途徑，但還是呈現出混合的型態。在最後產出的分析結果上，c與d均為毛利樣態，雙方的差異則在於含量比例。

表１紐西蘭毛利研究（知識）的分類

對象 研究方向	不涉及毛利人（a）	涉及毛利人（b）	毛利人為中心（c）	毛利人途徑（d）
掌控（主體性）	主流社會	主流社會	主流社會	毛利
毛利參與	無	些許	主要	幾乎都是
方法	主流社會	主流社會	混合	混合
分析（結果）	主流社會	主流社會	毛利	毛利

資料來源：Cunningham原著，轉引自施正鋒2013：3。

當原住民族知識與非原住民族知識兩種體系並存時，無意中會產生比較。相較於西方知識，則會有「現代」、「科學」、「可延續」，原住民族知識往往會有「傳統」、「非科學」、「無法延續」等刻板印象（stereotypes）的產生。有如此的結果，在於原住民族知識的研究與詮釋上，原住民族是否居於主體性。以表１來看，早期進行原住民族知識研究上，都以b型態進行，雖然涉及原住民族，但對於原住民族知識仍視為主流知識的補充，甚至僅是一種可有可無的紀錄。現在的趨勢則開始朝向c型態進行，加強原住民族知識的重要性。惟站在原住民族的立場上，d型態是最終目標，但可能是一種理想狀態，是否能夠實現，仍有極大的挑戰。

博物館誠如大眾所熟知被視為是一種殖民時代所衍生的產物，一直到了近代發展進程中，博物館不斷透過對話及反省的實際行動，如向源出社群釋回文化詮釋權，返還文物或藏品註銷等作為，努力撕掉象徵殖民主義的標籤，進而與源出社群達成和解，也讓當代博物館逐漸開展出全新的使命與道路。而在2022年於布拉格甫結束的ICOM布拉格博物館大會中，對於博物館的定義有了如下的解釋：「博物館是一個為社會服務、非營利的常設性機構，對人類有形和無形遺產從事研究、收藏、保存、闡釋與展示。博物館向公眾開放、具易近性與包容性，促進多樣性和永續性。博物館以倫理、專業和社群參與的方式運作和交流，為教育、娛樂、反思和知識共享提供各種體驗。」史前館近年來在原住民族的研究出版品、展示、文物再利用，積極與原住民族連結，符合新的博物館定義，同時也以表１之c樣態的研究模式，與原住民族合作，朝向d樣態努力。

五、結論

排灣族力里社區，對於自身文化的重視以及進行有關舊社調查、習俗祭典的紀錄、搜尋文獻資料，乃至於撰寫自己的部落誌。這些文化復振工作，並非僅是一種懷舊工作，而是能夠建立起一套屬於力里社區的原住民族知識，而這種知識體系，也絕不是單向連結「古老」與「傳統」，更要能夠適應「現代」與「新創」，進而朝向「未來」與「永續」邁進。而對於鳥居龍藏手稿的解讀，就是完善這種知識體系的工作之一。原住民族知識不應再被視為主流知識的附屬，而應是另一種「主流知識」。

史前館的區位緊鄰著原住民族聚落，典藏之文物幾乎均為原住民族文化相關，這是史前館在原住民族知識建立的優勢，但也會被視為應擔負的責任。史前館朝著館藏文物開放、研究心態開放，期望成為原住民族知識建立的協作平台，與原住民族共同解讀鳥居龍藏手稿內容，即是重要的工作。而在與當地部落族人進行手稿解讀的過程中，得到了當地族人及文化工作者非常大的共鳴與興趣。族人表達了強烈意願，希望能持續參與後續手稿解讀的工作。這樣的工作必須持續不斷，未來史前館也會以這樣的角色與其他原住民族社群部落進行互動連結。

參考文獻

文化部網站『文化部再造歷史現場專案計劃資訊輔導平台』（2023.1.19）取自
https://rhs.boch.gov.tw/index.php?inter=project&id=3&did=59。
行政院網站『長照2.0－原住民族文化健康站推動情形』（2023.1.19）取自
https://www.cip.gov.tw/zh-tw/news/data-list/865E99765D714714/0C3331F0EBD318C2600DB1785159A3BE-info.html。
宋文薰等撰稿『跨越世紀的影像：鳥居龍藏眼中的台灣現原住民』（順益台灣原住民博物館1995）
施正鋒「原住民族知識生產與研究倫理」『台灣原住民族研究學報』3（3）：1-31（台灣原住民教授學會2013）
原住民族委員會網站『聯合國原住民族權利宣言』（2023.1.19）取自
https://www.ey.gov.tw/Page/448DE008087A1971/7a34f5fa-1ad7-4a4b-96a8-7b69aba5bced。
翁玉華、徐美賢總編輯『春日鄉力里Ralekerek部落誌』（屏東縣春日鄉力里村力里社區發展協會 2004年）
許木柱等編纂『重修臺灣省通志-卷三住民志同胄篇』（臺灣省文獻委員會1995）
陳張培倫「關於原住民族知識研究的一些反思」『台灣原住民研究論叢』5：25-53（台灣原住民教授學會2009）
張至善「轉身之前：回顧2001-2020史前館的原住民族特展」『博物館學季刊』36（2）：73-97（國立自然科學博物館2022）
張至善、余明旂「博物館與排灣族物質文化研究：以史前館近年工作為例」『2021排灣學研討會－排灣族知識體系的探究』研討會（國立屏東大學辦理2021.10.30-31）
葉神保「日治時期排灣族「南蕃事件」之研究」（政治大學民族學系博士論文 未出版 2014年）
盧梅芬「從展示文本邁向我群與他者的溝通：原住民文化再現的策展脈絡與反思」『博物館學季刊』29（3）：5-36（國立自然科學博物館 2015）

附錄一、史前館執行文物分析重製計畫名稱（資料來源：張至善整理提供）

年度	名稱	承攬廠商	執行內容
2017	館藏原住民族文物傳統工藝科學分析計畫	卡塔文化工作室	1．館藏藏品科學分析60件。 2．技法樣本25件。
2018	館藏臺灣原住民服裝飾品傳統工藝科學分析	卡塔文化工作室	1．館藏藏品科學分析20件。 2．樣本 5 件
	館藏臺排灣族織品服裝飾品傳統工藝科學分析」（二期）	卡塔文化工作室	1．館藏藏品科學分析20件。 2．樣本 5 件
	2018年度布農族織品服飾傳統工藝科學分析	綠毛氈手織工作室	1．館藏藏品科學分析17件。 2．胸兜 2 件傳統服飾 1 件。 3．GIS定位20筆
	館藏卑南族文物與卑南王傳說之相關研究分析暨故事採集計畫	臺東縣卑南族民族自治事務促進發展協會	1．館藏藏品科學分析40件。 2．二篇主題故事。 3．四十篇轉譯故事。 4．四十筆GIS定位。 5．二部動畫。
	重製卑南族頭巾	賢美工作坊	1．卑南族頭巾一件。 2．文物詮釋一篇。 3．照片300dpi照片二十張。
	重製卑南族男子短褲	賢美工作坊	1．卑南族頭巾一件。 2．文物詮釋一篇。 3．照片300dpi照片20張。
	重製卑南族傳統背簍	普悠瑪文化工作室	1．卑南族傳統背簍一件。 2．文物詮釋一篇。 3．照片300dpi照片30張
	重製排灣族蜂蠟板	橘色月亮工作室	1．排灣族傳統蜂蠟板 4 件。 2．文物詮釋一篇。 3．照片300dpi照片30張。
	製作葛哈巫族文物樣品	自然人潘正浩	1．噶哈巫族傳統披肩 1 件。 2．噶哈巫族傳統銅鑼槌 2 件。 3．文物詮釋一篇。
	製作泰雅族烏來部落傳統織造服飾樣品	自然人范月華	1．烏來部落傳統織短衣一件、披肩一件。 2．文物詮釋一篇。
	製作卑南族下賓朗部落傳統織造服飾樣品	自然人孫菊花	1．卑南族下賓朗部落長老背心、長老帽、女用綁腳布、男用開敞褲、女用外裙。
	館藏艾格里神父手稿及田野調查錄音之內容說明清單及數位化工作	自然人黃維晨	1．手稿及磁帶錄音完成數位化，並建立簡要說明清單。
	委託研究調查及樣本重製	馬斯林恩工作室	1．達悟族傳統陶壺、陶碗 2 件。 2．文物詮釋一篇。 3．照片300dpi照片30張。
	普悠瑪族口傳史	自然人陳光榮	《普悠瑪族口傳史》授權
2019	原住民山林寶藏～布農族纖維植物調查	馬斯林恩工作室	標本分析13件 月桃重製樣本 5 件
	館藏排灣族傳統織布夾織工藝科學分析	卡塔文化工作室	1．館藏排灣族傳統織布夾織20件。 2．文物詮釋一篇。 3．照片300dpi照片30張。
	2019年度史前館臺灣原住民藏品傳統工藝科學分析	綠毛氈手織設計室	1．館藏藏品科學分析20件 2．技法樣本 5 件
	民族學藏品GIS地理定位業務承攬	自然人楊嘉殷	GIS定位250筆。
	賽夏族傳統織造服飾樣品製作	自然人風麗珠	賽夏族女用長衣、女用短衣、女用裙、女用頭飾 4 件。
	卑南族下賓郎部落男用披肩樣品製作	自然人孫菊花	卑南族下賓郎部落男用披肩 1 件。
2020	館藏布農族傳統鞣皮工藝科學分析	–	1．館藏品科學分析20件 2．樣品重製 5 件 3．主題故事一篇 4．轉譯故事20則
	2020年度史前館臺灣原住民藏品傳統工藝科學分析	–	1．館藏品科學分析20件 2．重要藏品局部重製 5 件 3．主題故事一篇 4．轉譯故事20則
	館藏賽夏族傳統織布工藝科學分析	–	1．館藏品科學分析20件 2．樣品重製 5 件 3．主題故事一篇 4．轉譯故事20則

附錄二、2001年至2002年史前館（康樂本館）展出的特展一覽表（張至善2022：77-83）

序號	特展名稱	年代	備註	類型
1	臺灣珍寶－東部史前文物與原住民文物特展	2001	民族學	臺灣原住民
2	照片會說話——三個鏡頭下的臺灣原住民	2002	民族學	臺灣原住民
3	微弱的力與美–當代臺灣原住民創作的文化展現	2002	民族學	臺灣原住民
4	臺東社教館標本移轉	2003	民族學	臺灣原住民
5	回憶父親的歌—陳實、高一生與陸森寶的音樂故事特展	2003	民族學	臺灣原住民
6	向人間國寶文手鑿齒老人致敬	2004	民族學	臺灣原住民
7	收穫的季節臺灣原住民收穫祭特展	2004	民族學	臺灣原住民
8	編造．連結－93纖維創作工藝種子教師初級培訓成果展	2004	民族學	臺灣原住民
9	鬼斧神工－排灣族．魯凱族木雕特展	2004	民族學	臺灣原住民
10	很多手的人+很多人的手原住民社區學校手工藝教育成果展	2005	民族學	臺灣原住民
11	染織文化特展	2005	民族學	臺灣原住民
12	用手去找・新纖事纖維創作特展	2006	民族學	臺灣原住民
13	力與美的生命傳奇—馬蘭三勇士馬亨亨、楊傳廣與高巍和的故事	2007	民族學	臺灣原住民
14	百年觀點—史料中的臺灣原住民及臺東特展	2007	民族學	臺灣原住民
15	原來如此—南島與科學特展	2008	民族學	臺灣原住民
16	用心和木頭相處的男人——了嘎．里外與他的木雕作品	2009	民族學	臺灣原住民
17	映像蘭嶼－謝震隆攝影展	2009	民族學	臺灣原住民
18	海邊的孩子 －Suming與都蘭的巴卡路耐	2009	民族學	臺灣原住民
19	古道照顏色 八通關古道的探索	2009	民族學	臺灣原住民
20	阿里山鄒族 山豬部落藝術特展	2010	民族學	臺灣原住民
21	重生與感恩」嘉蘭村莫拉克風災周年回顧特展	2010	民族學	臺灣原住民
22	形、色、紋、質：臺灣原住民生活美學的微觀之旅特展	2011	民族學	臺灣原住民
23	南島文化創作特展暨屏、花、東高中職原藝班交流展演	2012	民族學	臺灣原住民
24	Kivala（我們交個朋友吧）：一段台、德部落樂舞交流情緣	2012	民族學	臺灣原住民
25	難以置信——南志信與寶桑部落的故事	2012	民族學	臺灣原住民
26	2012年「影像、圖像、文字、與部落的對話 - 原住民族群印記」	2012	民族學	臺灣原住民
27	第一屆臺灣原住民族青年藝術節 - 南臺灣原住民青年技藝創作展	2013	民族學	臺灣原住民
28	Sanga：飛舞的勇士	2013	民族學	臺灣原住民
29	第二屆臺灣原住民族青年藝術節 - 蝶舞青春：臺灣原住民青年技藝創作展	2014	民族學	臺灣原住民
30	原住民樂舞傳承計畫 -「百合花記」特展	2014	民族學	臺灣原住民
31	趣・逛：史前專「享」店 - 文創特展	2014	民族學	臺灣原住民
32	祖靈・連結 - 拉阿魯哇、卡那卡那富族的文化傳承特展	2014	民族學	臺灣原住民
33	人神盟約：排灣族maljeveq展	2014	民族學	臺灣原住民
34	魚樂青春-104年臺東縣高中職原住民青年聯合展演暨第 3 屆臺灣原住民青年藝術節	2015	民族學	臺灣原住民
35	重返水思路：Kiwit奇美部落特展	2015	民族學	臺灣原住民
36	尋找東方金銀島：荷蘭人遇見臺灣東部村社	2016	民族學	臺灣原住民
37	部落采風-105年臺東縣高中職原住民青年聯合展演暨第 4 屆臺灣原住民青年藝術節	2016	民族學	臺灣原住民
38	mi'aputr戴著花環的人們：下賓朗部落特展	2016	民族學	臺灣原住民
39	kulumah（回家）-第五屆原住民青年藝術節（海端鄉當代布農族木雕藝術創作展暨臺東縣高中職原住民青年聯合展演）	2017	民族學	臺灣原住民
40	Consonance馬修連恩聲音雕塑	2017	民族學	臺灣原住民
41	與祖先對唱：海端鄉布農族Pasibutbut特展聯合展演	2017	民族學	臺灣原住民
42	音樂的慰藉：臺灣原住民現代歌謠中的共享記憶特展	2018	民族學	臺灣原住民
43	圖紋．陶-第六屆原住民青年藝術節暨臺東縣高中職原住民青年聯合展演	2018	民族學	臺灣原住民
44	走過史前：臺灣原住民生活編器工藝特展	2019	民族學	臺灣原住民
45	編織築夢：第七屆原住民青年藝術節暨108年臺東縣高中職原藝班聯合展演	2019	民族學	臺灣原住民
46	還原正名-臺灣原住民族正名25周年主題特展	2019	民族學	臺灣原住民

47	傳統與變革－北美西南與臺灣東南原住民的文化與工藝特展	2003	民族學	臺灣原住民
48	阿美族的植物世界特展	2006	民族學	臺灣原住民
49	聽.傳.說：臺灣原住民與動物的故事特展	2006	民族學	臺灣原住民
50	太陽之子-當神話傳說遇上排灣族特展	2010	民族學	臺灣原住民
51	聞眾之聲 - 霧社事件80周年特展	2011	民族學	臺灣原住民
52	人類學家的足跡 - 臺灣人類學百年特展	2012	民族學	臺灣原住民
53	感恩心、一世情：達悟族瑞士返航文物特展	2014	民族學	臺灣原住民
54	傳統民族服飾娃娃特展	2014	民族學	臺灣原住民
55	繁衍、祈福與保護：背兒帶文化特展	2014	民族學	臺灣原住民
56	原來在這裡：臺灣原住民族陶藝展	2018	民族學	臺灣原住民
57	流浪的種子：移動與遷徙－從地方到他方的故事國際當代藝術交流計畫特展	2018	民族學	臺灣原住民
58	穿上彩虹衣-斯洛伐克民俗藝術暨臺東原住民文化聯展	2019	民族學	臺灣原住民
59	2005宏館新藏	2005	民族學	非原住民類
60	微笑小太陽－馬漢忠和他的同班同學	2007	民族學	非原住民類
61	公開的密室－博物館典藏保存技術特展	2008	民族學	非原住民類
62	孩子的另一扇眼睛 - 陽光、人味、博物館攝影紀錄展	2013	民族學	非原住民類
63	華夏珍寶－故宮金華百品特展	2001	民族學	非原住民類
64	屈原的故鄉－楚文化特展	2002	民族學	非原住民類
65	大航海時期—荷治時代臺灣生活教育展	2005	民族學	非原住民類
66	格薩爾唐卡精品臺灣巡迴展	2011	民族學	非原住民類
67	美國人在臺灣的足跡特展	2011	民族學	非原住民類
68	航行中的意外旅程：國立中央圖書館臺灣分館漂流文獻巡迴展	2012	民族學	非原住民類
69	美國夢・留學情 - 臺灣人的美國留學故事展	2013	民族學	非原住民類
70	蒙藏服飾特展	2014	民族學	非原住民類
71	西藏唐卡藝術特展	2015	民族學	非原住民類
72	神聖的遺產特展	2007	民族學	其他原住民
73	嗨！薏米珠－種子的手作藝術特展	2008	民族學	其他原住民
74	訊息棒 - 澳洲都市原住民認同國際巡迴展	2013	民族學	其他原住民
75	坎寧路：澳洲當代原住民藝術展	2015	民族學	其他原住民
76	南島民族的船－西太平洋航海者的交通工具 特展	2005	民族學	世界南島
77	豐美的織紋—臺灣、東南亞南島民族染織特展	2006	民族學	世界南島
78	跨越與連結－臺灣與南島文化國際攝影巡迴展	2008	民族學	世界南島
79	南海樂園－日本岩佐嘉親先生捐贈大洋洲文物展	2009	民族學	世界南島
80	情繫南島 - 岩佐嘉親及其收藏特展	2013	民族學	世界南島
81	山海家園－南太平洋原住民文化特展	2003	民族學	世界南島
82	檀島傳奇－從羽神到熔爐特展	2005	民族學	世界南島
83	大洋之舟-南島民族的航行特展	2008	民族學	世界南島
84	海角印象 - 劉其偉父子的新幾內亞行	2012	民族學	世界南島
85	臺灣猴囝仔特展	2004	自然史	
86	史前垃圾堆中的寶貝：盧錫波先生與郭德鈴先生捐贈標本展	2004	考古學	
87	雞年特展	2005	自然史	
88	石破天驚 - 四千年前石器製造場特展	2005	考古學	
89	狗的前世今生狗年特展	2006	自然史	
90	豬齁齁地叫豬年特展	2007	自然史	
91	如鼠家珍鼠年特展	2008	自然史	
92	牛轉乾坤牛年特展	2009	自然史	
93	虎年生肖	2010	自然史	
94	卑南遺址影像回顧特展	2010	考古學	
95	2010宏館新藏特展（考古）	2010	考古學	
96	卑南考古傳奇特展	2010	考古學	

97	I Love you,兔 — 兔年展	2011	自然史	
98	岩繪・岩雕 - 石頭畫布上的史前史岩畫特展	2011	考古學	
99	龍，東西大不同 - 龍年特展	2012	自然史	
100	土理土器：臺灣史前陶容器特展	2012	考古學	
101	蛇年特展	2013	自然史	
102	最早的獵人 - 八仙洞舊石器時代文物特展	2013	考古學	
103	馬年特展	2014	自然史	
104	羊羊大觀：羊年特展	2015	自然史	
105	玉見臺灣：史前與當代之交會特展	2016	考古學	
106	數位學習在故宮	2005	其他	
107	暴龍蘇特展	2007	自然史	
108	愛他，不HOT他，全球暖化與節能減碳特展	2008	自然史	
109	穿越歷史長河——文明科技四千年	2009	其他	
110	有蝠同享蝙蝠特展 巡迴展	2009	自然史	
111	永遠的達爾文Darwin NOW巡迴展	2009	自然史	
112	低碳臺灣・高瞻未來 - 你能・我也能特展	2011	自然史	
113	追風南行小英雄 - 黑面琵鷺的故事影像展	2012	自然史	
114	節能減碳三校聯展	2012	自然史	
115	工安福爾摩斯特展	2012	其他	
116	臺東天主教白冷會現代教堂數位展	2013	其他	
117	遇見大未來 - 地球環境變遷特展	2013	自然史	
118	愛地球特攻隊・兒童特探索展	2013	自然史	
119	光照大千 - 絲綢之路的佛教藝術考古特展	2013	考古學	
120	七寶瑞光 - 中國南方佛教藝術考古展	2014	考古學	
121	2015地質與防災特展 潛返地心 地質大探索	2015	自然史	
122	聽水的故事	2016	自然史	
123	顏色的基因：色彩與文化特展	2016	其他	
124	水保防災起步走	2018	自然史	
125	走進實幻之島-故宮X史前數位遊樂場	2019	其他	

鳥居龍蔵と共に歩む－台湾先住民族の発展と国立台湾史前文化博物館の役割－

陳　俊男、林　慧仙、曾　于宣
翻訳：山西弘朗

摘要

鳥居龍蔵の台湾に関連する手書ノートは現在23冊あるが、史前館は古道を最初の思考の起点にしようと、浸水営古道において重要な集落である力里社を端緒として選び、手書ノートの内容解読を共同して進めている。

力里社の人々は文化復興や習俗祭儀の実施、自らのついての研究において不可欠であり、当該集落は2004年に『春日郷力里Ralekerek集落誌』を出版し、積極的に集落に関連する文化の記録と発展を整理した。力里社の人々はまだ未出版の鳥居龍蔵の手書きノートがあることを聞き、とても興味を持っており、さらに多くの人々が参加し、ともに解読を進め、力里社の文化の歴史をより豊かにしたいと希望している。解読のプロセスで、人々は言語の発音の修正と確認から進めた。写真とその内容については、高い共鳴を引き起こし、長老は写真や絵を通して手書きノートに書かれていない情報を教えてくれた。

史前館は近年、先住民族の研究発展の上に先住民各民族と協力し、文化の解釈権の実際の行動に取り組んでおり、所蔵品の解釈、文物の再生と先住民の文物館や所蔵品がもともとあった集落との展示協力、書籍資料の出版などさまざまな作業がある。史前館は収蔵する先住民文物の分析と特別展での協力プロセスを通して、各先住民族と良好な共同関係を構築している。

先住民族知識は、おおまかに「文化遺産」(cultural heritage)、「伝統知識」(traditional knowledge)、「伝統文化の表現方法」(traditional cultural expressions)、「科学、技術と文化表現形式」(the manifestations of their sciences, technologies and cultures) などがある。その性質には時間性と空間性が含まれている。いわゆる時間性とは先住民族知識がかならず過去とつながり、実践が現在と未来へ続くことを指す。空間性とは、生活空間の認識や分類、それに基づくロジックや思惟を生み出すことを指す。

先住民族知識は主流知識の付属物と見られるべきではなく、もう一つの「主流知識」なのである。史前館は収蔵文物の開放、研究態度の開放に向けて、先住民族知識の共同プラットホームになることを目指している。先住民族と鳥居龍蔵の手書きノートの内容を共同で解読することは重要な実践方法である。このような作業は絶え間なく続けなければならない。そして将来的には、このような役割を担いながら、他の先住民族集落と相互連携を進めていく。

キーワード：力里社、史前館、先住民族知識、鳥居龍蔵手書ノート

一、前言

1896年に鳥居龍蔵は台湾を訪れ、人類学の専門的な台湾先住民族（以下、先住民族と称す）調査の

開始し、その後も多くの日本人学者が関連する調査研究に従事した。また豊富な資料と研究成果が積み重ねられ、日本統治時代における先住民族の生活方式や文化習俗を理解する重要な根拠となっている。国民政府が台湾に来てからは、中央研究院や各大学の学者が、継続して先住民族に関する研究資料を積み重ねてきている。

台湾の政治的開放につれ、先住民族は自己の主体性を追求し始めた。1980年代に正名と土地を返せという社会運動が起こり、1990年代には憲政体制において自分たちの権益を取り戻した。2000年になってからは、先住民族は9族の分類法について検討を進め、サオ族が民族正名の第一歩となってから、現在に至るまで公式に16族の民族正名運動が認定された。先住民族の正名は自身の民族文化について振り返りをともなっており、先住民各族は次々と自分たちの文化研究に身を投じた。例えば伝統領域や集落地図の画定、旧集落の実地調査、伝統文様、服飾や習俗祭儀の復興など、先住民族文化の継続と発揚をどのようにするかや伝統知識の持続可能性を追求してきた。現在、先住民族の発展は盛んな潮流である。しかし、民族発展のプロセスの中で最大の課題に直面している。民族文化の記憶について若い世代が断絶しており、お年寄りたちが次第に亡くなるなかで、完全な民族文化体系を構築しなければならず、急いで聞き取り作業を進め、記録を明らかにするほかに、早期の研究者による調査の成果を探し求め閲覧し、国内外の博物館が所蔵する民族文物を見に行くことが、先住民族の伝統文化を探求する非常に重要なアプローチになっている。このような伝統文化の復興は、先住民族にとっては、一種の古いものを懐かしむ心理であるが、さらに深い意義を持っている。このことがこの文章の初歩的に検討する方向性である。

国立台湾史前文化博物館（以下、史前館と称す）はオーストロネシア民族文化の考古学と民族学文物を所蔵し、オーストロネシア民族文化研究の重要拠点である。このほか、史前館は各先住民集落と協力し先住民族の地方にある文物館との連携し、所蔵する文物がどのように先住民各民族の発展に十分に役割を果たすことができるかを考えている。博物館の現代性と博物館の重要な社会的責任を発揮することを体現している。本文のもう一つの討論の方向性は、先住民族の発展プロセスの中で伝統文化を追求する上で、史前館がいかなる協力を提供できるか、その中で作業のパートナーとなれるか、将来的に博物館の機能を策定、発揮できるかということである。

鳥居龍蔵の関連する報告や専門的研究は、すでに先住民族研究において重要な文献成果となっている。史前館は徳島県立鳥居龍蔵記念博物館との協力に基づいて、考古学、民族・人類学、自然科学、歴史学、博物館學の研究者や館外の学者と一緒に研究グループを組織し、鳥居龍蔵の手書ノートの内容を解読し、鳥居龍蔵の調査ルートを再び踏査するとともに、当時の台湾先住民族の状況を再び解明しようとしている。他にも、虚心で学習する態度に立って、現在の台湾先住民文化の発展状況を記録しようとしている。

鳥居龍蔵の台湾に関連する手書ノートは23冊あり、史前館は初歩として手書ノートのエリアを選び、先に古道を最初の思考の起点にすることにした。特に鳥居龍蔵が歩いたであろう道程から、手書ノートの文脈を理解しようと試みている。そのため、史前館は台湾南西部から東部にある浸水営古道を選び、その重要な集落である屏東地区の春日郷力里社を端緒とした。

二、鳥居龍蔵手書ノートの解読

（一）力里社の自らによる研究

Ralekerek力里社は鳥居龍蔵が「リキリキ」と記し、パイワン族Butsul亜族のPaumaumaq群に属する（許木柱等編纂1995：608、葉神保2014：4）、台湾の屏東県春日郷力里村である。この集落は浸水営古道の西側の入口に位置し、清代や日本統治期の文献記録にしばしば出てくる、パイワン族の重要

な集落である。来義や山地門といった知名度のあるパイワン族集落ほどではないが、外部から注目を集めており、集落の文化復興、習俗祭儀の実施、自らについての研究において欠かすことができない。特に2004年に出版した『春日郷力里Ralekerek集落誌』は、全体的な集落の文化と発展について書かれている。

集落誌の記録によれば、力里社の伝統領域の西側は中央山脈の姑子崙山西側であり、東は台東達仁郷から中央山脈姑子崙山から南に方向の姑子崙渓右側から茶茶亜頓渓までで、浸水営越嶺道全体がその活動領域である。力里社は1931年、1967年、1973年の三回移住をしており、特に1973年に莉泰（RITA）台風が土石流を引き起こし、元の居住地を手放し、現在の集落の所在地に移住した。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：6）

集落の人々は旧社の調査において、元村長の記憶によれば、1959年ごろ、政府の政策に応じて、旧社から平地への居住が始まったとされ、45年を隔てて、2003年４月６日に力里社ではお年寄りから若者まで三世代の参加者で旧社を辿る旅を実施した。人々は力里社から旧社へと進み、日本統治期の国民学校の広場の跡地に集合し、まず青年と壮年の人々が雑木や草などをきれいにして、みんなでそこに座って、理事長、村長、頭目、ならびに議員が人々にこの活動の目的を説明した。そして、旧社にある家屋の清掃を分担し、祖霊祭祀を行ったほか、物語や伝説を話した。議員がみんなを率いて、一緒に「共同で遺跡を保護し、もし誰かが故意に破壊したり、石板を運び出すようなことがあれば、それはみんなの敵となり、祖先の敵にもなり、見過ごすことはしない」と宣誓してから、実際に分担作業を行った。各家族の長老は各家族を率いて、自分たちの家屋を探し、人々の手で清掃活動をおこなった。清掃が終わった後、各家屋の前にある石板の上に粟酒、粟の粽、豚肉、魚や海老、粟餅などの供え物をおいて、粟酒を手に、天地の祖先に向かって祭祀をして、子孫を守り、繁栄することを祈った。この旧社への里帰りはかつて旧社で居住したお年寄りたちにとって、子供のころの状況を思い出させ、この記憶を若い世代に語ることとなり、伝承するという目的が達成された。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：202）

旧社をたどる以外にも、力里社の人々は浸水営古道について人々の自分たちの調査と記録を行って、大量の文献資料の収集と実際の踏査を行った。浸水営古道の由来、祖先の言い伝え、歴史上の出来事、沿道の動植物や景観など、少しずつ文字記録にして、その知識が内面化されていった。そして８ヵ所の旧社の遺跡と９か所の清朝期の歴史的遺跡を明らかにして、地元を深く知る観光の産業を発展させ、力里社が社会の人々に認識されるようになった。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：34-48）

力里社には全部で８つの集落領袖の系統があり、Djakudjkuc、Kaub'san、Ljiyab'uan、Mab'ingab'in、Luveljn、Katutuljan、Qaqatiyan、Tjawqacuqに分けることができる。その中のKaub'sanが力里社の最大の家族で、Ljiyab'uanの機織り技術（vincikan）がこの集落の代表的な芸術作品である。力里社は現在でも伝統的な司祭と司祭による祭儀が残っている。司祭の養成は非常に厳格であり、まず祖霊からの卜占に用いる数珠、ムクロジのようなものを与えられ、祖霊の指導を受ける準備を予告し、人間と神の世界の間の伝達を行う。卜占に用いる数珠の起源は２種類あり、一つは家族の一世代前か二世代前の祖先が司祭をつとめたことがあり、祖霊によって司祭になることを告げられ、一つの数珠が伝承される。もう一つは、先祖が司祭をつとめたことがなくても祖霊に祝福され、続けて５つの数珠を得たものである。この数珠を得たときは、拒絶することはできず、さもなければ身体に変調をきたして、医療では治せない状況になり、このさしずを受け入れると術師の祭祀儀礼の学習が開始する。師の認証を通過してから、司祭として独立して行えるようになる。司祭は一般的に生命祭儀、志望祭儀、祈福祭儀、治病祭儀、農耕祭礼、狩猟祭礼、雄の鷹を捕獲する祭礼、歳時祭礼、五年祭、五年祭後の二年と六年祭などの祭儀を行う。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：10-14）

力里社の伝統的な家屋はすべて石板を用いて、最初に頑丈な木材を探して、家屋の中の支柱にして、その後石板を屋根にして、もし石板が不足すれば萱を使ってよい。石板は光ってすべすべのモノを集めなければならず、床板は内用と外用に分けられる。内用は祭祀に用いられ、外用は飲食活動の場に用いられる。早期には内用、外用とも室内埋葬に使用された。家屋は地形に合わせて建設され、一般的に東に向かっており、住居の入口の上の横梁は頭目と平民の違いがある。頭目は人の頭や百歩蛇の図柄を彫刻するが、平民は彫刻された木材は使用しない。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：96）

文化的祭儀の保存については、力里社は五年祭の祭儀が続けられており、まず司祭と司祭の助手が選ばれ、続けて実施時間を決めて、頭目が豚を殺して、集落の発祥地と祖先が安置されている場所で祭祀が行われる。司祭は祝福を祈った後で、供物を四方向の神に分けて、守護神を設置する。五年祭の祭儀は良い神と悪い霊を迎えてしまうため、守護神は集落を保護してくれる。人々は竹竿を準備して球を突き刺す。竿の長さは45尺（約13メートル）で、火で温めてまっすぐさせ裁量して確認する。刺す球は相思樹の樹皮で制作され、全部で16個必要である。五年祭の初日は村人全員参加し着飾って祖霊祭祀の地点で霊を迎える祭りを行い、すべての頭目と司祭は祖霊を祭り、それ以外の人々は外で飛び跳ねて舞う。球を突き刺すのも祭祀の中で行われ、これに参加する人は、お守りを携えて幸運を祈る。球を突き刺す人々が定位置についてから、司祭が球を広場の中央に持っていき、空中に投げる。一つ目で刺さらなければ、司祭は故意に別の方向に投げて、突き刺されないようにする。二球目以降は続けて照準を合わせて、15個中はじめの５個がそれぞれ異なる幸運を代表している。突き刺せた者は５年以内に良好な福運を得る。司祭は５年祭の挙行期間に、毎日三度の食事時間にいずれも祖霊の安置場所へ行って祭祀を行う。また人々もそれぞれの家で祭祀を行う。なぜなら５年祭では、各家庭の祖霊も家の中で子孫に付き添っているからである。三日目になって悪霊を送り、各家庭はそれぞれ二つの小包を準備する。そして司祭が祖霊が安置される場所で祭祀を行った後、東西の二つの道に分かれて、男性の村人が村の外まで送って行って、供え物のグループが家の門を越えるときに、各家族は竹の枝を持って屋内の悪霊を外に出し、供物のグループが村内に戻って来てから元の道には帰らないようにする。そのため、少し不便なルートを通って、道端で悪霊と再び一緒になることを避けるのである。二つの道の人々が村内に帰って来てから、司祭は清めた水で身を清め、邪気を払う。５日目にはよい霊を送り、悪霊を送った順序と同じようにして、供物は少し多めにする。よい霊を送り終えてから、再び球を突き刺す活動をして、刺し終えてから、司祭は祖霊が安置されたところへ16個目の球を戻して、最後に突き刺した者が記念に持って帰る。この活動を終えてから、参加者は竹竿を節ごとに裁断し、最後の一節を家に持って帰って、福運を持ち帰ったことを示す。この時にすぐに竹竿架を壊す。最後の球を突き刺した者は、もしこの球の卜占をして、福運になった、家族全員が一家で祝福する。もし災難の兆候が出れば、突き刺した者の家で慰める。６日目に司祭は再び祖霊の安置された場所で祭祀が行われ、神霊に向かって球を突き刺す活動が円満に終了したことを述べて、この時から狩猟へ出かけることが可能となる。（翁玉華、徐美賢總編輯2004：102-103）

（二）力里社の人々と手書ノートの内容を分かち合う

史前館は力里社の人々と一緒に鳥居龍蔵の手書ノートの解読を進め、次々に力里社の人々を訪ね、鳥居龍蔵がはじめて力里社を調査したルートを踏査した。

はじめに力里社の季亜夫Giljegiliev Malingalin（中国語名：陳文龍）[1]と出会って、史前館と徳島県立鳥居龍蔵記念博物館が協力して、鳥居龍蔵の手書ノートの解読を進めており、史前館は力里社に参加してもらって共同で行いたいこと、手書ノートには力里社やパイワン族について記録があり、細かい解析を進めていることを伝えた。季亜夫はこの作業についてとても興味を持って、2022年に力里社が開催した「『老歸崇－老力里』パイワン旧社並びに古道の再現春日プロジェクト」として形となり、

[1] 父親が力里社のMab'ingab'in家の頭目。

このプロジェクトは「地元の次世代の子供たちの力を培い、地元の農業観光経営を連携させる」、「低密度高効率の作業方法で旧帰崇と旧力里社の間の古道を復活させる」、「旧集落の文化生態を保護し、現代科学技術と連携し歴史文化観光産業を構築し、集落の文化と生活の記憶を集合させ、旧集落と民族の人々の紐帯を強化する」ことを目的としている。[2] 力里社は大量の文献資料と研究成果を収集し、鳥居龍蔵の未出版の手書ノートや数百枚の写真があることを聞いて、その内容を知りたいと渇望していた。季は力里社が歴史的に古い集落で地元にふれあう旅行を広める際に、社会の多くの人が力里社についてわからないことがあるので、力里社が主体性を持つことを前提に、社会的知名度を高めたいと希望した。手書ノートの内容について、多くの人々に参加してもらうことで、より多くの人々が一緒に解読ができることになり、力里社の文化や歴史を豊かにすることに役立たせることとなった。

今のところ、力里社についての手書ノートは、史前館が初歩的な内容の解読をしており、多くが民族の服飾や衣類の習慣、建築の外観、自然景観の描写、入れ墨、集落の戸数の記録、弓矢の絵図と叙述、身体部位の名称と基礎的な生活物品の言語と発音の記録が主な記録内容である。手書ノートの記述方式は、早期の日本語の記述習慣である、英語、中国語（文語体）とローマ字による現地語の記録であり、その中で日本語と現地語が主である。当館が日本語がわかるスタッフによるグループを組織して初歩的な解読をしたが、手書ノートの中には大量の現地語の記録があり、集落の歴史や地理、位置関係、現地の言語に詳しい先住民族の人々の協力を仰がなければ、一歩進んだ解読ができなかった。史前館は2022年12月27日に先に力里社で説明会を行い、旧力里社跡を訪れることについての最初の計画を説明し、会場で、パワーポイントで鳥居龍蔵の力里社に関する調査の手書絵図をスクリーンに映した。会場の人々の中には多くの頭目家族のメンバーがおり、手書ノートで鳥居龍蔵が力里社には合わせて200戸あると記録されてることに、多くの会場の人々は驚いた。もともと日本による台湾統治が始まった初期に、力里社にすでに200戸にも上っていたからである。現在の力里社には256戸のパイワンの人々がおり、パイワン族の集落の中では、来義集落にわずかに及ばないものの、力里社の人口の多さを示している。

この他、男女の体に入れ墨があると表示されたとき、会場の人々はすぐに男性の入れ墨は頭目に属する人の専用であり、入れ墨のスタイルは細かな解析・研究を進めていかなければ、どの頭目の家のものかを知ることができないと答えた。女性の入れ墨については、会場の人々からどの頭目家族のメンバーに属するか判断することはできなかったが、司祭の系統に属するかもしれないと推測したが、早期の力里社では、平民は入れ墨をすることができなかったということでは一致した。

史前館は人々に一枚の力里社の頭目の写真を見せた。それは頭目が豹の衣を身についているもので、会場の人々は不思議そうな反応で、もともと百年以上前には力里社の頭目も雲豹の服を着ているというのは、人々にとってとても重要な情報となった。

はじめての短時間の現地の人々との情報共有を通して、人々が多くの貴重な情報を提供してくれることがわかった。そのため、集落の先住民の人々と2023年１月６日に再度契約をして、正式に集落の手書ノート解読作業が進められることになった。手書ノートの内容についてさらに理解を深めることを希望するほかに、そのプロセスの中での評価や理解についても現地集落が参加型にしたいと試みている。人々の参加を拡大するために史前館のスタッフが力里文化集会所で、文化健康スポット[3]のお

---

[2] 文化部の再興歴史現場プロジェクトの情報サポートプラットホーム
https://rhs.boch.gov.tw/index.php?inter=project&id=3&did=59。

[3] 台湾では2016年12月に《長期ケア十年計画2.0》（略して長照2.0）として高齢化社会の長期ケアの問題に対応するために策定された。この長期ケア十年計画の中で先住民族の部分は先住民族委員会が「民族が民族をケアする」、「民族と地域に応じて取り決める」というケアのモデルによって、先住民族地域と都会の先住民族の

年寄りの人々招いて、手書ノートの解読に参加してもらった。当日参加したのはお年寄り15人で、年齢は65歳以上だった。史前館のスタッフはパイワン語を話せないので、現地語の通訳者を用意していたが、その通訳者は女性で65～70歳ぐらいだった。当日、文化健康スポットの会議室で解読作業の説明と話し合いが行われた。会場で会議用の大型スクリーンを準備し、携帯したパソコンでスキャンした写真をパワーポイントで説明した。スタッフの一人が演台の前でスクリーンに写真を映し出して、手書ノートの内容を説明して、記載されているローマ字を発音して人々に伝え、話し合いが行われている内容をもう一人が記録し、逐次詳しく話し合って確認した。手書ノートの『たかさごのたび一』は合わせて13頁の民族言語と日本語の段落の確認を行った。

その中で、女性の手の入れ墨について、史前館のスタッフは手書ノートの流れに従うと力里社の入れ墨であり、絵の中のローマ字は手の入れ墨の名称であると考えていた。しかし、現地のお年寄りは、その発音は力里社の発音ではないようだと言った（図の中のXと書いたところ）。絵の中の記述で手と５本の指の表記について、史前館のスタッフは入れ墨の模様の名前だと判断していたが、これがくい違いがあり、この単語の言語がすでに失われたものなのか、引き続きさらなる研究を進める必要がある。

服飾の関する発音と身体部位の文字記録は、大部分は確認ができたが、単語は確認できなかった。お年寄りたちは絵に基づいて答えた単語と絵に記述された発音が異なり、力里社集落の言語ではないと主張した。

器物の絵について確認した時､長老はこのページの全部のローマ字表記を見ても分からなかったが、この絵について情報を補充してくれた。例えばキセルについては、長老は早期はキセルの口の部分が銀で覆われており、キセルの筒が焼けて壊れないようにしたと述べた。この説明によって、この絵に書かれた「銀」という文字と符合した。

最後に、弓の持ち方について識別しているとき、会場の人々は、手書ノートに書かれている姿勢は力里社の弓の持ち方であるという同じ意見であった。何人かの長老は会場でどのように持つかを実演してくれた。

今回の力里集落での手書ノートの共同解読のプロセスは、全体的に非常にスムーズに進み、長老たちはとても熱心に向き合って、当館のスタッフの努力に感謝してくれた。手書ノートの内容は完全には確認できなかったものの、当館のスタッフでは民族言語の発音を把握する能力は限界があり、認識レベルは低くなる。共同するプロセスの中で文字の解読には限度があるが、絵の部分は高い共鳴を引き起こして、長老は絵を通して、手書ノート以外の情報をたくさん教えてくれたので、非常に喜ばしい収穫となった。

三、史前館と先住民族のつながり

史前館は近年先住民族研究の発展において、先住民各民族と協力して文化的解釈権の実際の行動に向かっており、所蔵品の文物の解釈、文物の複製と先住民文物館あるいは収集元の集落との共同展示、書籍資料の出版などさまざまな作業がある。史前館はこのような協力プロセスを通して先住民族と良好な相互関係を構築している。史前館が近年先住民各族と共同する中での、所蔵する先住民文物の分析と特別展の開催の進め方について説明する。

集落において文化健康センター（略して文健スポット）の設置が強力に推進されている。以下参照。https://www.ey.gov.tw/Page/448DE008087A1971/7a34f5fa-1ad7-4a4b-96a8-7b69aba5bced。

（一）当館所蔵の先住民物品の分析

史前館が収集している先住民文物は国立臺灣博物館、中央研究院、台湾大学などの機関に比べると、文物の収集は遅く始まり、さらに多くは古物商を通して購入しており、文物の来歴が比較的はっきりとした文脈はなく、研究や展示、普及の上で大きな課題となっている。このような課題を克服するために、史前館は2017年から2020年に「文化部科学技術プロジェクト」、「台湾行巻」、「国家文化記憶庫」などのプロジェクト経費と機会に、文物の収集元のエスニックグループと協力し、文物の文化的文脈を改めて探求し、複製するプロセスを通して文物の背後にある知識を復刻し、文物を再現している。そして、文物を複製する目的は、単に文物を制作するだけでなく、そのプロセスでどのように先住民各族と協力をするかを重視しており、先住民族の視点で分析、解読を進め、科学的方法で技法を分析し、複製を進め、長老たちと協力し、モノの中から元々あった生活制度や文化的文脈、規範などを掘り起こし、民族言語の学習と調査に合わせて、現代の先住民族による文化の解釈を進めている。（張至善、余明旂2021：2）

史前館は2017年に「台湾行巻」プロジェクトとして、館の所蔵品の科学的分析と技法のサンプリング分析に基づき、最初の試みとして60点が完了した、その中はブヌン族の織物20点、プユマ族、パイワン族、アミ族、ブヌン族の編んだ器40点だった。2018年にはプロジェクト名が「インフラ建設に向けて―デジタル建設―国家文化記憶庫とデジタル付加価値応用プロジェクト」に変更され、出来事と地理の位置が強調され、成果はパイワン族の服飾40点、ブヌン族の服飾17点、プユマ族の文物とプユマ王伝説48点、カヴァラン族の伝統肩掛け１点、烏来集落の伝統的織物１点、肩掛け１点、その他に器が８点（パイワン族の蜜蝋板４、タオ族２、カヴァラン族銅鑼バチ２）。また、当館が所蔵するHans Egli神父の手書ノートとフィールド調査の録音の内容説明のリスト化とデジタル化作業を行い、『プユマ族口伝史』の著作権を得た。2019年には「先住民の山林宝庫の探索―生活物品の中で現れる庶民の知識と歴史記憶」をテーマとするプロジェクトを実施し、今のところブヌン族の繊維工芸分析20点、月桃13点、館が所蔵するパイワン族の伝統織物20点、プユマ族服飾28点、サイシャット族伝統服飾４点だった。2020年には「館所蔵のブヌン族伝統鞣皮工芸科学分析」というプロジェクトが含まれ、科学分析20点、複製５点、史前館の台湾先住民収蔵品の伝統工芸科学分析20点、複製５点（タロコ族）、「館所蔵のサイシャット族伝統織物工芸科学分析」による館所蔵科学分析20点、複製５点。（付録１を参照）[4]

当館の展示教育課と台東のカタ（卡塔）文化工作室と協力して2018年に共同でパイワン族の織物服飾伝統工芸科学分析を例とすると、文物標本20点の基本分析作業を行い、その中の５点が重要技法のサンプリング資料として複製が行われた。カタ文化工作室の責任者はパイワン族の林秀慧女史（Kedrekedr Maljaljaves）で、その出版物である『集落の書写体：針路』の中に出てくる分析した物品というのは史前館が所蔵するものである。2010年にはカタ文化工作室が台東の先住民族と一緒に「子供のために一つの衣装を作ろう：刺繍工芸学堂」プロジェクトを立ち上げた。主には伝統服飾の工芸技術の刺繍の縫い方の伝授と教育活動だった。このプロジェクトは自分の伝統的服飾から家族の文様や文化的意味合いを理解し、伝統服飾の作り直しを学ぶもので、集中学習と家に残された文物を遡り、その特殊性を理解するもので、子供たちに自分の伝統文化の美学を強化させ、エスニックグループとしての責任感を体感してもらうものである。さらに社会の変化に伴って、外来の文化の影響により、文化的記憶が断絶し、民族言語の能力が弱体化し、もともと織物に備わっていた文化的意味合いや、知識体系、ロジックや思惟などが消失したり、断片的なものになっていることから、このような織物の複製と通して、消えてしまった元々あった民族の信仰と文化的記憶を少しずつ探求しもらうことを希望していた。この工作室は初期の頃は家に保存されていた伝統的服装を着ることが初歩的な学習参考の対象であったが、後には、参加者の氏族の家に伝わる文様や特有の技法を保存したいという要望

[4] この資料は当館の展示教育課の張至善副研究員の提供。

を考慮して、もともとは博物館の所蔵品を学習と分析をしていたが、民族文物の製作技術能力と伝統知識の応用の強化を目指すこととなった。史前館は張至善と余明旂の記録よって、スタッフのこの作業に対する熱意が高まり、文物が持っている意義を探求するようになった。

「プロジェクトの参加者は、自身が伝統的な織物を持っていたり触れることはとても少ない。そのため史前館が所蔵品に目を向けなくてはならない。最初に、参加者は史前館に各民族の文物を調査閲覧の申請をして、最も簡単な巻き尺、方眼紙、鉛筆で一つずつ刺繍の図案の寸法、刺繍糸の細さ、刺繍糸の進み方や方法などを記録し、参加者は各民族集団の服飾の資料を持って帰って、まず目の粗い布で針を進める練習をして、刺繍の方法を熟知してから、正式に布で手作りの衣装に針を通していく。参加している人々が収集した資料の専門的な背景が消えていき、先住民族の刺繍の脈絡と工程が詳しく整理され、『針路』の一冊の中に記録される」（張至善、余明旂2021：5-6）

博物館は先住民と協力して、博物館を通して館の所蔵技術と豊富な参考資料を完成させ、現代の科学的分析方法の提供に協力し、先住民族が再び自分たちが属する文物の技術を回復し、このような文物の帰属意識と栄光を生み出すことで､博物館も先住民が文物の解釈に主体性を持つことに協力でき、博物館にとっては、現代の社会的責任を十分果たせることになる。同時に、このような技術と知識が社会の変化に応じて未来の発展可能性を維持させるのである。

（二）共同展示

史前館の展示教育課副研究員の張至善は史前館の特別展の内容を振り返り、分析を行った。2001年から2020年４月まで[5]史前館の康楽本館[6]では合計125回の特別展があり、その中で民族学の数が最も多く、しかも民族学モデルの特別展の中で先住民に関するもの（世界のオーストロネシア、台湾先住民及び世界のそのほかの先住民を含む）が71回あった。その中で台湾先住民族に属する特別展が最も多く58回あり、史前館の近年の特別展の総数の二分の一近くに上る。（付録２を参照）台湾先住民の特別展の中で、その企画形態はおおむね４つに分けられる。（1）史前館が主体となって企画された特別展、（2）国内外の関連する博物館と協力した企画展、（3）一つの民族をテーマにした企画展、（4）一つの集落をテーマにした特別展。（張至善2022）

上述の企画のタイプの中で「収集元の民族集団の文化解釈権」の概念に最も相応しい企画方法は、短膣の集落をテーマにした特別展である。このタイプの特別展は集落の人物や活動をテーマにして、展示の準備の際に博物館側は十分に集落とコミュニケーションと協力を行い、フィールドワークによる現地物語の採集を含め、集落の人々と共同で展示テーマを練りあい、集落の精神に溶け込んで、物品を提供して展示について展示の配置作業や開催する企画などを含む。このような協力プロセスにおいて、集落が自身の文化的議題の観点と能力を養うことに重点をおいている。さらに集落の先住民が伝統文化事業を運営することを促進し、博物館と地方の関係をスムーズにする。

史前館による2008年に二つの「共同企画展」の事例にすると、「Taupas 日本軍―ブヌンの南洋軍属の回顧録」特別展[7]と「忘れられた組み合わせ-悲壮の七脚川cikasuwanの戦い」[8]である。この二つの

---

5 史前館準備処は1990年２月１日に成立し、2001年７月10日に試運営され、2002年８月17日に正式に開館した。台湾先住民族の社会変化に応じて2020年６月に休刊し建物と常設展のリニューアル工事が行われた。

6 史前館は全部で三つの館があり、台東の康楽駅隣の康楽本館、台東駅隣の卑南遺跡公園と台南にある南科園区の南科考古館である。この統計は康楽本館で開催された特別展のものである。

7 Taupas は日本統治時期に南洋へ徴用されたブヌン族の軍属である。

8 cikasuwan はアミ族の集落で花蓮県に位置する。日本統治期に日本政府と戦い、戦後元の居住地から移住させられた。

特別展の名前には「回顧録」や「忘れられた組み合わせ」があり、集落の住民が植民された記憶を思い起こし行動を起こすもので、特に創傷や離散である。このような接触の歴史は心を痛ませ、血や涙が流れる暗い経験が、企画展のプロセスの中で補足された。このタイプの展示は当館が協力企画展をするモデルの中で博物館の解釈権を収集元である民族集団に返還することを促進する一種の方法である。（盧梅芬2015）

四、先住民族知識の構築の初歩的探究

パイワン族の力里社やこれまで史前館が協力した先住民族の各集落は、近年積極的に文化復興運動（cultural revitalization）を進めている。具体的な作業としては旧社跡の調査、口頭伝承の採録、伝統文物の復元、自文化の内容の解釈などを含み、このような行動は実は一種の先住民族知識の確立を求めるものである。そして「先住民族知識」という言葉は、きちんとして標準的な定義はまだない。国連の先住民族権利宣言の31条1項には「先住民族は、人的・遺伝的資源、種子、薬、動物相・植物相の特性についての知識、口承伝統、文学、意匠、スポーツおよび伝統的競技、ならびに視覚芸術および舞台芸術を含む、自らの文化遺産および伝統的文化表現ならびに科学、技術、および文化的表現を保持し、管理し、保護し、発展させる権利を有する。先住民族はまた、このような文化遺産、伝統的知識、伝統的文化表現に関する自らの知的財産を保持し、管理し、保護し、発展させる権利を有する」と書かれている。先住民族知識はおおよそ「文化遺産」、「伝統知識」、「伝統文化の表現方法」、「科学技術と文化の表現方法」などを含んでいる。（陳張培倫2009：28-29）筆者はこのような内容には、時間性と空間性の性質を含んでいると考える。いわゆる時間性とは、先住民族知識が過去とつながり、現在実践され未来につながっていくことを指す。そして、空間性とは生活空間の認識、分類と、それに基づいて生み出されたロジックと思惟のことである。この他、台湾先住民族知識の形成から見れば、各先住民族知識が集合体を形成し、その中にアミ族知識、タイヤル族知識、パイワン族知識などが含まれることになる。そして各先住民知識は、その民族内部の各集落知識を共同して形成される。たとえば、パイワン族の知識は力里社、来義社、牡丹社などが集合して形成させるということである。

先住民族知識と相対するのは非先住民族知識であろう。いわゆる非先住民族知識は、一般的に主流社会の知識と呼ばれる。西洋の現代知識と呼ばれることもある。この二種類の知識は関係ないだろうか？もちろん否である。この二種類の人間集団が相互に接触する時、双方の知識体系について、交流することとなる。図10を例とすれば、先住民族知識体系と非先住民族知識体系は交流する中でabcdの四つの領域が形成される。ａの領域は非先住民族知識の中の確認が先住民族知識の内容にまだ接触していない、ｄのエリアはその反対で純粋な先住民族知識が中心の領域である。ｂとｃの二つの領域は、二種類の知識体系が交流しているが、両者は差異を有しており、ｂの領域の内容は非先住民族知識が比較的に大きく、先住民族知識が比較的に小さい、ｃの領域はその反対の状態を示している。

この他、Cunninghamは学術領域がニュージーランドのマオリを研究する状態を、４つに分類し、「マオリ人に接触しない」、「マオリ人に接触」、「マオリ人中心」、「マオリ人のアプローチ」がある。このような分析は図10と比べてより詳しく説明すると、ａはマオリ人に接触しない、ｂはマオリ人に接触、ｃは研究対象がマオリ人中心、dは完全にマオリ人を研究対象としている。そして研究の表を縦に見ると、「掌握（主体性）」「マオリの参加」、「方法」、「分析（結果）」に分けられる。「掌握」の程度ではabcの主体は主流社会にあり、わずかにｄだけがマオリ人である。マオリの参加については、ｄがほとんどマオリ人である。方法についてはｃとｄが混在している状態で研究については、極力マオリの研究方法と思惟が追求されるが、やはり現代的研究の趨勢からは脱し得ない。そのため、マオリ人のアプローチに属しているが、混在するタイプとなる。最後に分析結果についてはｃとｄはマオリの状態であり、双方の差異はその割合である。

表1　ニュージーランドマオリの研究（知識）の分類

対象 研究方向	マオリに接触しない（a）	マオリに接触する（b）	マオリ人中心（c）	マオリ人のアプローチ（d）
掌握（主体性）	主流社会	主流社会	主流社会	マオリ
マオリの参加	なし	いくらか	主要	ほぼすべて
方法	主流社会	主流社会	混合	混合
分析（結果）	主流社会	主流社会	マオリ	マオリ

（Cunningham原著，施正鋒2013：3から転用）

先住民族知識と非先住民族知識の二種類の体系が併存する時、無意識に比較が生み出される。比較として西洋知識には「現代」「科学」「継続可能」が含まれ、先住民族知識は往々にして「伝統」、「非科学」、「継続しない」などのステレオタイプが生み出される。この結果として先住民族知識の研究と解釈は、先住民族に主体性があるかないかということになる。表１を見ると、早期の先住民族知識の研究においては、すべてｂのタイプで進められ、先住民族と接触したとはいえ、先住民族知識は主流知識を補充するものと見なされ、記録されるかどうかというものにすぎなかった。現代の趨勢はｃのタイプに向かっており、先住民族知識の重要性を強化している。先住民族の立場としてはｄのタイプは最終的な目標であるが、一種の理想の状態であり、実現が可能かどうか大きな課題がある。

人々によって博物館が一種の植民地時代に生み出された産物であると見なされ、近代発展のプロセスの中で、博物館は常に対話と反省の行動をしている。収集元の民族集団に文化的解釈権を戻そうと試みられており、文物の返還や収蔵品の取り消しなどを行い、植民地主義の象徴であるというレッテルを取り除こうと努力している。そして収集元の民族集団と和解して、現代の博物館は少しずつ新しい使命と道を切り拓こうとしている。2022年にプラハでICOMが一堂に会し、プラハ博物館大会の中で、博物館の定義が以下のように解釈された。「博物館は、社会に奉仕する非営利の常設機関であり、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈し展示する。一般に公開された、誰もが利用できる包摂的な博物館は、多様性と持続可能性を促進する。倫理的かつ専門性をもって、集落の参加とともにミュージアムは機能し、コミュニケーションを図り、教育、楽しみ、考察と知識の共有のための様々な体験を提供する。」史前館の近年の先住民族の研究出版物や展示、文物の再利用、積極的な先住民族との連携は新しい博物館の定義に符合する。同時に表１のｃの状態の研究モデルから、先住民族と協力してｄの状態へ向かう努力をしている。

五、結論

パイワン族の力里社は自身の文化を重視し、旧社を調査し、習俗祭儀を記録し、文献資料を探し、自分の集落誌を執筆した。このような文化復興作業は、一種の昔を懐かしむ作業ではなく、一つの力里社の先住民族知識を構築し、この知識体系は単に「古いもの」と「伝統」をつなぎ合わせるのではなく「現代」と「創造」に適応するものである。そして「未来」と「持続可能性」に向かって邁進している。鳥居龍蔵の手書ノート解読については、この種の体系を完成させる作業の１つである。先住民族知識は再び主流知識の付属物とされるべきではなく、もう一つの別の「主流知識」なのである。

史前館は先住民族の集落の近くに位置しており、収蔵する文物はほとんど先住民族文化に関するものであり、これは史前館が先住民族知識の構築において有利だということであるが、逆に負うべき責任であると見ることができる。史前館は収蔵する文物の開放、研究態度の開放、先住民族知識の構築に協力するプラットホームになることを目指しており、先住民族と協働して鳥居龍蔵の手書ノートを解読することは重要な作業である。そして、このプロセスにおいて、現地の集落の人々に大きな共鳴を引き起こし、興味を持ってもらうことができる。集落の人々は引き続き手書ノートの解読作業に参

加したいと強く願っている。このような作業は絶え間なく続けられ、史前館も将来もこのような役割を果たし、他の先住民族の集落との相互連携を進めていきたい。

図キャプション

図１　手書ノートの中の力里社の環境と戸数についての記録（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館提供）
図２　手書ノートの中の男性の身体上の入れ墨の絵（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館提供）
図３　手書ノートの中の女性の手の入れ墨の絵（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館提供）
図４　鳥居龍蔵撮影の力里社の頭目（順益博物館1994：96）
図５　手の入れ墨の解読、赤文字が現地の人々に確認したところ（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館提供）
図６　表音で確認できた部分。「？」は確認できなかったという意味である。（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館提供）
図７　キセルについての説明。赤文字が確認された情報（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館提供）
図８　弓の持ち方の解読の確認（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館提供）
図９　先住民族知識の構成
図10　知識関連図（施正鋒2013：3）

参考文献

文化部網站『文化部再造歷史現場專案計劃資訊輔導平台』（2023.1.19）取自
https://rhs.boch.gov.tw/index.php?inter=project&id=3&did=59。
行政院網站『長照2.0－原住民族文化健康站推動情形』（2023.1.19）取自
https://www.cip.gov.tw/zh-tw/news/data-list/865E99765D714714/0C3331F0EBD318C2600DB1785159A3BE-info.html。
宋文薰等撰稿『跨越世紀的影像：鳥居龍藏眼中的台灣現原住民』（順益台灣原住民博物館1995）
施正鋒「原住民族知識生產與研究倫理」『台灣原住民族研究學報』3（3）：1-31（台灣原住民教授學會2013）
原住民族委員會網站『聯合國原住民族權利宣言』（2023.1.19）取自
https://www.ey.gov.tw/Page/448DE008087A1971/7a34f5fa-1ad7-4a4b-96a8-7b69aba5bced。
翁玉華、徐美賢總編輯『春日鄉力里Ralekerek部落誌』（屏東縣春日鄉力里村力里社區發展協會 2004年）
許木柱等編纂『重修臺灣省通志-卷三住民志同胄篇』（臺灣省文獻委員會1995）
陳張培倫「關於原住民族知識研究的一些反思」『台灣原住民研究論叢』5：25-53（台灣原住民教授學會2009）
張至善「轉身之前：回顧2001-2020史前館的原住民族特展」『博物館學季刊』36（2）：73-97（國立自然科學博物館2022）
張至善、余明旂「博物館與排灣族物質文化研究：以史前館近年工作為例」『2021排灣學研討會－排灣族知識體系的探究』研討會（國立屏東大學辦理2021.10.30-31）
葉神保「日治時期排灣族「南蕃事件」之研究」（政治大學民族學系博士論文 未出版 2014年）
盧梅芬「從展示文本邁向我群與他者的溝通：原住民文化再現的策展脈絡與反思」『博物館學季刊』29（3）：5-36（國立自然科學博物館 2015）

容顏之外：鳥居龍藏排灣族照片中的環境、物種與當代風貌變遷初探

張　至善

摘要

本研究以鳥居龍藏博士來臺拍攝的照片為題材，特別是高知工科大學，綜合研究所，博物資源工學中心「鳥居龍藏資料保存推進協議會」所整理發布的資料，以其中排灣族（165張）為初探對象，專注於照片中的環境、（非人）物種與文化面貌的探查，由於鳥居博士拍攝時有很大的部分是人種體質用的紀錄，本研究以環境、生態、生物物種為著眼點，將人排除，並探討這樣的解讀可以延伸的討論和未來可能的運用。本次研究發現照片中植物的辨識在應用上意義較不明顯，需要搭配使用情境或周遭地景環境的解讀，才能突顯鑑識的意義和運用價值。在老照片與地理結合的相關應用上，「線性文化遺產」是另一條可拓展的議題。在具後續研究潛力的主題上，聚落地景或開墾地景是可期待的研究主題，將老照片資料範圍擴大涵括日治時期其他資料，可進行跨領域的研究運用、剖析。日治時期所遺留的照片資料，富含各種面向的資訊，值得我們以不同的視角來檢視、解讀，發掘新的研究潛能，解答過去並邁向未來。

關鍵字：鳥居龍藏、排灣族、照片、環境、物種

壹、前言

鳥居龍藏博士是日本對於海外學術調查的先驅者，調查地點包括臺灣、中國大陸西南（苗）、中國東北部（滿州）、朝鮮半島、蒙古以及千島等地區（土田滋等1990）。

臺灣是鳥居龍藏博士初期的海外調查，調查的期間有23個月（近 2 年停留在臺灣）。在臺灣第一次利用相機進行調查，鳥居龍藏博士返回日本後也必定將調查成果彙整。鳥居龍藏博士的臺灣調查有 4 次。地名以及蕃社名稱的比對有許多的困難點。這裡引述的資料是由土田滋、姬野翠、末成道男以及笠原政治等先進所整理的，此外上述作者群也提出了「對於臺灣相關的照片考證是得到了瀨川孝吉先生的協助」這樣的說法（土田滋等1990）。

分析的照片計165張（附錄一），以鳥居龍藏博士第 3 次和第 4 次臺灣調查所造訪的地域為主（楊南郡1996：272，302，楊南郡2000：257）。部落包括內社（舊來義）、牡丹社、太麻里社、下蕃社、力里社、歸化門社、舊佳興社、文樂社（宋文薰等1994：83-97）。

貳、研析初探

以下就照片中可探究的主題進行初步研析，包括聚落地景、開墾地景、植物景觀、動物及服飾文化等，探討如下：

一、聚落地景

鳥居龍藏博士拍攝的照片中，有不少家屋群聚的部落（圖１－圖６），從這些照片看來有明顯的材料選擇差異，例如：來義社的建築材料是石板，聚落的山坡家戶相連，但可以看出周邊並沒有太多樹木，我們可以推測的是由於聚落龐大，並不畏懼敵人看見，另一種可能的解釋是由於耕作或柴薪燃料的需要，而導致植被被砍伐利用。

圖１．排灣族內社（來義舊部落）
編號141-7215，攝於1900/1/28。

圖２．排灣族內社（來義舊部落）
編號142-7226。

圖３．古樓社。編號144-7414。

圖４．力里社舊部落。編號159-70774。

圖５．Ko部落（板岩）。編號174-7455。

圖６．某部落。地點不詳。編號177-7534。

此外，家屋的形制、使用材料有很明顯的地域差異，也呈現獨特的特色，家屋的部分有另一位日籍學者千千岩助太郎（Chijiiwa Suketaro, 1897-1991）[1]有詳細的調查資料可交互參照。

[1] 參考資料 國立臺北科技大學 開放博物館 認識千千岩助太郎 https://openmuseum.tw/muse/exhibition/920a932f2e49107519b17c3549fb12f2#front（瀏覽日期 2023/01/28）

二、開墾地景

在編號193-7528的照片中（圖７），我們可以看見背景的山坡上有一片片被開墾的跡象，在水土保持的術語上稱做「平台階段」，也就是做成一階一階的平台，讓水土不至於直接沖刷而下，這樣的環境知識似乎也成為文化中的一部分。史前館2018-2019年與博物館典藏品的源出社群合作，調查織品中的文化知識，其中有調查到一種織紋的名稱，稱為*upu*石頭攔沙紋（圖８）；排灣族常居住及開墾於斜坡之上，故在其生活周遭常見纍石主要目的為防止泥土的流失與崩塌固於建置房子或耕地初時，首先會用砌石纍於四周，這個紋路的目的是示以子孫們凡事起步前都要像做好水土保持一樣重要，故依報導人說在學習織布的第一塊布通常都是織*upu*（砌石紋），為亦即指這樣的耕地開墾方式（張至善、余明旂2022）。

圖７．開墾地景，地點不詳。編號193-7528。

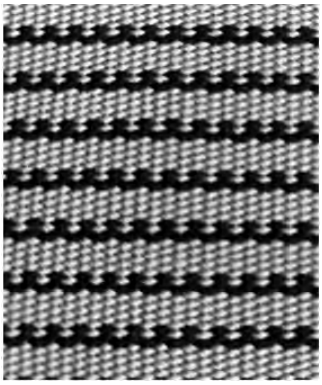


圖８．*upu*（排灣族砌石紋）余明旂攝。

三、植物

照片中最容易辨識的植物是檳榔，顯示檳榔（圖17）有久遠的使用歷史。此外，刺竹也是容易被辨識的植物（圖９、圖10），通常在家屋周遭，刺竹的植叢龐大又密布棘刺，成為一種防衛用的屏障。

圖９．刺竹（太麻里社）。編號147-7347。

圖10．刺竹，地點不詳。編號212-7521。

植物很常看到被用於頭飾，可惜解像力的關係很難辨識，很明顯的一張是頭目的頭飾使用的是虎尾蘭的花（圖11）。

另外可確認的植物有苧麻（捻線）（圖12）和月桃（圖13、圖14），有一個有趣的發現是月桃的利用，雖然是120幾年前的照片，對月桃莖梗的加工利用方式完全沒有變化。

圖11．頭飾為虎尾蘭的花（牡丹社頭目）
編號158-7001。

圖12．捻線（苧麻）地點不詳。
編號186-7557。

圖13．月桃 pokari社。編號161-7172。

圖14．月桃 punntexi社（佳興社）
編號173-7025。

照片中植物的辨識在這次的初探中，顯示在應用上意義較不明顯，還是要搭配使用情境或周遭地景環境的解讀才能突顯這樣鑑識的意義和運用價值。

四、動物

在這些照片中有水牛（圖15、圖16）、家豬（圖17）、雞（圖18）等部落中的動物出現。另外雲豹則是由服飾上可以辨識出來的（圖19、圖20）。筆者曾訪談來義部落的*Tjaluigi*家族頭目（*dremdreman tjaluigi*高美華女士），她很堅定的告訴筆者她的傳統領地境內有產雲豹，族人若打到會進貢給她（家族）。雲豹在近20年也有可能是進口的。有 2 個案例來說明，2004年，卑南族某長老因為想販售雲豹牙頭飾給博物館，我們邀請專家來鑑定和鑑價，結果發現雲豹牙應不屬於臺灣雲豹（由頭骨、牙齒的尺寸）而是屬於東南亞的亞種。另一個是筆者擔任購藏承辦人時曾有見到 4 張東南亞進口的雲豹皮，表示東南亞雲豹皮已有進入臺灣的情形。

圖15. 水牛（下蕃社）。編號154-7326。

圖16. 溪邊肢解水牛（牡丹社）。
編號155-7180。

圖17. 家豬和檳榔（地點不詳）。
編號181-7533。

圖18. 雞及穀倉（地點不詳）。
編號180-7719。

圖19. 雲豹皮衣（力里社）。
編號162-7454。

圖20. 雲豹皮衣（地點不詳）。
編號188-7725。

有關雲豹，2005年的一份林務局委託屏科大野生動物保育研究所為期 3 年的調查報告《大武山自然保留區和周邊地區雲豹及其他中大型哺乳動物之現況與保育研究》，顯示：「近400個自動相機樣點，13,354個自動相機工作天，共累積16,000張照片，加上持續架設補餌的232個毛髮氣味站，並沒有任何臺灣雲豹的記錄」（張至善2005）。2015年同一調查團隊在經過13年的追蹤及分析，未發現雲豹蹤跡，研判

雲豹已在臺灣滅絕，調查報告刊登在英國《Oryx》國際保育期刊（Chiang *et. al.* 2015），也就是說雲豹在臺灣的森林消失了！

五、服飾文化

附錄一中編號224-305都是單純背景的人像照，我們由穿著服裝和裝扮的飾品來看當代的文化變遷（圖21－23）：服飾的花紋部落在文化復振工作上已有能力重製，尋找古老的技法再現。另一個是佩掛的琉璃珠（圖24、圖25），史前館也與源出社群合作進行重製和進一步的研究。

圖21. 服飾上的織紋。
編號285-7717。

圖22. 服飾上的織紋。
編號291-7710。

圖23. 服飾上的織紋。
編號305-7696。

圖24. 配戴琉璃珠（pairusu社）。
編號169-7032。

圖25. 配戴琉璃珠（地點不詳）。
編號203-7196。

史前館近年的排灣族物質文化研究[2]（張至善、余明旂2021）

國立臺灣史前文化博物館（下稱史前館），是臺灣東部唯一的國家級博物館，也是臺灣重要的人類學博物館，史前文化和原住民族研究是其重要的特色。史前館之建館宗旨乃是希望藉由博物館的研究、典藏、展示、教育和遊憩功能，啟發大眾對於臺灣之自然生態、史前文化及原住民文化之豐富和多樣性有更多的認識，並促進大眾更珍惜、尊重這片土地綿延不斷的自然與文化生命。史前館籌備處在民國79年 2 月 1 日成立，於90年 7 月10日試營運，91年 8 月17日正式開館，為臺灣史前文化的保存與研究奠立持續發展的基礎[3]。

史前館蒐藏文物較晚開始，且多是經由文物商購得，文物來源無清晰的脈絡，導致後續的應用有極大的限制，館員們藉由2017-2020年間的「文化部科技計畫」、「臺灣行卷」、「國家文化記憶庫」等計畫經費和機會，進行與文物源出社群的合作，重新讓文物找回文化脈絡，並藉由重製的過程讓文物背後的知識復刻，也讓文物重現。

史前館近年的物質文化研究有以下的特色及影響：一、應用館藏，並與源出社群合作的方式進行。二、喚起對原住民文化資產的重視。三、再次點燃臺灣原住民織品、服飾文化復振風潮。四、重視族群中的差異如區域或家族。五、重視族語記錄與主體詮釋權。六、反思原住民物質文化在當代的意義。討論如下：

（一）應用館藏，並與源出社群合作的方式進行。

曾整理一系列「臺灣原住民族物質文化」委託研究的成果報告，我們發現全數為學者，相信必是當時一時之選，史前館的館藏研究並未以學者為委託對象，而是物件的源出社群，相信由族人進行詮釋和脈絡的重建，這是趨勢，也是社會實踐的一種方式。

（二）喚起對原住民文化資產的重視。

過去為「手工技藝」，在當今維護文化多樣性的呼聲下，這些手工技藝被視為原住民文化資產，史前館除了宣揚這樣的價值，也運用當今的科技力保存下來。

（三）參與臺灣原住民織品、服飾文化復振風潮。

於2017 辦理了原住民服飾重製的分享會 2 場次， 1 場以展演形式的記者發表會，引起廣大的回響，後續數場辦理的研討會，不論邀請講者、發表形式、內涵，英雄所見略同。而原視以「重製」為題製作「誰迷了路」節目，更獲金鐘獎的肯定，節目中重要的拍攝素材、受採訪者皆為史前館的合作對象（進行式），後續人間國寶的頒發，這些成果皆是原住民織品、服飾文化復振上的重要亮點，史前館這些年來的協助與支持，能參與臺灣原住民織品、服飾文化復振風潮，善盡博物館在新時代的社會責任，能與大家一起前進，與有榮焉！

（四）重視族群中的差異如區域或家族。

以琉璃珠的研究為例，家傳的琉璃珠為繼嗣重要資產，仍有許多琉璃珠依附著不同家族的歷史事件，各自詮釋的文化故事與角度也有所不同，我們在進行時，特別增添紀錄排灣族社會文化的多元視角，探索物件與人之間的關係。此外，計畫中族語繪本《Patjedjalan婚禮》以地方家族為核心，以實際案例訴說當代的婚禮樣貌，重視族群中的區域、家族差異。

（五）重視族語記錄與主體詮釋權。

以「織序」計畫為例，這次合作的角度進行記錄與保存織造技藝下所隱含的部落傳統文化與規範，

---

[2] 本段落引自張至善、余明旂 2021「博物館與排灣族物質文化研究：以史前館近年工作為例」發表於排灣學研討會（2021/10/30-31）。

[3] 史前館網頁資料 http://www.nmp.gov.tw

透過典藏物件上的工藝訊息追溯以往部落常用工藝教學時相關詞語的脈絡，重新尋回傳統教學與詮釋模式，含括：素材、製作技法、用色及專屬圖紋詮釋，這些對於後續推動部落的工藝學習回歸族群文化養成的過程中，使改善傳習技術的流失和解決的辦法，更提供了部落建構在地的文化詮釋的整理方法與教學資料和研究可行案例參考使用。

（六）反思原住民物質文化在當代的意義。

現在布匹、各項器物製造便利，在現代的社會為什麼還需要追尋排灣族相關物件的製作知識和技法呢？我們所追求的是「物質文化」，而由這些「物質文化」串起的文化認同、原住民知識、語言，文化意涵、信仰意義、階序意識，這些種種能引領排灣族文化認同者邁向未來。保存原住民物質文化文化，也就延續了未來發展的可能。

參、討論

以下就鳥居龍藏博士所拍攝排灣族照片中的環境、物種與當代風貌變遷進行討論：

一、老照片與地理結合的相關研究與應用

由於照片的拍攝是確切的行旅調查路程，因此路線所經過的地理位置成為這類資料可堪關注、應用的重點，亦即照片的地理位置有清晰的資料比對、探查可以和現今的地理位置進行對照而進一步討論變化。有一個案例是游永福所著的《尋找湯姆生：1871臺灣文化遺產大發現》（游永福2019）。1871年湯姆生跟著馬雅各由廈門出發搭船來到臺灣，4月2日從打狗（高雄）上岸，造訪臺南、木柵、甲仙、荖濃、六龜里、枋寮再到木柵，留下一張張涵蓋有人物、服飾、房舍、動物、植物、產業、生計、風景以及地景等樣貌的照片。游永福先生自2001年起仔細整理湯姆生現存60張南臺灣的照片，根據當年湯姆生的行腳，從打狗到木柵，希望藉由《尋找湯姆生》的書寫建構出一條「線性文化遺產的路徑」（游永福2019）。

以鳥居博士留存的資料為例，其中不乏類似屬性、特質的路線，以鳥居博士行旅而言「浸水營古道」、「紅頭嶼」就是可後續發展的路線，此外老照片記錄的舊部落位置（site）也成為當代原住民尋根、文化復振可參考的重要紀錄。

二、老照片資料範圍的擴大

本次的初探發現文字的敘述能夠獲取的資訊量最大，但照片有助於視覺的補充，另外一個，照片的資料若是看成時代的影像切片，那麼可以在同一時期的照片（例如日治時代）統合各項環境資訊，來探查出更聚焦，有意義的主題。例如蒐羅森丑之助、伊能嘉矩、瀨川吉孝等以及當時各地發行的繪葉書、寫真帖等，將能提煉更多的環境資訊。本次研究時間倉促，僅進行鳥居龍藏博士的排灣族照片解析，另外也可蒐羅其他時期的照片例如中研院任先民先生拍攝的舊古樓或舊來義部落照片（已捐贈史前館），結合現代部落樣貌來進行對照研析，探討當代文化、環境變遷的景況。

三、具後續研究潛力的主題

本次的初探發現部落、聚落照片是具有後續研究的主題。除了地理位置以外，可以延伸的研究題目多樣。例如地景地貌、建築材料、建築樣式、人口、選址、當代社群、舊社考古等。舉例而言：排灣族舊部落在比較下規模較大、人口較多，是什麼條件可以創造這樣的規模？與其他山區族群相比（例如泰雅族、布農族）部落規模大，居住期間也較長，不常遷徙移動，這和什麼自然條件相關？是氣候帶下的生產力差異？是海拔區位或森林植群樣態？還是和社會制度交互作用下的結果。部落的老照片也常伴隨周邊開墾的地貌，也是值得仔細探討的特徵，這些是具有後續研究潛力的主題。

肆、結語

本次以鳥居龍藏博士拍攝的排灣族老照片為主題進行環境、物種與當代風貌變遷的初步探索，研究期間發現照片中植物的辨識在應用上意義較不明顯，需要搭配使用情境或周遭地景環境的解讀，才能突顯鑑識的意義和運用價值。在老照片與地理結合的相關應用上,「線性文化遺產」是另一條可拓展的議題，可經由在地社群的參與發展出文化觀光、重返舊社（祖居地）、踏上先人足跡等活動，形成過去文史資料輔助當代發展的示範，例如「浸水營古道」、「力里舊社」等。

此外，在具後續研究潛力的主題上，聚落地景或開墾地景是可期待的研究主題，將老照片資料範圍擴大含括日治時期其他資料，例如蒐羅森丑之助、伊能嘉矩、瀨川吉孝等以及當時各地發行的繪葉書、寫真帖等影像資料，加上各類手稿、文獻、出版刊物等，結合在地社群的訪談、合作，可進行跨領域的剖析，包括部落選址、人口生態承載量的環境（考古）研究。日治時期所遺留的照片資料，富含各種面向的資訊，值得我們開發出不同的視角來檢視、解讀，期待發掘出新的研究潛能，解答過去並引領未來！

伍、致謝

本文撰寫期間承蒙「鳥居龍藏臺灣調查顯影計畫」計畫主持人王長華館長、南科考古館田詩涵主任、研究人員陳俊男、林慧仙、曾于宣以及臺中教育大學鄭安晞教授協助；計畫小組成員協助討論，提供實際踏查經驗；鄭安晞教授提供眾多舊照片資料及豐富古道調查經驗，並交流未來舊社研究可行性，極具啟發性。謹此致謝！

陸、參考文獻

Chiang, P., Pei, K., Vaughan, M., Li, C., Chen, M., Liu, J., . . . Lai, Y. (2015). *Is the clouded leopard Neofelis nebulosa extinct in Taiwan, and could it be reintroduced? An assessment of prey and habitat.* Oryx, 49(2), 261-269. doi:10.1017/S003060531300063X

土田滋・姫野翠・末成道男・笠原政治『東京大学総合研究資料館標本資料報告第18号』（東京大学総合研究資料館 1990年）

宋文薰等『跨越世紀的影像：鳥居龍藏眼中的台灣原住民』（順益台灣原住民博物館　1994年）

游永福『尋找湯姆生：1871臺灣文化遺產大發現』（遠足文化事業出版有限公司　2019年）

張至善「雲豹的蹤跡」史前館電子報第63期。2005.07.15。（2005年）

張至善、余明旂「博物館與排灣族物質文化研究：以史前館近年工作為例」。發表於排灣學研討會（2021/10/30-31）。（2021年）

張至善、余明旂「排灣族平織技藝民族誌：以平和（*piyuma*）部落及古樓（*kuljaljau*）部落為中心」『民俗曲藝』：217：105-159（2022年）

楊南郡（譯註）『探險台灣：鳥居龍藏的台灣人類學之旅』鳥居龍藏原著（遠流出版社　1996年）

楊南郡（譯註）『生蕃行腳：森丑之助的台灣探險』森丑之助原著（遠流出版社　2000年）

網路資料

「鳥居龍藏與他的世界」http://www.muse.or.jp/torii/zh/（瀏覽日期2023/01/27）

附錄一 鳥居龍藏博士拍攝之臺灣排灣族照片目錄列表[4]

引用來源：鳥居龍蔵　写真目録 轉載自「東京大学総合研究資料館標本資料報告　第18号、1990」，補充 說 明。http://torii.akazawa-project.jp/...=IwAR2mVAo4YEJJCEJeSf-4N4nLXx5T_FIbYt98Ox6FRYY2BTW7ecVqP6X3r3o#paiwan［2022/12/22瀏覽］

排灣族（Paiwan）

編號	整理番號	写真番号	說 明
1	141	7215	內社的風景。板岩的屋頂跟用石塊堆積的部分令人印象深刻。
2	142	7226	內社的風景。
3	143	7436	內社的板岩製的家屋。
4	144	7414	kunanau社的風景。
5	145	7227	kunanau社的家。
6	146	7338	太麻里社的前酋長的家，現在變成了廟。立著雕有人面以及百步蛇的大石。
7	147	7347	太麻里社的 3 個年輕人。
8	148	7244	pakarukaru蕃的男子。
9	149	7456	正在搗小米的排灣族女人們（putunnrokku社）。
10	150	7190	兩個坐面對面的男人（putunnrokku社）。
11	151	7181	這在聊天的女人們。（下蕃社，家新路社）
12	152	7415	牡丹社的家屋。可以看到飼料桶。
13	153	7174	排灣族，牡丹社的女人們。
14	154	7326	下蕃社的男人正在拉弓。Mo-rusu的第二射法。
15	155	7180	正在解體水牛的男人們（牡丹社）。
16	156	7120	marippa社上蕃的年輕男人。
17	157	7001	牡丹社的頭目chejui。將辮髮卷在頭上，帶著大的耳飾。
18	158	7324	牡丹社的頭目chejui。
19	159	7077	rikiriki社（勞寮蕪的山上的部落全景）。
20	160	7465	rikiriki社的頭骨架。
21	161	7172	pokari社的頭目的妻子。左方的竹筒是裝水用的。板岩的屋簷下有雕刻。
22	162	7454	穿著雲豹的皮所做的頭目的禮服的男人，與將他圍繞的人們。前方可看到連杯（rikiriki社）。
23	163	7457	帶著草花頭飾的年輕人們（pokari社）。
24	164	7035	pokari社的頭骨架。
25	165	7034	pokari社的人們。中央的男人拿著的盾看起來是獨特的模樣。
26	166	7327	萱屋頂的家屋與三個男人（女的社）。
27	167	7467	帰化門社的家屋。
28	168	7075	帰化門社的人們。也有穿著漢式服飾的排灣族人。
29	169	7032	pairusu社的小孩們。
30	170	7122	punntexi-社的人們。裡面有沒穿衣服的小孩。
31	171	7115	punntexi-社的 2 個男人與鳥居龍藏。
32	172	7463	排灣族的矮人與鳥居龍藏（punntexi-社）。
33	173	7025	punntexi-社的男人與小孩們。頭上搬運著東西的風景。
34	174	7455	板岩的家屋聚集的部落（ko-部落）。
35	175	7117	在阿塱壹溪的溪底煮飯的人們與鳥居龍藏。
36	176	7086	在阿塱壹溪的鳥居龍藏與原住民。
37	177	7534	排灣族的村子。
38	178	7542	急傾斜地上所蓋的村落風景。
39	179	7225	排灣族的家。萱葺屋頂與板岩的屋頂是種對比的。
40	180	7719	高床式的穀倉有預防老鼠攀爬的部分可在照片中看出。

[4] 「鳥居龍藏與他的世界」http://www.muse.or.jp/torii/zh/（瀏覽日期 2023/01/27）

41	181	7533	正在忙著家事的女人們。屋簷吊掛著的是動物的顎骨。正在忙著家事的女人們。屋簷吊掛著的是動物的顎骨。
42	182	7531	板岩屋頂的民家。
43	183	7532	抽著煙館的男人。
44	184	7413	男人們。
45	185	7556	使用臼與杵在脫殼的女人。
46	186	7557	正在製線的女人。
47	187	7721	有著人面雕刻的板岩屋頂住居。
48	188	7725	獸牙的頭飾與豹皮的衣服。由百步蛇的雕刻可看出來應該是頭目夫妻。
49	189	7540	在有臼與杵的家前站著穿著正裝的男人。
50	190	7541	石屋與石頭的平台。
51	191	7756	在溪上方所搭建的便橋與男人們。
52	192	7558	在溪流中水浴的男人們。
53	193	7528	在溪流中水浴的男人們。
54	194	7529	全裸正在水浴的男人們。
55	195	7536	盛裝的壯丁們。
56	196	7555	男人們的紀念照。前方的人的蹲法很獨特。
57	197	7753	與大人們穿著相同的衣裝的小孩們與青年。
58	198	7752	穿著正裝的男人們。將腰部綁緊是他們特殊的穿著方式。
59	199	7750	穿著正裝的女人們。
60	200	7751	穿著正裝的女人們。
61	201	7722	頭上搬運著東西的女人。帶著獸牙頭飾的男人。
62	202	7755	２個男人。
63	203	7196	手上拿個筆記本以及鉛筆的年輕人。大片的芋頭葉令人印象深刻。
64	204	7539	在頭骨架前拉弓的少年。
65	205	7461	將砍下的頭骨吊掛起後站在那之前的男人與粘板岩所製成的頭骨架（pokari社）。
66	206	7720	高床式穀倉。
67	207	7320	看起來很開心地笑著的人們。
68	208	7522	平地風格的草牆壁前站著女人與小孩。
69	209	7523	年輕夫妻與小孩。頭上有行李。
70	210	7520	排灣族的男女。
71	211	7519	板岩的家。
72	212	7521	村中有日本人的家屋。
73	213	7526	正在組裝駕籠的男人。
74	214	7524	日本家屋的裡面正在準備做駕籠的男人們。
75	215	7525	正在製作２根長竹與讓人可以坐著的座位的男人們。
76	216	7527	做好的駕籠與在山路休息的男人們。
77	217	7695	排灣族（?）扛著日本人學生。
78	218	7754	在山路中休息的男人們。
79	219	7535	３個木雕的人形。
80	220	7499	背面有人面像的椅子。
81	221	7500	拿著槍的木頭像。
82	222	7501	帶著蕃刀的人與百步蛇，連杯，壺的設計是排灣族的雕刻。
83	223	7502	排灣族的耳飾。
84	224	7503	排灣族的耳飾。
85	225	7727	肖像。鹿皮の上衣、猪牙の頭飾り。
86	226	7726	肖像。
87	227	7728	肖像。キセルをえりにさす。
88	228	7761	肖像。
89	229	7757	穿著洋風襯衫的男人。

90	230	7729	肖像。
91	231	7730	肖像。
92	232	7758	穿著漢族風格上衣的男人。
93	233	7759	穿著洋風上衣的男人。
94	234	7760	頭戴著葉子的頭飾，背後插著煙管的男人。
95	235	7762	穿著洋風上衣，背後插著煙管的男人。
96	236	7763	男人。
97	237	7764	剔五分頭的男人。
98	238	7765	排灣族的男人。
99	239	7766	穿著漢族風格上衣的男人。
100	240	7767	背後插著煙管的男人。
101	241	7768	背著肩背包的男人。
102	242	7769	背著有模樣的肩背包的男人。
103	243	7770	排灣族的男人。
104	244	7772	穿著警察衣服的男人。
105	245	7773	穿著判任官的服裝的男人。
106	246	7739	年輕人。紐扣的繩結很美。
107	247	7731	帶著利用葉子所制作的帽子的男人。
108	248	7732	頭髮剪的整齊的男人。
109	249	7733	從肩膀垂下布的男人。
110	250	7734	披著花樣的披肩的男人。
111	251	7735	排灣族的男人。
112	252	7736	帶著很華麗的藥草頭飾的男人。
113	253	7737	有著大門牙的男人。
114	254	7738	穿著排灣族特有的腰部綁緊服飾的男人。
115	255	7740	排灣族的男人。
116	256	7741	臉上有傷的男人。
117	257	7742	穿著袖子有刺繡的上衣的男人。
118	258	7743	穿著有扣子裝飾衣服的男人。
119	259	7744	帶著果實與花裝飾的頭飾的男人。
120	260	7745	帶著果實的頭飾，展露大門牙的男人。
121	261	7746	穿著腰部綁緊服飾的男人。
122	262	7747	排灣族的男人。
123	263	7748	帶著葉子裝飾的頭飾的男人。
124	264	7749	帶著四連串項鏈的男人。
125	265	7718	肖像。
126	266	7552	帶著銀飾的男人。
127	267	7553	從肩膀垂下布的男人。
128	268	7554	從肩膀垂下布的男人。
129	269	7543	有可以證明是頭目的刺青的男人。
130	270	7544	有可以證明是頭目的刺青的男人。帶著牙製的頭飾。
131	271	7545	帶著皮毛帽子的男人。
132	272	7546	穿著毛皮上衣並帶著銀飾的男人。
133	273	7547	從肩膀垂下白布的男人。
134	274	7548	穿著洋服的男人。
135	275	7549	肩從肩膀垂下布的男人。
136	276	7550	穿著雲豹毛皮的男人。
137	277	7551	穿著有刺繡的上衣帶著銀飾的男人。
138	278	7506	穿著鹿皮上衣的男人。
139	279	7507	帶著頭飾與肩膀裝飾著太白貝的男人。

140	280	7508	帶著髮帶的男人。
141	281	7509	帶著髮帶的男人。
142	282	7510	穿著鹿皮上衣的男人。
143	283	7511	從肩膀垂下布的男人。
144	284	7712	肖像。
145	285	7717	肖像。
146	286	7716	肖像。
147	287	7715	肖像。
148	288	7714	肖像。
149	289	7713	肖像。
150	290	7711	肖像。
151	291	7710	肖像。
152	292	7709	肖像。
153	293	7708	肖像。
154	294	7707	肖像。
155	295	7706	肖像。
156	296	7705	肖像。
157	297	7704	肖像。
158	298	7703	肖像。
159	299	7702	肖像。
160	300	7701	肖像。
161	301	7700	肖像。
162	302	7699	肖像。
163	303	7698	肖像。
164	304	7697	肖像。
165	305	7696	排灣族或是魯凱族的肖像。

容貌以外の着眼点　―鳥居龍蔵が撮影した パイワン族の写真の中の環境、種族と当時の様子 とその変遷についての初歩探求―

張　至善
翻訳：永本智富

摘要

本研究は、主に鳥居龍蔵博士が渡台時に撮影した写真を題材にしたものである。特に高知工科大学、総合研究所、博物資源工学を中心とした「鳥居龍蔵資料保存推進協議会」が整理して、リリースした資料の中のパイワン族（165枚）の初期探求を対象にしている。主に写真の中の環境（人物ではない）、種族、文化の外観を探査している。鳥居龍蔵博士が撮影した当時、写真の大部分は人種体質の記録としてのものであるが、本研究は、人物以外の環境、生態、生物種族を着眼点としている。このような分析は、今後の議論と未来への運用の可能性を探求することになる。今回の研究で発見した写真の中の植物の識別は、応用上の意義は目立たない。その時のシチュエーション状態と周囲の景観環境を照らし合わせて解明する必要がある。ハイライトで意義と価値を認識できる。古い写真と地理のつながりの関連性を応用する。また「線性文化遺産」は、もう一つ拡大できる議題である。後の追跡調査には、潜在的なテーマが潜んでいる。村落風景、或いは開拓風景は期待できる研究テーマである。古い写真は日本統治時代とその他の資料を含む、範囲を拡大し、領域を横切って研究運用し分析する。日本統治時代に取り残された写真のデータは、様々な点で情報が豊富であり、別の視点から解釈することによって、新たな研究を切りひらく可能性がある。過去から解答を探すことは、同時に未来へ向かっていくことになるだろう。

キーワード：鳥居龍蔵、パイワン族、写真、環境、種族

壹、前言

鳥居龍蔵博士は日本の海外学術調査の先駆者である。調査は台湾を含む、中国大陸西南（苗）、中国東北部（満州）、朝鮮半島、モンゴル及び千島等の地域である（土田滋等 1990）。

台湾は鳥居龍蔵博士が初期に海外調査した場所である。調査期間は23ケ月（約２年間は台湾に滞在）台湾で初めてカメラを使って調査を行った。鳥居龍蔵博士が日本に戻った後も必ず調査の成果を整理した。鳥居龍蔵博士の台湾調査は計４回である。しかし地名及び蕃社名が合っているかどうかにはたくさん難しいところがあった。ここで引用された資料は土田滋、姫野翠、未成道男及び笠原政治等、先進的に整理されたもの。その他、上記の作者たちも「台湾についての関連写真の考証は瀬川孝吉先生の協力を得ている」と説明しているとの言い方もある。（土田滋等 1990）

分析した写真は計165枚（付録一）、主に鳥居龍蔵博士が第３回と第４回台湾調査の時に訪れた地域である（楊南群1996：272，302，楊南群2000：257）。部落は、内社（旧来義）、牡丹社、太麻里社、下蕃社、力里社、帰化門社、旧佳興社、文楽社（宋文薫等1994：83-97）を含む。

貳、研究分析

以下の写真の中から探究で初歩のテーマをリサーチできる。集落景観、開拓風景、植物風景、動物及び服装文化等、探求及び議論などは次のようになる。

一、集落景観

鳥居龍蔵博士が撮影した写真のなかには、多数家屋群集部落（図１－図６）がある。これらの写真から見ると材料の選択には、明らかな差異がみられる。例えば、来義社の建物の材料は石板である。集落の山坂に家と家が繋いでいるが、周りはたくさんの樹木がない。私たちが推測できるのは、集落の規模が膨大で、敵にみられるのは恐れない。あるいは、もう一つ解釈できるのは、耕作あるいは、燃料のため薪が必要のため、植物が伐採されて利用されたのは要因であると考えられる。

また、家屋の形質について、使っている材料は明らかに地域差異があるし、独特な特色も出ている。家屋の部分はもう一人の日本籍学者千々岩助太郎（Chijiiwa Suketaro,1897-1991）[1]による詳しい調査資料があるので相互参照が可能である。

二、開拓景観

番号193-7528の写真（図７）のなかには、わたしたちは山の坂に一つ一つが開拓された痕跡を見ることができる。土壌保全の用語では、「平台段階」という。すなわち一段一段の平台を積み重ねて、土や水が直接に流れ落ちないようにするためである。このような環境知識は文化の中の一部になっている。2018-2019年は史前館と博物館典蔵品の源出社群と協力して、織物の中の文化知識で、調査の中には一種の織紋の名前が分かった。名前は*upu*石頭攔沙紋（図８）；パイワン族は常に斜面に住み開拓している。生活の周りに累石がみられる主な目的は、泥が流失するのを防止するためと家を建てるときの崩壊防止のため、或いは耕作初期はまず石塁を周囲に置く。この紋路は子孫たちに伝えたいのは万事起歩の時に水土保持と同じく大切なこと。専門のジャーナリストによると織物を最初の布を縫う時には、通常は織*upu*（砌石紋）からである。これは農地開拓方式を表している。（張至善、余明旅2022）

三、植物

写真の中で最もわかりやすい植物はビンロウである。（図17）は、ビンロウが長い間使われている歴史があることを示している。そのほか刺竹も容易に識別できる植物の一つである（図９、図10）、通常は家屋の周りに植えられている。刺竹の枝が大きく刺がびっしりあるため、防衛用の防壁になる。

植物は髪飾りにもよく使われていることが見られる。しかし残念ながら（写真の）解像度の関係で識別するのは難しい。写真の中の一枚には、頭に飾り付けているのはサンセベリアの花であることが明確にわかる（図11）。

その他、確認できる植物はカラムシ（ねじれた糸）（図12）とゲットウ（図13、図14）、ゲットウが使われているのはとても面白い発見である。120年前の写真であるが、ゲットウの幹の加工方法は今と変わっていない。

写真の中の植物の識別は今回の初期探求の中、応用上の意義は明確ではないのを示している。あるいは状況か周囲の景観を組み合わせして解釈してこのような識別の意義と運用価値できる。

---

[1] 参考資料 国立台北科技大学 オープン博物館 千々岩助太郎を知る https://openmuseum.tw/muse/exhibition/920a932f2e49107519b17c3549fb12f2#front（閲覧日 2023/01/28）

四、動物

写真の中には、水牛（図15、図16）、豚（図17）、鶏（図18）などの動物が村落の中にいた。その他、ウンピョウは着用している衣服で識別できる（図19、図20）。筆者は来義部落に訪問して談話したことがある*Tjaluuigi*家族頭目（*dremdreman tjaluigi*高美華さん）彼女は動揺なく筆者に彼女の伝統領地の境界内にウンピョウがいたと発言した。族人がもしウンピョウを捕まえたら彼女（家族）に貢ぐ。ウンピョウは20年近く輸入されていた可能性がある。二つの案例を挙げて説明すると、まず2004年には、プユマ族の某長老はウンピョウの歯の飾り物を博物館に販売したいとの依頼があって、私たちは専門家を招いて物の鑑定と価格の鑑定を行い、結果はウンピョウの歯は台湾のウンピョウ（頭の骨、歯のサイズ）ではなく、東南アジアの亜種であることが分かった。もうひとつ筆者は、蔵品の購入を担当している人から、かつて４枚東南アジアウンピョウの皮は東南アジアから輸入したことがあるとの話を聞いた。すなわち、ウンピョウ皮はすでに台湾に入っていることを表している。

ウンピョウについては、2005年に林務局が屏科大野生動物保育研究所に３年間委託した調査報告では、《大武山自然保留地区と周辺地区のウンピョウ及びその他の中大型哺乳動物の現況及び保育研究》示したのは、「400個近くの自動カメラの様點，13,354個自動カメラでの工作日，合計16,000枚の写真，エサ取り器での継続観察には232個毛髪の観察を加えて，台湾ウンピョウの記録を一切出で来なかった。」（張至善2005）。2015年同じ調査団体は13年間の追跡と分析にもウンピョウの軌跡を見つからなかった。これでウンピョウは台湾から絶滅したと判断できる。調査報告は、英國《Oryx》國際保育期刊（Chiang *et.al.*2015）に掲載されていた。すなわちウンピョウは台湾の森から消えたとも言える。

五、服装文化

付録一中番号2224-305全部単純な背景の肖像画で、私たちは着ている服装と身に付けているアクセサリーでその時の文化の移り変わりがわかる。（図21－23）：服装の紋様の文化修復の作業はすでに復刻する能力があって、古い技法を探して再現できる。もう一つはガラスビーズ飾り（図24、図25）、史前館も源出社群と協力して複製とさらなる研究を進めている。

史前館近年パイワン族物質文化の研究[2]（張至善、余明旅2021）

国立台湾史前文化博物館（以下「史前館」）は、台湾東部に唯一国家級の博物館であるとともに、台湾で重要な人類学博物館でもある。特色としては史前文化と原住民の研修。史前館の建館主旨は博物館の研究によって典蔵、展示、教育と遊楽が期待できる。たくさんの人々に、台湾の自然生態、史前文化及び原住民文化の豊かさと多様性について認識してほしいと考えている。さらに人々がこの土地に長年にわたって自然と文化生命を大切にしていくことを促進する。史前館は1990年２月１日に設立され、1991年７月10日から試運営し、1992年８月17日に正式に開館した。台湾の史前文化の保存と研究に持続な発展の基礎となった[3]。

史前館に文化財のコレクションが始まったのは遅い時期である。大部分は文化財商人から購入しているもの。文化財の出所には明確な文脈がないため、その後のアプリケーションで大きな制限に繋がっている。館員たちは 2017-2020年間「文化部科技計画」、「臺灣行卷」、「国家文化記憶庫」等の経費和機會を得て、文物源出社群と協力して、文化財の文化的背景を再発見し、再現する過程で文化財の背後にある知識を再び復刻し、再現できる。

史前館における近年の物質文化の研究は、以下の特性と影響がある。（一）館内の蔵品の応用と源

---

[2] この段落は張至善、余明旅 2021「博物館とパイワン族の物質文化の研究：史前館近年の仕事を例にして」パイワン族の研究会で発表（2021/10/30-31）。

[3] 史前館ホームページ資料 http://www.nmp.gov.tw

出社群との協力研究。（二）原住民の文化資産への注目を喚起する。（三）再び台湾原住民の織物への注目に火をつける、服装文化のブームへ。（四）部族中の差異を重視する例えば区域或いは家族。（五）族語の記録と主体解釈権を重視する。（六）原住民物質文化はその時の意義を反省する。論点は以下のとおりである。

（一）館内の蔵品の応用と源出社群との協力研究。

かつて系列に整理した「台湾原住民物質文化」委託研究の成果報告、私たちはすべて学者であることに気づき、それは一時的な選択である、史前館の館蔵研究は学者が委託対象ではない、文化財の源出社群である、族の人々で解釈と脈絡の立て直しを信じる。これはトレンドであり、社会的実践の方法でもある。

（二）原住民の文化資産への注目を喚起する。

かつて「手作り手芸」であるが、文化の多様性を今も守ろうという声があるため、これら手作りの手芸は原住民の文化資産となる。史前館はこのような価値を高めるだけではなく、現代の技術力を応用して保存している。

（三）再び台湾原住民の織物への注目に火をつける、服装文化のブームへ

2017年原住民の服のリメイクが２回開かれた。一つ目は、パフォーマンス形式の記者発表会には、大きな反響を呼び起こした。その後も数回にわたってセミナー形式の研究会を開催した。講演者を招待し、発表形式で行い、意味合いに関係なく、英雄も同じ意見だった。「リメイク」をテーマに原画を製作した「誰が迷子になった」という番組は金鐘賞という賞を得ることができた。番組のなかの重要な撮影素材もインタビューの対象も史前館を協力対象にしていた（進行式）。その後人間国宝に表彰された。これらの成果はすべて原住民の織物、服装文化の復刻が重要なポイントである。史前館にこの数年の協力と支援によって、台湾原住民の織物、服装文化の復刻風潮に関わり、博物館が新しい時代における社会責任を果たすために皆さんとともに前進していく。

（四）部族中の差異を重視する例えば区域或いは家族。

ガラスビーズの研究を例にして、家伝のガラスビーズは継承していくような資産である。まだたくさんのガラスビーズが異なる家族の歴史事件を付着している、各自の文化ストーリーと異なる角度から見るとそれぞれの違いに気づく、私たちがやっている中、特別にパイワン族のいろいろなところから社会文化、文化財の探索、人との関わりを記録するのを増やした。また、計画中族語絵本《Patjedjalan結婚式》は、地域家族を軸にして、当時の結婚式の様子を再現し説明する。民族集団における地域的な家族格差を重視する。

（五）族語の記録と主体解釈権を重視する。

「織序」計画を例にすると、今回の協力の視点を記録と織物の製造技術を保存過程で部落の伝統文化及び規範は、典蔵文化財を通じて工芸品が伝えたいものに遡って、昔の工芸教育の時に使う関連用語を基にし、伝統的な教え方と解釈のモデルを取り戻す。素材、製作技法、色の使い方及び専属図紋、これらは続けて部落を推進していくには工芸学習の復帰と文化養成の過程は重要である。伝習技術の流失と解決方法を改善し、部落を建て直すのと文化解釈の整理方法、教育資料の研究に参考事例を提供する。

（六）原住民物質文化はその時の意義を反省する。

現在の布地、各種の製造が便利になり、現在の社会のなか、なぜパイワン族の文化財の制作方法の知識と技能を追いかける必要があるのか。私たちが追及したいのは、「物質文化」である。これらの「物質文化」から文化に対する認知、或いは原住民に関する知識、言語文化的な意味合い、信仰の意義、

階序意識を連鎖させ、パイワン族の文化認知者らを未来へ導くことができる。原住民の物質文化を保存することで、将来へ継続して発展する可能性を潜んでいる。

参、議論する

以下は鳥居龍蔵博士が撮影したパイワン族の環境、物、と当時の様子の移り変わりの写真について説明する。

一、古い写真と地理結合についての研究と応用

写真の撮影には確実に調査コースがあるため、その経路は地理位置の資料は注目する価値が高いし、応用のポイントにもなる。なぜなら写真の地理位置と資料ははっきりと照合しているからである。現在の地理位置と照らし合わせて比べてみてその変化を議論できる。一つの例を挙げられるのは游永福が著書した≪湯姆生を探す：1871年台湾文化遺産大発見≫（游永福2019）。1871年湯姆生と馬雅が各自アモイから船で出発して台湾に行った。４月２日に打狗（高雄）上陸して、台南、木柵、甲仙、荖濃、六亀里、枋寮、再び木柵に帰った。たくさん人物を含む、服装関連、建物、動物、産業、生計、風景と景観などの様子の写真を残していた。游永福さんは2001年から湯姆生が詳しく南台湾関連を表現している写真を60枚整理した。当時湯姆生が歩いて回ったところ、打狗から木柵まで、≪湯姆生を探す≫から参考して「線性文化遺産の経路」について書くことを望んでいた。（游永福2019）。

鳥居龍蔵博士が残している資料の例から見ると、その中似ている属性、特質の経路は乏しくないのがわかる。鳥居龍蔵博士の旅のなか「浸水営古道」、「紅頭嶼」は今後継続して発展できる経路である。その他古い写真の記録は旧村落の場所（site）がその時の原住民のルーツであり、この記録は文化を甦らせるためにも重要なものである。

二、古い写真の資料の範囲拡大

今回の初期探査によって、文字の記述が最大の情報量を得ることができることを発見した。しかし、写真には視覚の補完に役に立つし、写真の資料から当時の状況の縮小画像を見ることができる。それなら同じ時期の写真を利用して（例えば日本統治時代）、各環境の情報を統合し、同じ物を探査し、有意義なテーマを探し出す。例えば、森丑之助、伊能嘉矩、瀬川吉孝の資料を参考して、当時各地で発行されたはがき、写真集などでもっと環境についての情報を得ることができる。今回は研究の準備期間が少ないため、鳥居龍蔵博士のパイワン族の写真の解析分析しかできていない。その他違う時期の写真を集める例えば中研院任先民さんが撮影した旧古楼或いは旧来義村落の写真（史前館に贈与した）、現在の村落の様子と照ら合わして研究と分析し、当時の文化と環境の変化を解析できる。

三、今後継続して研究の潜在的なテーマ

今回の初期探求は村落、集落写真は今後継続して研究のテーマを発見した。地理位置以外には、多数の研究テーマに繋いで行く可能性がある。例えば、地形の様子、建築材料、建築様式、人口、場所、当時の社群、旧社の考古など、例として、パイワン族の旧村落の規模が大きく、人口も多く、どんな条件でこのような規模になったのか。その他の山寄りの族群と比較する（例えばタイヤル族、族）村落の規模が大きく、住居時間が比較的に長く、住居の移動も少なく、これは自然環境と関連しているのか。気候と関連するのか。山の標高或いは森の群様に関連しているのか。また社会相互の変化に関連しているのか。村落の古い写真は周辺の開拓の様子をみることができ、その特徴を探求と議論するのは今後継続して研究には潜在的なテーマである。

肆、結語

今回は鳥居龍蔵博士が撮影した写真をテーマし、環境、種族とその時の様子の移り変わりの初歩の

探索をした。研究期間中写真に写している植物の弁識は比較的不透明な点が多い。したがって状況或いは周辺の景観と照ら合わすことで、鑑識の意義と運用価値はより明確になる。古い写真と地理の結合の応用上、「線性文化遺産」はもう一つ展開できる議題になる。地社群と協働して文化観光、旧社（祖先の住居）へ帰る、先人の足跡を踏むなどの活動に発展することができる。

その他、今後継続して研究に潜在的なテーマは集落景観或いは開拓風景は期待できる研究テーマである。古い写真の資料の範囲を拡大して日本統治時代のその他の資料、例えば、森丑之助、伊能嘉矩、瀬川吉孝の資料を参考して、当時各地で発行されたはがき、写真集などの資料、各種手稿、文献、出版物など加えて、更に地社群の訪問談話、協力、他分野の分析、村落の場所の選択、人口生態による環境に変化（考古）研究を含む。日本統治時代に残された写真の資料は各方面からの情報を含まれている。これから私たちが違う視点から研究して、解読して、新しい潜在的な研究を生み出して、過去の解明から未来に繋いでいく。

伍、謝辞

本文章の作成には、「鳥居龍蔵台湾調査顕影計画」計画責任者王長華館長、南科考古館田詩主任、研究員陳俊男、林慧仙、曾于宣及び、台中教育大学の鄭安晞教授の協助;計画チームメンバーの協助、実際の現地調査の経験の提供；鄭安晞教授も多数の古い写真の資料を提供し、豊富な現地調査の経験の提供、互いに未來の旧社の研究の可行性についての交流はとてもいい刺激となった。感謝を申し上げます。

図キャプション

図 1　パイワン族内社（来義旧部落）番号 141-7215，1900/1/28 撮影
図 2　パイワン族内社（来義旧部落）番号 142-7226。
図 3　古楼社。番号 144-7414。
図 4　力里社旧部落。番号 159-70774。
図 5　Ko 部落（板岩）。番号 174-7455。
図 6　某部落。場所不詳。番号 177-7534。
図 7　開拓景観、地名不詳。番号 193-7528
図 8　*upu*（パイワン族砌石紋）余明旅撮影。
図 9　刺竹（太麻里社）。番号 147-7347。
図 10　刺竹、場所不明。番号 212-7521
図 11　頭飾りはサンセベリアの花（牡丹社頭目）番号 158-7001
図 12　ねじれた糸（カラムシ）地名不詳。番号 186-7557。
図 13　ゲットウ pokari 社。番号 161-7172。
図 14　ゲットウ punntexi 社（佳興社）。番号 173-7025。
図 15　水牛（下蕃社）。番号 154-7326。
図 16　水牛が渓谷で解体されている（牡丹社）。番号 155-7180。
図 17　豚とビンロウ（場所不明）。番号 181-7533。
図 18　鶏と穀物倉庫（場所不明）。番号 180-7719。
図 19　ウンピョウ皮の衣服（力里社）。番号 162-7454。
図 20　ウンピョウ皮の衣服（場所不明）。番号 188-7725。
図 21　衣服の織紋。番号 285-7717。
図 22　衣服の織紋。番号 291-7710。
図 23　衣服の織紋。番号 305-7696。
図 24　ガラスビーズ飾り（pairusu 社）。番号 169-7032。
図 25　ガラスビーズ飾り（場所不明）。番号 203-7196。

日本の初期人類学と鳥居龍蔵

～起源探究の方法論への関心～

野　林　厚　志

1　目的

本発表の目的は、明治時代初期に産声をあげた日本の近代人類学の関心が、鳥居龍蔵（1870-1953）の研究活動の手法にどのような影響を与えたかについての課題を提起することである。具体的には人類学の１つの課題である「起源」の問題を探究するために鳥居が採用した調査、研究手法の起源をたどってみたい。

人類学は人類の起源と文化とを明らかにすることを目的とする研究分野であり、19世紀の初頭から半ばにかけて西洋を中心に定着した。日本の人類学は明治10年（1877）にアメリカの生物学者であったエドワード・S・モース（1838-1925）による大森貝塚の発見にはじまり、学界としての組織化は、当時東京大学の理学部の学生であった坪井正五郎（1863-1913）たちが、「じんるいがくのとも」と命名された団体を結成した明治17年（1884）であるとされている。

鳥居の学究生活は、明治維新から少し時間が経過し日本が国際社会に本格的に加わった時期から、第二次世界大戦の結果、一時的に国際的な立場が弱まるまでのおよそ半世紀にわたる。日本は西洋の技術や学問、思想を吸収しながらも、近代国家成立の過程で日本というアイデンティティを確立するとともに、西洋の国々同様に植民地を海外に求め、日本を拡張しようとした。

近代人類学は18世紀から19世紀にかけて帝国主義、すなわち外国に対する政治的・経済的支配を台頭させた西洋諸国が自分たちとは異なる民族と接触するようになり、文化研究への新たな関心を呼び起こしたことがきっかけとなっている。資本主義経済、工業化、世界的な商業活動のもとで、西洋の国家や資本家は商品の生産に必要な原料と労働力、さらには市場をもとめ異国の地に目を向けた。また、外国で新しい生活を築こうとした貧困層を中心とする移民も出現した。こうした背景のもと、西洋の帝国主義国家はいち早く、太平洋、アメリカ、アジア、アフリカなどの地域に植民地を開拓し政治的、経済的支配を拡大した。

西洋諸国が植民地開拓を通して経験したのは、今まで生活してきたものとは異なる環境であった。異なる気候、地形や地勢、異なる生き物、その中には先住していた人間も含まれていた。これらのものを調べ、植民地に関する知識を蓄積していく学問の１つとして人類学は重要な役割を果たしていった。新しい文化や見知らぬ人々への強い関心とそれらを理解するためのフィールド調査が世界の各地で行われたのである。

日本における人類学も同様な道筋をたどっていった。台湾、朝鮮半島、旧満州地域への植民地の拡大は、当該地域の自然やそこに住む人々の生活や歴史を調べ、それを記録し蓄積していく営みへつながっていった。

ここで留意しておきたいことの１つは、日本が植民地にしたり支配をおよぼした地域が昭和に入るまでは台湾や朝鮮半島、旧満州といった日本から比較的近い地域だったことである。そして、鳥居が踏査し学究活動をしばらく続けたのもこれらの地域とほぼ重なっている。これらの地域で鳥居が扱った内容は様々ではあるが、共通した関心の１つに、それぞれの地域における人類の起源と文化の起源とがあった。特に台湾における調査では、原住民族の来歴や彼らが何者かということ、つまり人類学的な位置づけの解明であったことはすでに多くの研究者の間で同意が得られていると考えてよい（宮岡2021：36）。

起源は人類学の基本的な関心ではあるが、鳥居にこの問題を考えさせるうえで彼が日本人の起源論に早くからふれていたことには留意しておく必要がある。起源論に必要なアプローチは多様であり、形質、考古学も含めた歴史へのアプローチ、口碑伝承や言語、基本的な技術等、研究者は自分たちの専門性を活かしてこの問題に取り組むが、鳥居は自ら様々なアプローチに取り組んだことにその特色があった。この特色が醸成された過程について本稿では考えてみることにする。

2　日本における起源への関心のおこり

最初に述べたように、人類学の基本的な関心は人類の起源、文化のおこりと変化である。そして、起源の問題は人類全体だけでなく、それぞれの地域において、いつ頃から人が住み始めたかも重要な課題であり、地方史、地域史をつなぎあわせていくことにより全体像が描けることになる。そして、それぞれの地域の文化のおこりと変化は人類の移動や接触によって説明される。

日本人の起源や日本における文化のおこりは、いわゆる近代人類学の研究が日本で開始される以前から人々の関心を集めていた。例えば、石器や石鏃は雷雨や激しい雨によって土が流された後に見つかることがあり、人類学や考古学、歴史学といった研究が本格化する明治よりも前には、雷神と結びついていると解釈されることもあった。一方で、新井白石のように、石鏃が粛慎とよばれる北方から日本列島へ侵入した異民族の国家の人々の手によるものであると解釈したり、北海道江差の商人であった村上弥三兵衛のように、アイヌが石器を用いていたという民族誌的な知見から石斧を人工物だと考えた人たちが存在した（寺田1975：7）。

また、近代人類学の導入以前に、日本人の起源や文化のおこりについて考えたのは日本人だけではなかったことにも留意しておく必要がある。江戸時代に日本に滞在し、日本に関する多くの情報を西洋に伝えたドイツ人医師フランツ・フォン・シーボルト（1796-1866）はその代表であろう。シーボルトは、オランダ商館医として長崎の出島に派遣された。日本に滞在中には全国から蘭学を学びに来た学者たちの協力を得ながら、日本の調査・研究を行い、その成果をドイツ語による*NIPPON*（1832-1851）といった書籍で公刊していった。その中で彼は日本には石器時代が存在しそれを担ったのはアイヌだろうと述べ、西洋でアイヌが日本人の起源に深く関わっていることが強く印象づけられる要因となった。さらに、シーボルトの息子であるハインリッヒ・フォン・シーボルト（1852-1908）、小シーボルトは、明治にはいって来日し、日本人は中国か朝鮮あたりでしだいに混血して形成され、各地域の集団の容貌を区別できるのは混血の程度によること、さらに周辺のアジア諸地域にも類似点が見られることを指摘した（シーボルト1879）。

このように考えると、日本に人類学が導入されたから人類や文化の起源の問題が扱われるようになったとは必ずしも言えず、もともとあった起源の問題が人類学や考古学、歴史学という学術的な手続きをもって扱われるようになったと考えてよいであろう。

3　日本列島の先住民は誰か―初期のプレ・アイヌ―アイヌ論争

人類学者寺田和夫（1928-1987）が、「日本の人類学がその胎動期に、モースのようにあらゆる意味で優れた人物を持っていたことは幸いであった。」（寺田1975：11）と評するように、モースの活動は人類学における日本人の起源論のみならず、学術研究の嚆矢をなすものであった。モースは大森貝塚の発見、発掘で有名であり、その精緻な記録や記述は現在も考古学史の研究の対象となっている（田中2018）。加えてモースの貢献としてあげておくべきことは、調査報告書や学術論文の作成、文献や資料の海外との交換という研究活動を日本の学界に導入したことである。モースの、*Shell Mounds of Omori*（1879）は、日本における大学紀要の第一号と言ってもよい位置づけで、大森貝塚から出土した土器片の一部は、おそらく今や世界最大の博物館組織となったワシントンD.C.のスミソニアン協会、考古学研究でも有名なハーヴァード大学のピーボディ博物館、イェール大学の大学博物館に、モースの標本交換を通して収蔵されている。

モースは大森貝塚の発掘を通して、日本人の起源論争のきっかけとも言えるある仮説を出したことはよく知られている。その要点は以下の通りである。

（1）大森貝塚を作った人たちには食人の風習があった。

発掘資料に破損した人骨が含まれていたことが根拠とされていた。

（2）扁平脛骨の出土から、これらの人たちは比較的古い時代の人たちであった。

脛骨が扁平した形になるのは下肢の筋肉の使用が強いことと関係があるという考え方である。

（3）出土する巻貝の頂角から暖かい古い時代に大森貝塚が作られた。

モースの仮説は、大森貝塚を遺した人々は土器を製造し、アイヌかその前のプレ・アイヌを想定した場合に、アイヌは他の北方民族同様に土器作りはしておらず、また食人の風習もないことから、大森貝塚はアイヌ以前の先住者の手によるというものである。

モースの仮説は一般にプレ・アイヌ説とよばれ、内外から相応の反響があった。ただし、この時期には日本の国内で人類学や考古学の観点から論争に参加できる研究者は限られていたし、モースは必ずしも日本語で論考を著してはいなかったこともあり、議論の中心は西洋にあったと言ってよい。イギリス領事館に医師や弁護士として赴任していた日本文学者でもあるフレデリック･ヴィクター･ディキンズ（1838-1915）は、大森貝塚は比較的年代は新しいもので、アイヌによるものと考えたほうがよいと*Nature*で自説を表明したことを皮切りにして、プレ・アイヌーアイヌの論争が展開した（松村1926：74）。

この他には、モース同様に日本に招聘されて東京医学校（東京大学医学部の前身）で教鞭をとったエルヴィン・フォン・ベルツ（1849-1913）が、生体計測、生体観察、頭骨の研究から、日本には華著な体つき、長頭、細長い顔、つり上った眼、中高の鼻、小さい口などを特徴とする「長州型」と、ずんぐりとがっちりした体格、短頭、幅広く寸づまりの顔、張っている頬骨、つり上がらない眼、低い鼻、大きな口などの特徴をもつ「薩摩型」の２つの異なるタイプの集団があり、アイヌとは区別できるとした。また、先述した小シーボルトは考古学的な知見にもとづき、日本の遺跡を２つのタイプに分類し、１つは青銅を伴い、朝鮮半島や大陸中国由来の原石でできた曲玉や菅玉を含み、もう１つは骨角器を伴い、日本の石材で作った打製や磨製の石器を含むもので、後者はもともとアイヌによるものだと解釈した。

鳥居は西洋人中心となった議論の開始について、以下のように述懐していた。

「ところで当時日本人のなかでモース氏に応じて、研究する者は１人もなかった。日本人以前にカーニバルを行つた民族が居住したというこの破天荒の掌説に対してすら、１人の反対する学者もなかつたことは不思議である。―中略― ヨーロッパでこのような意見が出たとすれば忽ちこれに対して激論・反対論が起るに違いない。いわゆるコントロヴァーシーが捲き起るであろう。」（鳥居1954：86-87）

もし自身がこの時代に学究生活に入っていたら、自分こそは議論に加わっていただろうという鳥居の批評精神を感じさせる一文である。そして、これは鳥居の絶筆としても知られている。

いずれにしても、西洋の研究者たちが中心となり展開した日本列島の最初の住人をめぐる議論は、日本の人類学、考古学の学界をかたちづくる組織の編成によって、日本人研究者が中心となり、問題意識をもった調査や研究が志向されていき、それに鳥居も少なからず関わっていくことになる。

4　コロボックルーアイヌ論争と鳥居との関わり

坪井が設立した「じんるいがくのとも」には機関誌があり、最初期には坪井の手によって『じんるいがくのともよりあひのかきとめ（人類学の友寄り合いの書き留め）』として残されており、1940年に東京人類学会（当時）から出版されているが、1886年には『人類学会報告』という出版物が正式に刊行された。コロボックルーアイヌ論争のはじまりを作ったのは、従前の雑誌が名前を変更した『東京人類学会報告』の第11号に掲載された雑録「コロボックル果シテ北海道に住ミシヤ」であった（M.S.1887）。

筆者がM.S.とされている同文は、のちに植物病理学者となり東京帝国大学の教授を務めた白井光太郎（1863-1932）の手によるものである。将来、植物学を専門とする研究者が日本列島の先住者に係る議論の先鞭をつけたことは興味深い。白井は坪井とともに「じんるいがくのとも」の創設のメンバーの１人であり、鳥居にして「白井光太郎さんの方が坪井さんよりはむしろ専門家のように」と思わしめた舌鋒するどい人物であった（鳥居1936）

白井は『人類学会報告』の創刊号に掲載された、後に動物学者となりやはり東京帝国大学の教授となった渡瀬庄三郎（1862-1929）が札幌近傍にある縦穴から土器片が出土していることを聞き及び、これはコロボックルのものではないかという見解に対し、かなり強い論調で批判した。それに対して坪井が応戦しそれが何回か続いたのである。一連のやりとりについては寺田が詳しい解説を行なっているので（寺田1975：52-55）、詳しくは述べないが、白井が、コロボックルの存在を信じる者は以下のことを認めるものだとした６つの項目については列挙しておこう。

（１）コロボックル人種は嘗テ日本内地ニ蔓延シ信、美、北越、武、總、奥羽等ハ其巣窟ナリシ
（２）コロボックル人種ハ日本人種ト交通セシ
（３）日本歴史上ノ蝦夷ヲ以テコロボックルニ當テザルヲ得ザル
（４）アイノ（ママ）祖先ハ土器石鏃石斧類ヲ使用製造セザリシ
（５）アイノ（ママ）丶祖先ハ穴居セザリシ
（６）野蠻人ノ口碑を慢リニ信用スル

かなり一方的な内容であり、その論理展開には疑問も多いのだが、これらが議論の出発点になったのは事実であった。

白井のこれらの論点に対して回答したのが、コロボックル説の主導者となる坪井であった。坪井は、（１）と（２）は認めるが、（３）については蝦夷という地名の指す範囲の曖昧さからこれを認めない等、比較的冷静にこれに応えている。この坪井の回答に白井が応酬するといったことが『東京人類学会報告』上に数回続いた。

この応酬の後、坪井は自ら北海道に赴くことになるが、その時（1888年）に同行した解剖学者である小金井良精（1859-1944）が日本列島の石器時代を担っていたのは現生アイヌの祖先集団であるといういわゆる「アイヌ説」を白井以降に発展させた。

このあたりから、日本列島の住人もしくは日本文化の起源に関連したこれらの２つの主張、すなわち坪井が中心となって主張した「コロボックル説」と小金井らによる「アイヌ説」の論争が本格化していく。もっとも、「コロボックル説」はもともと坪井から発せられたものではなく、コロボックルなる集団は日本列島には住んでいなかったという様々な主張に対し、坪井が反論を重ねていくうちに作り上げられたという見方もある（寺田1975：56）。

坪井の「コロボックル説」がある種の到達点を見せるのが「石器時代要領」である。これは、「日本石器時代人民遺物発見地名表」（1897）の中に含まれたもので、アイヌに対する先住民について以下のように述べられている。

昔「アイヌ」ノ日本々州ヨリ北海道ノ地ニ移リ來リシヤ、此地ハ决シテ無人ノ境ニハアラザリシナリ。「アイヌ」ニ先チテ此地ニ鬚髯無キ人民棲息セリ。彼等ノ住居ハ竪穴ニシテ屋根ハ主トシテ蕗ノ葉ヲ以テ葺ケリ。彼等ハ石製ノ利器、土製ノ鍋椀ヲ使用セリ。彼等ハ始メ「アイヌ」ト平和ノ交際ヲ爲シ物品交換ヲ行ヒ居リシガ、後十勝ノ地ニ於テ爭ヒヲ生ジ、「アイヌ」ニ接近シテ住スルヲ厭ヒ、同類相卒ヒ漸次北ノ方ニ移リ往ケリ。彼等ハ一種輕キ物質ヲ以テ造レル舟ヲ有シ、陸上ニテハ之ヲ荷ヒテ歩ミ、水上ニテハ之ヲ浮ベテ乘レリ。「アイヌ」女子ノ入レ墨ハ彼等ノ女子ノ風ヲ學ビタルナリ。

「アイヌ」ハ先住者ヲ呼ブニ種々ノ名ヲ以テセリ。就中記憶シ易ク發音シ易キハ「コロボックル」ト云フ稱ナリ。「アイヌ」語ニテ蕗ノ下ノ人ノ義。蕗ノ葉ヲ以テ屋根ヲ葺キタルガ故ニ此名有リ。（本州居住ノ者モ假ニ此名ヲ以テ呼ブ可シ。）

「コロボックル」繁盛ノ時代ハ今ヲ距ル事凡ソ三千年前ノ頃ナラン。

この間にも小金井はアイヌ説に着実に肉付けをするために、「北海道石器時代ノ遺跡ニ就テ」（1889）といった論文を発表する一方で、「本邦貝塚ヨリ出タル人骨ニ就テ」（1890）のように、貝塚を担った過去の集団がアイヌと近縁であるとは言い切れないような内容のものも発表している。そして時代としてはやや後にくだることになるが、小金井は自らのアイヌ説の集大成とも言える書籍『日本石器時代の住民』を1904年に上梓する。その中にしばしば登場するのが鳥居による知見であった（図１）。

1893年に鳥居が東京帝国大学人類学教室の標本係になった頃には、「コロボックル説」も「アイヌ説」もほぼ確立したものになっていたと考えてよい。鳥居にとってこの論争の存在は千島アイヌや台湾における先住諸族の調査、日本の被差別部落での調査（関口2011）にもつながったと言える。

図１　鳥居・坪井・小金井三氏の大学助手時代における千島アイヌとの記念写真。前列左・中央が千島アイヌの人々。前列右が鳥居龍蔵、後列左が小金井良精、後列右が坪井正五郎。早稲田大学図書館蔵

鳥居が1899年に行った千島アイヌの調査が結果的には「コロボックル説」を否定することにつながったことは人口に膾炙するところではあるが、もともと「コロボックル説」には「穴」が相応にあったと考えてもよい。むしろ、1904年に刊行された鳥居の『千島アイヌ』において、同書が２冊組であり第２巻に項目として予定された「（六）コロボックル説について」で鳥居が何を書こうとしたのかは興味深いところである。結果的に第２巻は刊行されず、鳥居の見解は自らが調査した千島について、コロボックルが存在したとは考えにくいことを指摘するにとどまっている。

5　考察―形質、物質文化、口碑、技術と台湾でのフィールド調査

鳥居龍蔵記念博物館（以下鳥居記念館）が鳥居の野帳の公開を開始し、筆者をはじめとする台湾原住民族の研究に携わってきた者で構成したグループが、鳥居の残した資料を鳥居記念館と協働しながら分析する研究プロジェクトを2022年から開始している。フィールドの現場で書き綴った野帳や書き込む欄を節約した生体計測のプロトコールの解読は必ずしも容易ではない。一方で、これらを丹念に読み込んでいると、様々な評者が論じてきた鳥居の調査の視点をより具体的にとらえることができるとともに、当時の他の研究との方法論的なつながりのようなものも感じ取れる。公刊されたものにはない情報を与えてくれる唯一無二の鳥居の活きた資料である。

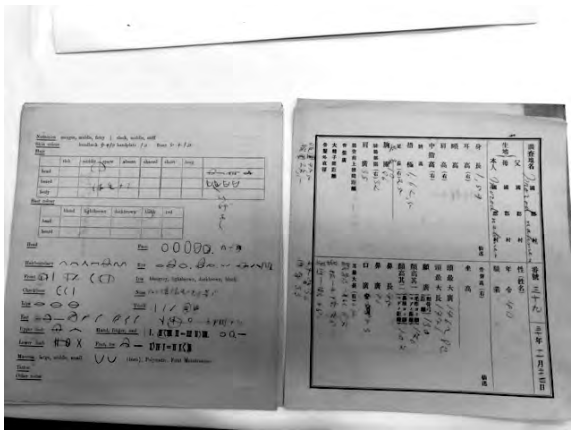


図２　鳥居が使用した生体計測用のプロトコール。第２回台湾調査で用いたものである。Imorodという記述から当時の紅頭嶼のイモロッド集落での調査であることが理解できる。鳥居龍蔵記念博物館蔵

その１つが鳥居のフィールド調査の基本となった生体計測に関する資料である。鳥居は効率的にこれを行うために印刷されたプロトコールを準備している（図２）。鳥居が当時おかれた環境は総合人類学、すなわち、生物学的側面と文化的側面の双方から人類を研究するものであると考えられてきた。その創始者は坪井

であり、坪井にとっての人類学は人類の諸性質に関する研究を司る所の自然史、或は理学、すなわち人類に関する博物学であったとされることが多い（坂野2004：36）。もちろん、この評は一般的な説明としてはよいのだが、具体的な研究や調査の手法という点においては、坪井が博物学的もしくは理学的な方向性を持っていたとは必ずしも言えない。それは、『人類学会報告』や『東京人類学雑誌』によせられた坪井の論考や同時代の他の研究者の論考をみれば明らかである。自らが形質、生体計測を行うといった調査の報告が極めて少ないのである。

これに対して、鳥居は初期から形質調査の論考を世に送り込んでいった。「穢多に就ての人類學的調査」（1897）、「黥面蕃女子の頭形」（1904）等、内外で形質人類学の実際の調査を行った結果を公開している。コロボックルーアイヌ論争でものを言わせた形質人類学の実証性を鳥居は強く認識していたのかもしれない。一方で、坪井が得意とした考古遺物の解釈を中心とする物質文化の研究についても鳥居は積極性を見せるし、口碑や言語も合わせて調査しそれを報告することを怠っていない。「コロボックル説」の１つの拠り所がアイヌの人たちに伝わる口碑伝承であり、それが起源論を考えるうえで無視できないことを感じとっていたのであろう。

従前のことに加えて鳥居が意識した視点についても１つの指摘をしておきたい。技術の問題を鳥居は強く意識していたことである。

鳥居の台湾調査の野帳や公刊された論考でしばしば言及されるのが、「モールス氏の射法」である。これはモースがまとめた世界の諸民族の弓矢の技術に関する解説書、*Ancient and modern methods of arrow-release*（1885）に収録された５つに分類された射法のことを指す。モースは同書の冒頭で、日本に滞在した時に日本の弓術を見て弓の射法に関する問題意識に目覚めたとしている。

モースの定義した射法は以下の通りである。

（１）第一射法

世界中の子供たちが弓矢を初めて使用するときに自然に採用するもので、まっすぐ伸ばした親指の端と曲げた人差し指の第一関節と第二関節の間で矢をつまむ方法となる。軽い弓や弱い弓ではこうしたリリースが最適とされている。モースはこの射法をアイヌが採用しているとし、張力が強く短い弓ではアームガードは必要とされないということにも言及している。アイヌの他には南米の先住民やナヴァホがこの射法を採用していると述べている。

（２）第二射法

第一射法を発展させたもので、伸ばした親指と曲げた人差し指を曲げて矢を握り、第２指と第３指を弦に当てて、矢を引きやすくするものである。アメリカやカナダのオタワがこの射法の例にあげられている。

（３）第三射法

アメリカ中西部に居住する先住民族であるオマハの知識人がモースに示したとされるもので、人差し指は曲げず、ほぼ真っ直ぐにして、第２指と第３指の先端で弦を押したり引いたりし、親指は第１射法や第２射法と同様、矢をつまんで引き戻すのに使われる。コマンチやナヴァホ、ブラックフットにもこの射法は見られるとともに、弓の方向を垂直ではなく水平方向にした射法と記載されている。

（４）第四射法

北地中海沿岸諸国では何世紀も前から、南地中海沿岸諸国では何十世紀も前から存在し、文書記録もある射法である。ヨーロッパ全体に見られ、第１、第２、第３指の先端で弦を引き寄せ、指の末端の関節はわずかに屈曲させるものである。モースは地中海式リリースとも読んでおり、現代の競技アーチェリーもこの射法を採用している。モースはイヌイット（モースはエスキモーと表現）やアンダマン狩猟採集民にもこの射法が採用されていることに言及している。

（５）第五射法

第１～４射法までは連続して変化を見せたり、必ずしもそうでない場合もあるとしながら、それらとは全く系統の異なる射法として、中国、朝鮮半島、日本、トルコといったアジア系集団に特徴的な別名モンゴル式リリースと呼ばれるもので、弦を親指にかける射法である。現代の日本の弓道も同じ方法をとる。

鳥居は台湾の先住諸民族の調査において、この射法の分類にこだわっていたことが「臺灣阿眉蕃ノ弓箭放射法ニ就テ」（1899）にも表れている。鳥居によれば、アミ族の射法はもっとも始原的である第一射法であるとともに、漢族との交易によって鉄鏃の導入の可能性を検討している。物質文化の変化と技術の維持との関係も鳥居は意識していたことが理解できる。

このように、鳥居は起源論を考えるうえで様々な視点を持ち合わせていた。そんな鳥居が台湾にフィールド調査に入ったのである。台湾における起源の問題に否応なく向き合うことになるのは自然な流れであったと考えてよい。そこで出会ったのが日本と類似した起源の問題の構図であった。すなわち、大多数を占める漢族系住人、山間地を中心に居住していた原住民族、原住民族の間に伝わる小さな先住者の口碑伝承等々、「コロボックルーアイヌ」論争で交わされた応酬の１つ１つを台湾におけるフィールド調査にあてはめることができると鳥居が考えた可能性は小さくない。ただし、これらの要素が鳥居の中で連結した時、すなわち、「臺灣の小人はニグリトーなりしか」（1907）を発表した時、鳥居はすでにモンゴルでの調査を開始していた。鳥居はその後、第５回目の調査をサイシヤットが居住しいわゆる「小人伝説」も広く伝わってきた地域である新竹や苗栗で行いながらも、台湾での調査はそこで終わっている。鳥居による台湾の人類起源論もそこから発展することはなかったようである。

6　結び

鳥居は日本列島における人類集団の形成、換言すれば、日本人の起源もしくは日本文化の起源の論争の過程を肌身で感じながら研究者になるための準備期間を過ごした。これは後の鳥居の問題意識や研究手法の採用に少なからず影響を与えたと考えてよいであろう。もちろん学界の１つの主要なテーマに起源の問題は存在し、それにしたがった目的的な調査や研究が行われたことは事実であろう。一方で、鳥居は様々な情報や学術的知見をかきあつめて、それをつないでいく面白さを起源の探究の過程に見出していたようにも思われる。

最後に、鳥居の出した視点の今日的な意義についてふれておきたい。従前に述べた「臺灣の小人はニグリトーなりしか」（1907）という視点は、台湾における人類集団の起源の問題を考えるうえで一考に値するかもしれない。台湾における人類学や考古学の研究で焦点がおかれるのがオーストロネシア系先住民族集団と漢族との関係である。ここにもう１つの集団の存在を考えみる可能性を従前の論考は与えてくれる。つまり、焼畑・狩猟集団と農耕集団に加えて、フィリピンのネグリトのような狩猟採集集団の存在である。

すでに台湾では、台湾東部の小馬遺跡から発掘された約6,000年前の女性と判断された人骨が小柄であり、ネグリトとの親和性が高いという形態上の特徴を有していた報告がなされている（Hung et al. 2022）。狩猟採集集団の存在は弓射法といった技術の問題も議論の範疇にはいってくるであろう。鳥居の持ち合わせた多角的な視点がいっそう求められていくのである。

【参考文献】

M.S.「コロボックル果シテ北海道に住ミシヤ」『東京人類学会報告』11：70-75（1887）
坂野徹「科学史入門――坪井正五郎と日本における人類学研究のはじまり」『科学史研究』229：35-39（日本科学史学会　2004）
関口寛「20世紀初頭におけるアカデミズムと部落問題認識：鳥居龍蔵の日本人種論と被差別部落民調査の検討から」『社会科学』41（１）：125-147（2011）
田中英司『「大森介墟古物編」実測原図の研究』（東京大学総合研究博物館　2018）
寺田和夫『日本の人類学』（思索社　1975）
鳥居龍蔵「学界生活五十年の回顧（一）」『ミネルヴァ』1（８）：303-401（1936、『鳥居龍蔵全集第12巻』所収）
鳥居龍蔵「考古学の回顧」『地学雑誌』63（３）：85-88（地学会　1954）
ハインリッヒ・フォン・シーボルト『考古略説』（私家版　1879）

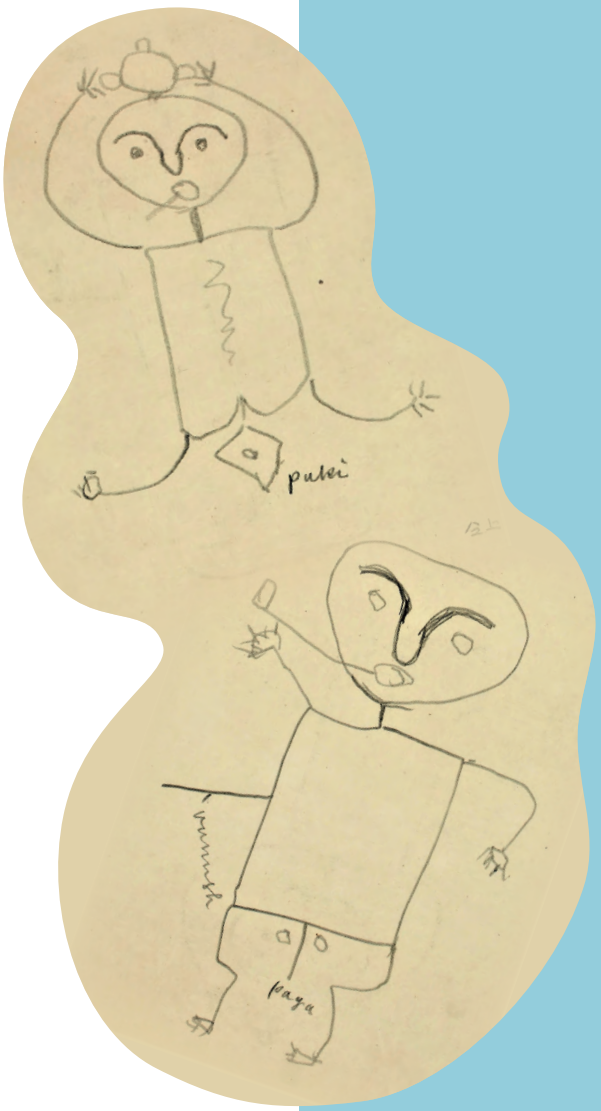
Hung et al. Negritos in Taiwan and the wider prehistory of Southeast Asia: new discovery from the Xiaoma Caves. *World Archaeology*（DOI: 10.1080/00438243.2022.2121315）
松村瞭「大森貝塚とモールス教授の研究」『人類学雑誌』41（２）：70-79（日本人類学会　1926）
宮岡真央子「鳥居龍蔵の台湾研究――残された資料の今日的意義」『鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会――その学問と資料の意義を問う」』pp.31-41（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館　2021）

執筆者・翻訳者一覧（掲載順、敬称略）

長谷川賢二（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）
石井　伸夫（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）
宮岡真央子（福岡大学）
陳　　俊男（国立台湾史前文化博物館）
林　　慧仙（国立台湾史前文化博物館）
曾　　于宣（国立台湾史前文化博物館）
山西　弘朗（香川大学）
張　　至善（国立台湾史前文化博物館）
永本　智富（徳島文理大学）
野林　厚志（国立民族学博物館）

令和4年度 文化庁Innovate MUSEUM事業
国際シンポジウム「鳥居龍蔵と台湾　資料の可能性を探る」講演要旨集

2023年３月12日発行
編　集　徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
〒770-8070　徳島市八万町向寺山　文化の森総合公園
TEL　088-668-2544　　FAX　088-668-7197
発　行　鳥居龍蔵がつなぐ台湾と徳島の文化交流事業実行委員会
（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館内）
印刷･製本　グランド印刷㈱



令和４年度　文化庁 Innovate Museum 事業